郷土特産品として赫々たる團扇業發展の共裏には氏の努力貢　献が鮮かに寫されて居る。

# 銘酒國華と垂水酒造合資會社

中西讃の酒造界に稀に見る芳醇なる品質を以て毎次各種品評會に出品して最高位の榮譽を擔ひ名聲天涯に秀づる仲多度郡垂水酒造合資會社は、金武治郎一氏の全力を注ぐ經營に銘酒國華の聲望は隆々たるものである。

同社は明治四十二年頃同村尾松爲治氏によつて創設された酒造場であるが、多難な環境に恨らく事志と違ひ數年を出でずして閉鎖するの止むなきに至つた。

當時同村金武治郎一氏はこの垂水村唯一の産業王城の沒落を見るに忍びず遂に大正三年同酒造場の後を受けて垂水酒造合名會社を創設し、自ら社長に就任して專心酒造業に沒頭したが更に大正六年に至り現在の合資組織に爲すと共に一段と内容の充實を期した。

共の後同社の躍進は年と共に目覺しきものあり、大正七年には酒造場の狹隘を來たし、遂に現在に酒造場を移して愈々本格的、活躍の資勢を整へたのである。斯くて共の年四國酒造組合聯合會の品評會に於て最優等賞の榮冠を受け、爾來文字通り日進月歩榮光の路を進み續けて、大正十一年西讃平野に於ける大演習當時には畏くも　攝政宮殿下の御買上を蒙る等千載一遇の光榮にも浴し、更に名聲を高めたのである。

今や同酒造場の造石は不況時代とはいへ一千石を超へ販路も縣下はもとより大阪、岡山、呉方面に及ぶ活況振りを示し他方金武社長は目下滿濃池常設委員或は同村々會議員等の公職につき且ての日の教育界に於て集めし信望に一層事業的勢望と信用を加へて重きを爲してゐる。



# コンピラ染料と伏見豊次氏

縣下化學藥品生産界の異彩は丸龜市鹽屋に於て伏見豊次氏の經營するコンピラ染料製造所であらう。同製造所の前身コンピラ染料株式會社は大正五年内田六兵衛氏らに依り資本金百五十萬圓を以て創立し琴平町に工場を設けて創業し、次いで大正七年には丸龜市鹽屋の海岸に現在工場を建設して、硫化染料の製造を以つて大々的に活躍を試みた。然るに同社の投資者が殆ど縣外なりしと歐洲戰後財界の一大反動に大正十三年解散の悲境に逢着した。現經營者伏見豊次氏は同社創立以來關係を有して居た功勞者である。氏は同社解散の直前大正十二年社業すでに末期にして收拾すべきなきを知るやこれを惜しみて共事業を繼承し同年十月製造を開始した。

爾來氏は勇奮を一途に製品の研究と内容の充實に寢食も忘れ四國に稀な業種を誇つて邁進を續ける中信望と聲價は次第に加はり今や年産約十五萬圓の硫化ソーダ各種芒硝鹽酸硝酸アミノ酸を製産し特に醬油の原料たるアミノ酸の未來性は囑望されてゐる。而して製品の主要販路は關西一圓に亘り殊に呉海軍工廠、住友別子鑛山、堺化學工業株式會社、帝國染料製造株式會社旭硝子株式會社等の堅實なる取引先を網羅し、一方原料は坂出專賣局創設以來四國唯一の特殊的に最も低廉なる青島鹽關東州鹽を輸入し、硫酸は住友肥料會社重硫酸ソーダは山口縣日本火藥會社より移入して、これに當てゝ居るが同所が斯くの如く躍進せし理由は永年の研究に基く確固たる自信を有し化學を好愛の天資と經營の凡ならざる才幹にある事勿論にして又その昔琴平にあつて一湯屋經營者たるの環境にあり乍時恰も化學藥品黄金時代歐洲大戰に際し染料研究に沒頭してゐた令兄の熱心さに善感心を奪はれた氏は遂に湯屋の一隅に工場を設けて藥品製造の研究中の藥品からの惡臭に浴客の非難あり、これに屈せず精進した如き秘話をもあるが、かくて遂に氏に與へられた化學の天職は今日の成功を致

さしめたのであらう是を思へばコンビラ染料に發して伏見氏に約束された明日こそ興味深々たるものがある。

# 株式會社多度津銀行

西讃金融界に君臨して永年の基礎は牢固たるものあり悠容たる業調を以て誇るは株式會社多度津銀行であらう。

多度津町は古く中世に香川氏地利の堅碍を察して居城を築きこゝに南海の覇を誇つた。其後德川時代となり而してその末葉に京極氏分藩を定むるや滿浦を築いて地利を拓き愈々物資集散の地港とはなつた。

かくて商業を以て地勢を築かれた同地は幾多の豪商蟠居しこれ等に由つて明治の文化は卒先扶植されたのである。即ち劃期的陸上交通に鐵道交通あり又電氣事業あり、現に縣下の各事業界に於ける其實力は陰然たるものにして、よく嘗ての繁盛に築かれた。基礎の嚴たるを覺へしむる。

爰に株式會社多度津銀行は明治廿四年八月同地の有力者景山甚右衛門、合田房太郎、丸尾熊藏、武田熊藏、淺見益之助武田定太郎等揃ひも揃つた錚々の諸氏は地に確固たる金融機關の必要を感じて、これが設立を發起し遂に資本金三萬圓の同行を創設した。景山氏は自ら頭取として行務の統營に當つた。爾來地の發展に伴ひ行務繁忙を極め明治二十七年遂に十萬圓に增資し、同時に琴平、丸龜、詫間等各支店を設置し、更に三十年二十萬圓に增資を敢行等全く同行は異常の進展を示した。

その頃預金は既に三十六萬八千餘圓に上り、時代の進運に魁ける目醒ましい躍進振りにして、其後預金貸出しの超增に因由し每期の配當は一割以上の好調を續けた、この長足昇旭の行運を展開せしめた景山頭取は大正四年經營の地位を辭して嗣子熊藏氏これに代り、更に熊藏氏の急逝に依つて今井浩三氏專務として行務を見るに至つたが、大正九年又もや增資の必要に迫られ資本を五十萬圓とし堅實を誇る一大銀行となつた。かくて昭和三年現頭取武田謙氏頭取に就任其の預金も三百數十萬圓に貸出又二百數十萬圓を擁して西讃金融界の雄に任じてゐる。



殊に現頭取の下にある支配人松宮薫氏は大正二年以來行務の發展に參畫し行是を恪守銀行家として逸材の評あり。斯くの如く同行の陣容は金融の重要機務に相應はしき完璧を以て西讃斯界の一偉容をなしてはゐるのである。

尙目下の重役は左の諸氏である。

取締役頭取　武田　謙　取締役　景山卯吉
專務取締役　今井浩三　監査役　鹽田忠左衛門
取締役　合田房太郎　監査役　武田亮太郎
取締役　竹田庄太郎　監査役　鹽田智章
取締役　武田茂祐

# 草薙賢策氏と松尾醬油

中讃醬油界にあつて其名實よく斯界の古豪たるは即ち多度津町草薙賢策氏の松尾醬油であらう。

氏の松尾醬油はその六代の祖久兵衛氏が天保元年の創始にかゝり當時藩主御用の醬家より分家せし久兵衛氏はこれが釀造に染手した素より初期に於ては百石前後の釀造にして殆ど試驗的事業に過ぎず、かくて久兵衛氏の歿後氏の養嗣子甚藏氏が業を繼いだが、氏は實に同家中興の祖にして同地の素封鹽田周助氏家より入嗣し、斯業の一大發展を畫した。

甚藏氏の息岩五郎氏は鹽田家を後嗣し當主賢策氏は先代精之祐氏の養嗣にして明治十三年同家に入家し明治三十年十八歳の頃より以來一意專心祖業に精進して自ら事業各般の機微を體驗し業務の仲展を圖つた。明治四十年には義弟晃光氏と共に斯業を合名組織となしたが、其の後歐洲大戰時の如き絕好の飛躍期として躍進當時約六ケ年間は第十一師團全官區の御用をつとめ或は阪神、中國、四國の全圓に素晴らしき展勢

を張つた。其後大正十五年晟光氏の他界に遭遇し且一般商況は反動の不況を萠せば時勢の非時を看破した氏は逸早く堅實をモットーの維持商策に轉向した、爰には氏が永年の事業的練達と堅實主義の然らしむる所があつて、爾後一般經濟界の危機に直面しつゝ尙且氏が超然たる業態にある所以でもある

## 中讃酒造界の重鎭吉田忠氏

西讃酒造界にその光輝赫々たる多度津町素封吉田酒造場は銘酒「男竹」「讃岐富士」の聲價を以つて斯界を風靡し更に近來の躍進は牢記すべきものがある。同酒造業は先代磯吉氏が明治六年創業せしところで大正五年同氏七十四歲の高齡を以て逝去、その後を享けし當主忠氏は若さと熱とを以て父業に精進今日の盛況を招來するに至つた。

今やその販路の如き多度津町を中心として縣下一圓に及び

日下草薙氏は中讃醬油同業副組合長として斯界に貢獻してゐるが政事には一切關心せず一途に自業を以て社會奉仕せんとの信念で邁進して居るも又床しいことである。

觀音寺町及び神戸市には專屬代理店を設置して異常の躍進を見せてゐるが、氏は本年四十六歲稀に見る圓滿なる士であつて、その人格は夙に斯界の德望を集め、現に本縣酒造聯合組合長丸龜管內酒造組合長、全國中央酒造組合議員及び管內釀友會議員の職に就き釀造界に貢獻すると同時にまた永年に亘る同町々議員、商工會、信用組合の理事として町政と產業に盡瘁してゐる。



## 銘酒破天荒と山本酒造場

多度津町に於て山本酒造場の如きは異數の產業騎士であらう。抑も同酒造場は明治廿二年先代山本林藏氏の創業にかゝるが、業を創めて以來氏は溫量の事業家として信用を高め着々基礎を固めた、大正八年氏が六十三歲を以て他界

し後未亡人かね女は當時二十一歲の息將八氏を鞭韃して亡夫の遺業をその纖手に支へこの間同女の健鬪は六尺の壯士をして尙瞠若たらしむべきあり。斯て同酒造場をして今日の盛業を見せしめてゐる。

この健鬪美談の持主かね女否賢母の下に精勵する將八氏は本年卅四歲亡父の商則を守つて活躍しつゝあるが、その吟釀する銘酒破天荒、桃陵正宗は各種博覽會に屢々入選し榮冠を獲得しつゝ新しき雄圖に前進を續けてゐる。

## 都村精一氏と其の體育器械

琴平象頭山下に誇る特殊の產業的響音も雄々しく體育勃興の新時代に善處して學校及び家庭用運動器械、社會體育器械を製作及び體育的、教育的圖書を出版し羽翼を北海樺太から臺灣、南洋に張り更に朝鮮、滿洲國に伸びて隆々の名聲を轟

かせつゝある都村體育器械製作所こそは實に香川縣產業界の一大異色の發展である。

都村氏は古くより縣下有數の文房具商として世に認識されて居た。而して明治四十年であつたが、ある日氏は日露戰爭

の捕虜を一見して如何に日本人の外人に比して體軀の矮少にして不活潑なる。今や幸に戰勝は博せりと雖もこの日本人の體軀にして向後彼等と對等の交誼するには是非とも體軀の改造を必要とし且それは刻下の急務なりと痛感したのである。然しこれは一朝一夕には不能で先づ其基本から整調すべくこれには小學校兒童の體格より改造するに若かずとして爰に着眼するやまづ學童體育に必要なる機械として苦心遂に我國最初の學童用廻旋塔を發案次いで圓木其他順次種々なる體育用器を發賣した。此如くして創案された氏の體育機械は

我國體育界に異常な歡迎好評を博し急卒として全國小學校幼稚園を始め中等學校專門學校等の各校に利用された。以來氏はこの高貴な精神の下に須臾も止む時なく斯機の改良考案をなし現に有する各種特許數の如きも數ふるに遑なく、又之が製作には琴平驛前に於ける現在工場一千五百坪そこには精鋭な現代式機械の運轉が轢轆として不斷に鳴り、專門の技師及び技術者は各擔任の部署に就き夥しき工手が強く明るく練熟の腕を揮ふてゐる斯くて幾多の專賣特許新案登錄の機械器具が嚴選裡に作り上げられて目まぐるしく四邊の要求を充足しつゝあるが、氏のこの國民體育界の無限の奉仕に就ては過ぐる大正十一年の陸軍特別大演習に際して畏くも御統監　攝政宮殿下から特に深き思召を以て侍從御差遣の榮を賜はり、親く工場の實況を聞こし召され更に作品の御嘉納を蒙り翌十二年五月には久邇宮殿下の台臨を忝うし、同六月には高松宮殿下の台臨を迎へ奉つたが、特に澄宮殿下には常に學習院に於ける氏製作諸機に親まるゝの外十四年三月都村式製品御買上げの恩命を賜ひ爾來氏は數回にわたり青山御所內澄宮御殿御學問所に上納した。斯く重ね〳〵の光榮に浴せるは蓋し斯界に空前の事にしてこの事たる獨り氏の榮譽たるのみならず、如實に本縣が產める特產工業の精粹たることを物語り且誇りともする。此如く絢爛の榮譽と巨大の業績に輝き亘る都村製作所は終始確固不拔の信念を渝えず其の製作上益々研鑽と考究とに猛進し意義ある三百有餘の各器具發賣品を華々しく斯界に掲げて獨自の境地我國體育界に他の絕對的追隨を許さず向上躍進を刻んで居るのである。



# 銘酒凱陣と丸尾孫一氏

西讃銘酒「凱陣」名だに雄々しき限りである。その銘酒「凱陣」は日清戰役の戰勝を記念の銘名と謂ふがこれを釀造する丸尾酒造場は先代忠太氏明治十七年の創始にして以來既に五十年の業史はいよ〳〵赫々たる光輝をはなつて居る先代忠太氏は綾歌郡富熊に生れ當時現在に於て酒造を經營して居た原岡氏方に雇はれこれに從事中忠太氏の非凡な人才は遂に原岡氏をして感動せしめ將來を見込まれその酒造を委されて經營するに至つた。爰に一躍運命を開かれた氏は丸尾

酒造場として一層の精進を決意した、が殊に同地は水質にも惠まれ隨つて釀酒の芳醇は謂を俟たず。この酒其凡ゆる努力は商勢の展開より外になかつた。

かくて漸時店の基礎を築かれ明治卅一年當主孫一氏が父業を繼承するに至つたのである。

爰に新鋭の氏は更に善通寺に分工場を設ける等發展を續けながら。現に千餘石を釀造し西讃三郡にわたつて聲價を博しつゝも常に酒釀技術の向上を畫し卒先酒造講習會を開催或は先進地に視察等努力して居る故にかつて四國酒造組合聯合會からは功勞を表彰された程である。

尙最近の上海事變當時出征第十一師團將士慰勞として率先縣下酒造家を勸說して凱旋勇士に淸酒贈呈等を斡旋する等社會的篤行も實に敬服すべきものがある。

# 仁尾塩田株式會社

西讃鹽田中の白眉三豊郡仁尾町仁尾鹽田は製鹽高に於て今や全國鹽田中の高位を示してゐるが、この活況無比の鹽産陣營も大正の中頃までは徒らに淺蜊貝の棲殖せる一大干潟に過ぎなかつたのである。

歐洲戰後の産業活況期に際して同地方の先覺者辻藤三郎、鹽田忠左衛門、鹽田正太郎、浪越鷹太郎等の諸氏發起となつて地方産業開發を期し、鹽田經營を目論見むや大正八年資本金七十五萬圓の仁尾鹽田株式會社を創立した。

翌大正九年着工して工事は順調に進捗し大正十四年全六十町の大鹽田を完成されたのである。爾來一等鹽を主産に現在千七百萬斤の尨大なる製鹽高を示すに至つた。同鹽田は縣下隨一の特殊施設たる集合釜屋を以て製鹽の合理化を圖り更に五十五名の採鹹勞務請負者に採鹹を委托し他の全作業を同社に於て經營する特殊經營にして、常にその製鹽能率は誇るべきものがある。

最近廿五萬圓の增資を行ひ全額拂込みを完了しその內容益々堅實を加へて居るが、現社長鹽田忠左衛門氏は人も知る本縣多額納稅者の權威として各種事業に關係の重鎭そして創立以來重役に列し昭和元年社長に就任現在に及んでゐる。同社の現重役は左の諸氏である。

取締役社長　鹽田忠左衛門
專務取締役　浪越鷹太郎
取締役　鹽田正太郎
同　鳥取爲三郎
同　須崎利吉郎
監査役　藤村猛
同　吉田瀧造

# 西野鹽田株式會社

德島縣の巨人西野嘉左衛門氏に依つて明治三十八年三豊郡詫間に構築された鹽田こそ卽ち西野鹽田株式會社にして其の三十五町歩よりは年産約八百萬斤を生産し內容の堅實を誇る製鹽會社である。

西野氏は鹽田完成後大正九年迄個人經營の形式にあつたが同九年時の村長松田友良氏等地方有志が買收と同時に資本金五十五萬の同社を創設該事業は同社に移され爾來好績を持續して一割以上の配當をなしつゝ尙且多額の積立金を計上して其確立せる社礎を謳はれてゐる。斯くの如く同鹽田をして地方事業化に置いた功人松田氏は人も知る現本縣々會議長として縣政壇上の大立物であり、また自村詫間村にあつては村長として二十年間の永きに亘る縣政村政に貢獻をなし特に地方産業開發に對する關心には、現に詫間酒造株式會社々長、三豊化學工業會社々長、詫間米肥會社々長に就任して日夜同地方發展に活躍を續けてゐる。因に同社の現重役は左の諸氏である。

社長　松田友良
常務取締役　三好貞吉
取締役　安藤嘉哲
同　西野敏太郎
監査役　鶴田順三

# 詫間酒造株式會社

西讃酒造界に芳醇を以て聞こえてゐる銘酒「松の鶴」の釀造場詫間酒造株式會社はその過去に幾度かの受難の業史を殘して今や一陽來復を迎へるに至つた。

堅忍と不拔大正八年未曾有の好況時代に地方産業振興の第一線に立ち詫間の一隅に設立された同社の誕生は餘りに華々しき出現であつたが、俄然反動的不況に直面するや同社は遂に解散說すら生れるといふ悲境に立つたのである。

大正十五年現社長松田友良氏等は同地産業の爲め將又同社のためにも凡そ崩す事の易く、建設の難きを力說し會社更生の方途を靜慮の上、氏は自ら社長に就任、常務に戸城甚右衛

門氏を選んで起死回生の陣容を整へ同時に從來の放慢經營に一大斧鉞を加へて只管内容の充實に努力しこの結果業績は次第に好轉して社礎漸く確立するに至つたのである。

常任經營者戸城氏は元來官界の出身にしてその溫厚篤實なる人格は内にあつては株主の外にあつては一般得意先の信望を集めて過渡期に於ける同社の社運を双肩に擔ひ大いに

業界を伸ばし社長松田友良氏と共に社業の發展株主の信頼に應へて居る。因に同社の現重役は左記の諸氏である。

社長　松田友良
常務取締役　戸城甚右衛門
取締役　福岡長良
同　福岡一郎
同　石井計之祐
監査役　安藤幸治郎
同　宮川民治
同　森重之丈

# 三豐化學工業株式會社

三豐郡詫間村の三豐化學工業株式會社は大正三年本縣苦汁工業界の先驅者たる德島縣の小關氏が個人經營下に創始した意義多き工場を其の後渡里榮太郎、安藤龜吉兩氏の共營に移し更に大正十一年地方有志の提唱によつて現在卅萬圓の資本組織となした其後專ら炭酸マグネシュームを生産しつゝあり株式會社改組後は異常の好調を續けて發展したが、やがて金解禁前後の不況に面して多難なる業況に再び苦闘を餘儀なくされ、之にも拘はらず同社一同はその局面打開に邁進し目下



年額六十萬斤の炭酸マグネシュームを製造し多く阪神、九州の兩地方に移出してゐるが、財界好轉の初潮の想見さるゝ今日同社の前途も亦一陽來復の感を深ふせざるを得ない。因に目下同社の現重役は左の通りである。

社長　松田友良
取締役　眞鍋頼次
取締役　安藤清太郎
同　福岡一郎
同　前川一男
監　三好貞吉
同　福岡長良
同　安藤幸次郎

# 松田塩田株式會社

西讃に於ける鹽田境三豐郡詫間村には現大鹽田會社が並立して年々歳々巨額の製鹽成績を示し斯界に堂々氣を吐いてゐるがその中にあつて最も古き松田鹽田株式會社の鹽田は天保年間土地の産業先覺者松田英右衛門元重翁の開墾せるものである。

翁は天保六年附近一帶の海濱を一大鹽田に開拓すべく大願を起し以來六星霜を經て天保十一年四十七町歩に亘る宏大なる鹽田の築構に成功した。その後二十町歩は土地の希望者に分讓して二十七町歩を個人經營としてゐたが、大正十四年に至り加藤勘學、松田氏等發起人となり資本金四十萬圓を以て株式組織として現在に至つた。

今や全鹽田十四軒前の製鹽量も年産六百萬斤にして年七分の配當を行ふ外更に内容の充實に努めて居る。殊に社長加藤勘學氏は縣下製鹽界に於ける功勞者にして、其の實力聲望又第一人者たるを許されて居ることとて同社の業容は多辭を要しない所である。

現在同社を脊負ふ重役諸氏は左の通り。

社長　加藤勘學

# 松崎沖鹽田株式會社

常務取締役　松田清
取締役　中野千太郎
同　加藤謙吉
監査役　大野英一
同　片岡敬謙

西讃三豊郡詫間村に於ける四鹽田の一つとして廿二町歩の優秀鹽田を擁し近來極めて好業績を謳はれてゐる同村大字松崎の松崎沖鹽田株式會社の有する鹽田は明治四十年頃までは凡そ産業地帶とは縁遠き一帶の乾潟に過ぎなかつた頃來時の推移として同地方有志間に鹽田開發の機運を萌し明治四十年初めて鹽田築構に着手しこれを完成後壽くべき松崎沖鹽田株式會社の誕生とはなつた。

爾來同社は天龍的成育を續け逐年躍進を重ねて今や年産五百二十萬斤而もその大部分が優秀なる二等鹽を製産して居るが、從つて株主配當の如きも最近は二割五分の高配を續けこの好成績は斯界の驚異と羨望とを集めてゐる。尚同社の現重役は左記の諸氏である。

取締役社長　加藤勘學
取締役　松田清
同　白井鶴治
監査役　安藤嘉哲
同　片岡敏謙

# 仁尾の朝日庖刀と大矢根商會



三豊郡仁尾町の特殊生産事業としてその存在を謳はれるものに庖刀製造大矢根商會がある。元來同製造の濫觴と見るべきは當主大矢根良吉氏の祖父大矢根政右衛門翁の刀劍鍛冶職に發し同翁は西讃に有名なる刀匠であつたが、其後時代は封建を拭つて明治維新となり帶刀廢止令出づるや當時悉ゆる刀匠は時代に敗殘を喞つやむなきに至つた。爰に政右衛門翁はよく其轉換の途を考察し決然煙草截斷用の庖刀製造を着創した。刀劍鍛磨に熟練の翁は愈々その業に精進すれば製品の聲價は謂はずもがな、朝陽の如くであり。次で辰次氏その業を繼ぎ更に當主良吉氏父業を繼承するに及ぶや明治三十一年資本金十五萬圓を以て合名會社を組織し以來一大飛躍を遂げて今日に至つて居る。

目下その製品年産二十萬枚に上り專賣局納品を主として一部は支那方面への輸出を見てゐるが、同商會製品朝日庖刀の聲價八紘に高きも蓋しこの由緒ある練治によるものであらう。

# 仁尾町の老舗加茂や足袋製造所

時代大衆の輝く聲望を集中して西讃産業界に仁尾町の老舗鴨田足袋製造所がある。同舗の信望を象徴する加茂や足袋は今や業界に於て確固たる地歩を保持しつゝ躍進また目覺しきものがある。

同製造所はその業史を遠く天明五年の昔に發し當主より三代前の祖鴨田紋造翁の創業せるものであるが、紋翁はその若き頃當時丸龜に出でて郷里に移植すべき産業を探究中端なくも足袋製造に着目し、つぶさにその技術を習練して歸郷しその業に邁進してよく今日の業礎を築いた。

爾來三代を經て當主儀作氏祖業を繼承するやミシン機による機械縫製造の大量生産時代に乘つて一大進展を遂げ、目下老齢の氏は令弟秀三郎氏及び令息由太郎氏らを活躍の中心と

して製品の向上と販路の擴張に雄飛しつゝあるが製出する加茂や足袋、金福足袋、天長足袋の年産額は十萬足に餘り、香川縣一圓は素より隣接愛媛、德島地方にも進出して萬丈の氣を吐いてゐる。

# 三豐組合製絲と小山組長の發念

三豐郡上高瀬、勝間、笠田、二ノ宮、比地二、比地大、大見の各村並に仲多度郡の一部を組合區域として昭和四年創設以來異常な業績を示しつゝある西讃生絲信用販賣利用組合の現組合長小山久吉氏はかつて明治三十年以來大正十三年まで約三十年間同村小學校の校長として教育界に令名を馳せた人格者である。教務勇退後村人の輿望もだし難きあり遂に村長に就任し爰に專ら村治に盡瘁しつゝあつた氏は、この新しき事務卽ち農村自治の局者たるに及んで思はず痛嘆せしは現實農村の意外の疲弊である。この不可避的の慘狀此救濟は一つに近辭の自力更生卽ち農村大衆自らに依る現狀打開の一大勇猛進發にまつ外なきを思察し、これが第一着の手段として彼地農家の副業養蠶産繭の販賣統制に乾繭事業を創始すべくこの儀縣當局に稟申したが當局は乾繭に五十歩百歩寧ろ竿頭一歩を進めて製絲業に若かずとの意嚮であつた。氏は熟考の末これを有志に計り遂に當局の指示されし製絲に躍進を決意したのである。

かくて素より産業組合組織による事は時代の要求でもあり從つて同村を中心に近村の有志を糾合し昭和四年同組合の結成創立を見たのである。目下同組合は前記各村を通じて千八斯くて同舗の業史は大正十一年大演習當時宮內省買上げの榮を綴る外各種品評會に於ても屢々入選の榮譽をになつて同地産業に光彩をそへて居る。



百の組合員を有し出資金三萬一千九百五十圓にして製糸釜百十六釜と乾繭其他一切を整備して居るが其創設日尙淺きに拘はらず着々事業基礎は固められつゝあり。

小山氏は同組合創立と同時に組合長に推され依つて間もなく村長を辭して一意組合統營に專念して居る、尙同組合の主業には委托乾繭製糸販賣にして、昭和六年度に於ても約四萬五千貫の生繭を委托され、これを各々乾繭精繭して製糸約四千貫價格約十三萬四千餘圓の販賣數字を示し此好績にして如何に同組合企劃の意義大なりしか察するに難くない。然もこれが經營に當る小山氏以下役員は愈々献身的に農村自匡更生を最高の理想として邁進する所期せずしてその幸福なる影響を多數組合員に謳はれて居るのである。

殊に特筆すべきは小山氏が元教育界にあり身は恩給を給付され而も健康の身に恩給を受け若しこれが悠々自適等の好辭を銜ふあらんか正に恩給亡國に拍車である。受恩給者は宜しくその人生の後期を一般社會奉仕に献身すべきなりと、この高貴な信念に基く小山組合長の統營する西讃組合製糸がかく赫々たる實績を止どめて全就業者は家族制度の溫情下に伸展しゆくのは寧ろ當然の歸結でありこの意義多き活動の將來こそ祝福したい。因に目下の組合役員は次の如くである。

理事長　小山久吉
理事　白井要
同　鴻池阿弓
同　松岡秀太郎
同　安藤熊太郎
同　秋山鐵治
同　今川勝彦
同　宮崎修太郎
同　大西榮吉
同　森先
同　矢野傳一
同　倉田彌次郎
監査役　小野清治
同　馬淵直壽
同　池田駒吉
同　荒木秋利
同　大江善右衛門

# 川人一治郎氏と銘酒川鶴

兎に或者は産業立國を天下に呼號したこれもとより結構である。しかしこれ等論者の多くは職業的論說の雄者にして啻に一片實行の伴はざるのみか得てして隱密の策道だに辿らんとする徒輩のなきにしもあらざるは共旗幟の意義を冒瀆滅殺の感だに深ふした凡そ總ての大衆的號令運動は公明でなければならない。而して實踐でなければならない實行の伴はない空虛なそれを以て現代大衆心理を我に集中せんとする如きは時代錯誤も甚だしく遊戯にも値しない所であらう、只その熱烈なる魂の公明と實行その所にこそ期せずして世の信頼は集積さるゝのであつて。故に何事によらず共同の社會に善事なりとせば須らく實踐の効果を立證として邁進すれば自然の審判は軈てその公明に酬はれるであらう。

産業立國主義の如きも極めて當然の高邁なる表幟でもあるが、この事既に不斷實行すべき課題にして過程にあり夫實踐の所には山野を隔てずして武陵桃源化はある筈に本縣酒造界の誇りたる銘酒「川鶴」とその醸造川人酒造は三豐郡の寒村一の谷村の只中によく讃ふべき實績と産業主義の實行を以て世人の共鳴を博して居るのである。

銘酒川鶴醸造場は今を去る約五十年前當主一治郎氏の祖父清藏氏が始祖にして當時同村に於ても有數の豪家であつた。清藏氏が斯業を創始せしは交通不便とは謂へ原料米質と水質に惠まれ、他に起すべき事業とてもなかつたからである。その初めは三百石前後の酒造をなして居た。其後酒銘を川鶴と變更したが。それには清藏氏がある夜の夢に因める酒名であつて卽ち財田川タカラの川に鶴が降りたとの夢で、これに因つて酒名を川鶴に變更したが、其後時は推移して以來先代及び又當主の世とはなつた。



現一治郎氏は時代の事業家である祖業經營以來凡そ事業の繁盛は都會にのみ繁榮あるべからずとし一途酒業に邁進したそこには原料米の嚴選に農家の米作改良を慫慂し其他あらゆる吟味を醸造に加へて名實共に銘酒たらん事を期した。殊にその爲めの科學的研究苦は異常にして各種實驗設備の完璧は恐らく本縣斯界隨一であらう。

又更に大冷藏設備、精米部、瓶詰工場等一般的設備の如きも整備したものである。この如くして氏は常に田舍にも事業の發展飛躍は可能なりを題材となしその片面は外に活躍他の片面は內に研究を信條として全大衆を自己が領野に奪ひ起つたのである、その如何にして良品をより安く多く大衆に提供せんの希望と實證は現に醸造する二千石近くの醸造に加ふる年々自己が醸酒と同質の買酒約三千石を下らざる繁盛振りこそ何を語るものか、事實は嚴として何ものよりも雄辯であるのみならず氏が酒造家として精鋭なる事には酒質を誇るの外自身酒質鑑別の權威として四國酒醸聯合會の審査員たりさらに銘酒川鶴を以て本縣斯界の大衆的名華とするにさきに宮內省御買上げの光榮に浴する外阪神、中國、九州、鮮滿の諸地までも駸々として不斷の發展こそこれ時代の事業家川人氏の面目ではある。

# 異色の宮本秋四郎氏と其醬油業

西讃觀音寺町は其海濱の名勝と近時商工業の殷振によつて現實三豐の中心勢力を形想せしむるこの實勢に最近港灣は修築され、更にこれと相前後して餘韻も勇壯なる紡績は創設された各種産業の新鮮潑剌たる色調は次から次に企劃想定されかくて同町の西讃に於ける中心地的重要性を自ら日に擴充しゆく勇しき曲譜は奏れて居る。

産業が盛振すると共に地の勝景有明の清濱琴彈公園の絶勝は必然市人の新な視中に上つて來る。即ち琴彈公園が今日の人口に膾炙たる所以も同地産業の活潑な現面が動中靜を求めて以心傳心双勝的に躍進の生氣を清新ならしめて居る。斯くの如く近來の觀音寺町は花も實も西讃の樞要を整へたが、爰にその礎石を投じて以來廿餘年殆ど献身的努力を以て今日を展開せしめた人的要素に先の町長宮本秋四郎氏がある。その

宮本氏が大正より昭和に二十餘年間同町長として自己の抱懷せる産業主義に町勢の擴充を期し以來鐵道は通じ、電氣事業以て近來文化を産業に繕き更に海運交通の完備が地方産業隆興に關鍵たるを察するや、敢然町財政に至大なる苦痛も顧みず町百年の産業計劃の基本として巨額六十餘萬圓の港灣改修計劃を樹立し、國庫縣費の受補に東奔西走遂に諒解を得て着手實施した。氏はこれと前後に岡山縣の事業家大原氏とも提携紡績事業を創始すべく、是又昭和二年に實現即ち現三紡績株式會社のそれである。

かくて宮本町長を中心に同町有志等に由つて觀音寺町は共近來的産業機構は整へられたが、この間宮本氏は共の公人の立場に於て凡ゆる冷評批議にも一切耳を藉さず惡戰苦鬪炎々たる町發展の理想と共に眞劍にして公明な奮鬪を續け、今日の町勢を示現せしめたのである。

この頗激の他面に氏が事業家としてその經營の醬油と有明酢は夙に令名高く何れも巨千石を釀造し始祖富之助氏以來三代約二百年の赫々たる歴史は共商品の眞價と共に愈々斯界に謳はれて居る。氏は青年時代に詫間片岡家より宮本家に入嗣し以來一意同事業に執心して逸早く釀造の一切を研究會得し後自ら釀造杜氏ともなつて營々異常の發展を劃した。その透徹せる頭腦と人才は中年にして町長におされる同町史に巨人の足跡を止め昭和二年縣會議員に當選、昭和六年更に再選を見たものゝ時に縣政界の風雲穩かならず折しも氏が當時念願する前記同町産業施設は遂行の途半にあり身命を賭せる該事業の遲滯を怖れて時の情勢に善處せし所計らずも氏に一大犧牲を強ふるの結果に逢着し今や氏は自己の釀造業と過去の努力萬難を排して建設した偉大な産業觀音寺の輝く黎明を滿身に浴びつゝ商工會長としてその成育に尚も關心を注いで居る



# 四國物産株式會社

三豐郡の中心的存在の地觀音寺に然も同町産業事業界の寵兒とも謳はれるは蓋し四國物産株式會社である。同社の創立は大正七年にして資本金十五萬圓（全額拂ひ込）その營業種目は肥料、藁叺、砂糖、油類、水飴、生絲の生産販賣であるが、その多岐多樣を以て創立以來幾多の難局に逢着しつゝ而も驚異的異數の伸展を續けて居る同社は元守谷房之助氏の經營しつゝあつた肥料砂糖商を時代の要求を察し大正七年會社組織とはしたのである。

凡そ事業經營に會社組織と個人經營には各々難易ありしかも統營の偉力を發揮の場合、會社組織はその强硬性に於て一日の長ありとされて居る。四國物産素よりこれを把握し獨自を開拓してよく今日を築いてきた。殊に同社營業の偉とするところは人材を集中してこれが電光石火縱横無盡の商策を施驅し社業に遺憾なきを期す實に時代の商策とは謂はう。

同社は創立以來堅實方針を以て經營に當りし株式拂込金の多くは共の利益金を以て充當し、尚製飴工場及倉庫等その諸施設の一を以てしても優に資本額に相當する資産の現況は共の内容を多く論ずるまでもない。これと謂ふのも凡て製産者より需要者、直接産地より需要地と謂ふ合理化をモットーとして、地方農家に賣るべき肥料は日々の公定相場を基準として便利に尚砂糖は原糖を仕入れて精製し、又共製造する水飴は品質の精良に於て本縣隨一絶体に他の追隨を許さない。これ等を諸條件として賣上年額實に四百萬圓に垂々たるは資本の割合から見ても確に驚くべきであつて、更に最近製糸操業に就て研究の結果確信を得これが企劃中であるが、新鋭の同社が機界の製糸界に活躍することは蓋し適材の出所でもあり將來の興味又深々たるものがある。

目下同社の取扱ひ業目の總ては取引關係を四國、阪神、中國、九州、朝鮮、北海道、樺太に跨つて奮馬を驅るの活境にして、その面目や陸離たるものあり社長請川氏は西讃各界に於ける有力者又守谷氏は永年商業經驗者、更に常務の守谷氏の商才機略を加へた同社の陣容は實に完璧にして特に小學校

卒業の青年を主として訓練登用の獨得に生る等同社の前途や洋々たるものがある。因に現重役は左の通り。

取締役社長　請川本次
専務取締役　守谷房之進
取締役　石川舜一
同　池田豊太郎
取締役　請川卓
同　守谷秋藏
同　守谷トミ
監査役　富田增右衛門
同　吉田鶴造

# 銘酒金竹と山本醸造場

西讃に於て地勝を誇る觀音寺の琴彈公園及有明の濱の眞砂は眞に西部讃岐の絶勝ではある。殊にこの景勝の印象を更に深からしむるは卽ち一連白砂の上に彫出されし町餘に亘る古き寛永通寶の型字は一興を喫せしむるに充分である

此外同町が近時産業の町として澄刺味あふるゝ現況に想到する時思はざる快哉も叫ばるゝであらう。

この地に銘酒あり合名會社山本見弟商會の「金竹」が名聲の赫々たる現況の異彩は産業觀音寺の一面目でもある。同酒造場は明治二十年頃山本茂尊氏が創始し、仙子屋の呼稱を以て一躍縣下酒造界を風靡したが、其後明治三十年頃故あつて醸造を中止し酒類問屋業に移つた。以來茂尊氏性來の剛毅は不撓の刻苦を以て東奔西走し常に商機を掴んで四十三年再びさきの酒造を再始した。



その後の山本商會は文字通り一陽來復の商況を示し偉大なる進展を續け間もなく店舗並に酒造倉庫を新築する等内外の面目を一新して遂に昭和五年資本金二十萬圓の同族合名會社に營業の陣營を改め、將來の商戰に布陣した。山來茂尊氏は酒質の向上に特別周到の用意を以つて鑑み、現に二千石の醸酒金竹は縣下は勿論、遠く東京、九州にも發展し聲價を謳はれて居る。この盛業を築いた氏は他面三豊酒造組合副長として斯界に貢獻し、嚮に日本醸造協會よりも表彰され又同町會議員として地方自治に功勞少からず人望を集め、昭和七年の如き巨萬の私財を共町内に三十ケ年間無利息を以つて利用せしむる等奇特な行爲は氏にして始めて爲し得る業であり、當主壽雄氏は仲多度郡本島村田中家より入婿し東京專修大學卒業にして目下同町在鄕軍人分會長の要務に就き又町會議員をも勤め眞摯なる新人として公私好評の中にある。

# 三豊紡績株式會社

山來本縣は流水に惠まれざる事によつて工業の振はざるを當然の如く思惟されて居る。或はこの言を以て一片條理に當るやも知らずと雖も過去はいざ知らず、現代及將來に於て依然この産業思想理論に據ることに於ては本縣産業の振興は恐らく百年清河と謂ふべく、爰に於て現代の人々はこの封建的迷論にくみせず勇往一途に生産を基本とする實力の充實に邁進すべきではあるまいか。

時に觀音寺町三豊紡績株式會社は縣下に本社を有する纖維工業會社の隨一である。而もその創業營業年期として僅に六ケ年なるに拘はらず、相當の業績こそ示せるは慥に縣民の産業意識に恰好の良劑たるべしとは思考さる。

さきの觀音寺町長宮本秋四郎氏は多年同町に確乎たる工業の素地を築かざるべからざる念願切なるものがあつた。偶々大正十五年頃岡山縣の事業家大原孫三郎氏がその綿業擴張に着意せるを知り氏は絶好のチヤンスなりとて町の有志に之を計り其後本問題が愈々有望となつては爰に眞劍の度を深めて

その一日も早く實現せん事を鶴首して居た。次で大原氏對宮本氏等有志の會見となつたが、大原氏は町有志の意想外眞劍な態度に痛く感動されて遂に協力を決意し茲に資本金三百萬圓の三豐紡績は設立されたのである。

斯て大正十五年六月總會終了と同時に直に工場建設に着手し、最初は紡機一萬九千九百六十八錘を設備し、營業を開始したが、昭和三年更に一萬一千五百二十錘を增錘各種施設は最新式を整備して愈々本格的經營に移つた。爾來系統も同じ倉敷紡績とは密接なる關係を持續しつゝ其製品の如きも同社と銘柄も一つに極めて有利に着々業礎を確立した。さらに昭和四年には倍額六百萬圓增資を決行し同時に新規丸龜工場を新設したが其後に於ても營業の內容は創立以來八朱配當を續行し新設會社稀な好績を謳はれてゐる。

素よりこの好績の裏には創設當時地元の拂はれた犧牲と低物價時代の建設經營の合理等々數ふべき善因が綜合されて居る、殊に地元一般人士の熱誠支援と社長大原氏の本領とする同會社は常に合理化經營の尖端を步み一例には古肌袋をもこれを再活用するの細心振りにして尙ほ其工場は恰も同地方在住人の共同作業場たる觀念を以て、衞生施設の如き特に意を用てこれには巨費を投じ、斯界に稀に見る裝置流綿機去壓裝置をもなし、又長距離通勤職工の爲には特に自動車の便宜を與へる等最新細心の周到なる經營振りは社の業績を彌が上にも向上せしむるのみである。

目下其生產太番手綿糸年產約一萬九千五百梱は今治方面にその四割强を其他阪神地方に移出し銘柄も倉紡製品と同樣三馬印として品格を謳はれて居るが、三豐紡績のこの勢況から見て水尠き本縣にも工業の發展必ずしも不能ではないことを明證された譯である。尙同社現重役は左の如くである。

取締役會長　大原孫三郎
常務取締役　石井熊夫
同　永瀨又七
取締役　宮本秋四郎
同　辻應義
同　入江俊輔
同　小松原卓一



# 七寶無盡株式會社

觀音寺庶民金融の樞機を掌つて活躍しつゝある七寶無盡株式會社の近影は確に縣下斯界に快味を覺へしむるものであらう。同社は大正五年二月資本金六萬圓で創設されたが、當時九州肥薩銀行の流れを汲み株式組織に因る無盡業經營は同社を以て縣下に於ける嚆矢にして設立後財界の幾波瀾變轉に同社もこれを喫しつゝ昭和四年社務刷新を期して三木猛一氏が入社以來着々堅實なる業績を示現せしめた。三木氏はかつて高松百十四銀行の觀音寺支店長或ひは丸龜支店等同行の重要行務に携はる外縣下金融界に活動すること約三十年間金融業のビンからキリに通曉する才子で、現代大衆金融上貯蓄と利用の便利を兼ねた重要機能を使命さるゝ無盡經營には無二の適材たるを失はない。

現に請川卓氏の新進專務とその下に同じく銀行出身の常務川崎勝一郎氏あり、三木氏は常務監査役としてその多くの社務に當り目下契約高百萬圓はその信條とする堅實主義の一條による無理の伴はざる數字にして、掛金の低廉と割增金及び入札差金配當等二重三重の妙利は同社無盡の特異とする所であつて、かくて同社がその創立以來一割配當を續行し不動の內容を以て益々信用を高めつゝある所以もこゝにある。

更に同社では近く新時代の要求を洞察してある種の新企劃による一段の飛躍を目論見つゝあり以て一般大衆の期待する本縣庶民金融機關たる使命を遂行せんとして居る。因に同社の幹部は左の如くである。

專務取締役　請川卓
常務取締役　川崎勝一郎
取締役　大西甚五郎
常任監査役　三本猛一

# 酒界の偉材大野享平氏

讃岐の西端豫讃の岐點近く澎湃たる燈灘の碧浪躍る明境豊濱町に今や銘酒「江戸司」大野酒造場こそ關西酒界の偉材として人格聲望高き大野享平氏の經營に係るが同酒造場は當主大野享平氏の嚴父孝平氏が明治十二年創業せる老舗にして以前同地には微々たる一酒造場があり、經營困難を極めてゐた。

當時孝平氏は同町にあつて醬油釀造業を營み前記酒造場との貸借關係よりして遂に同酒造場を自ら經營せざるべからざる破目に立ち至つた決意を固めた氏は一方に醬油釀造を經營せる事とて、先づ最初は僅か百石程度を試驗的に釀造したが、その成績極めて良好にして相當の收益を擧げても見ればこれに意を强くせる孝平氏

は酒造業に對して本格的努力を傾注し更に一層の努力を以て品質の向上を計り、逐次增石しつゝ明治卅八年頃は造石五百石を示すに至つた。

かくて當主享平氏は孝平氏隱居の後を繼いで父業に精進目覺しき飛躍を續けるうち、爰に酒醬油の二兎を追ふ事の一兎化するに若かずとなし、大正四年遂に永年の醬油を廢して酒造に專念してその完璧を期したのである。今日斯界に令名を馳せて居る同酒造場も當主と先代兩氏の敬服すべき才腕に由る所であつて、更に享平氏の斯界に於ける人望は明治三十七年同業組合法の實施當時四國酒釀聯合會の組織さるゝや以來同會の會長に就任し、本縣酒造聯合會長、全國酒造組合副會長等々に就任、また曾ては縣會議員として二期八年間縣政に參與する等、その政界釀造界の公私を通じて貢獻する所は至大にして現に日本釀造協會近畿支部幹事、酒造組合中央會相談役たり、縣下酒造界の偉材として吟釀銘酒江戸司の雄名と共に氏は壯者を凌ぐ英氣を以つて斯業に精進してゐる。



# 株式會社大久保增吉本店と其酒業

讃岐を東西に區分する時東部は概ね自然の景勝に惠まれその遊覽地然たる地風は夫が共遶りの人心思想にまで浸透反映して端的に謂へば單に安逸を追窮するの外政治にも經濟にも社會の現實動向に對して餘りにも無氣力な何等反撥を見ない橫屍の如く一日の苟安にそれ樂々たるの如くでもある、夫かあらぬか最近本縣下の富豪階級の人々が擧つて東へ東へと何等取るべき社會的意氣も必要もなきに拘はらず自己墳墓の地の地方共同の負擔だに免れんとして高松地方に蝟集する態は實に自我本位を萬能視する近代思想の淺間しさと評するの外はない。

かりにも斯る非社會的小人に抱く金玉ありとすればそれは正に光なき日に疊り往く玉にして、腐蝕滅盡の期を追ひつゝある狀ではあらう。これに反して中讃以西は概して時代的の生存精神を把握し清新の氣はたぎつて、剛氣勇壯を想はしむるものがある。これ本然の意義でもある。

若しそれ地方に一事業興る時にその一プロックには或は幾百千の糊口と雨露を凌がしむるあり。有產無能の士が雲集すればとて只妾者の惡臭を善良な社會に發散せしむるのみにして、このところ社會觀念の相違に發する自然の功罪は月鼈の差も啻ならざるものあることを思ふべきではあらう。

爰に西讃地方活動の雰圍氣中酒界に於ける大久保氏の潑剌さは特筆大書に値するが、その雄を誇れる豊濱町株式會社大久保增吉本店は明治三年先代增吉氏が始祖にして、氏は農業賃商、酒業等凡ゆる經驗の士である。

當時男子七人の兄たりし氏は酒造を創始し七人兄弟は協力一致して之に當れば、世に何業の難きものかあらん見る〳〵中に實績を示展した先代增吉氏は極めて寡言理財に長じ日常茶飯事と雖も斷じて無駄する事を許さなかつた。而もその裡に雅量の人として他人の失策を咎めずかくて酒造のかたはら質業をなし、漸次太り增すに由つて金融業をも營んだ。然るに惜しむべくも氏には子供なく遂に同町の舊家大久保家より當主增吉氏を入れ當主又先代の聰明と周到に優るとも劣らざる寛厳の士であつて、先代に由つて築かれた基礎は次代更に擴充され醸酒の聲價は愈々高く然も兩增吉氏は何れも文字通り晨に霜を踏み夕に星を戴く勤勉刻苦を以て遂に克く今日の盛況を馴致せしめたのである。

現に社長たる克巳氏とて父祖の勤勉努力に對しては只々感謝感激の外はないと述懐せし程であるが、先代は一世に成功を謳はれつゝ大正七年他界した。店勢は其後も依然年と共に進境を示し昭和四年その酒造部を資本金五十萬圓の株式組織とし酒陣を近代化すると共に、吟醸の銘酒「獨立男山」は阪神、九州、東京へも進出異常の發展を續けた。次いで昭和七年第十三回全國品評會に於ては名譽ある最優等に入選し、名實共に天下の銘酒として酒界の嶺頂を射した。

今や株式會社大久保酒造本店は其の全容に於て本縣多額納稅者に列し、刻苦集積した增吉氏は豊濱町の公共にその半面を捧げつゝ、近くは昭和六年私財巨萬を投じて町公會堂を建設寄附し、新しく輝く公共的壯標を建立して弘く町民の意表に立ち。また長子克巳氏は目下町議員として二期を努めつゝ一家の人はいと和やかな空氣に包まれて全員妻孥も孜々として酒業に精進しつゝあるがこの光景こそ麗しくも雄々しく銘酒獨立男山の產業的活躍發展の悠久を物語つて居る。因に同社業の役陣は左の如くである。

社　　長　大久保克巳
專務取締役　遠山祐治
取締役　大久保正巳
監査役　大久保增吉



# 糸瓜產業と合田孫六氏の苦心

本縣特殊產業の雄として今やその製品は遠く海外までも鵬翼を賑し雄飛しつゝある本縣糸瓜加工の創始者三豊郡豊濱町合田孫六氏が今日の進展は實に本縣特殊產業の名に於て誇るべきものである。

爰に斯業創始の人合田氏が苦心は異常であつた。近時一般商品界の鋭角的象狀は實に急潮にして、これ今日の商品は明日に流行を許さざる進化の時代として止むを得ない、隨つて事物の考案工夫こそその社會的生存の確立を意味する上に最要事であらう。

本來豊濱地方は副業として糸瓜の栽培地であつた。其の糸瓜は多くタワシに製造又はその儘縣外に搬出してゐたのである。合田氏は明治十年に生れ中年にして越後の石油會社に緣故あつて勤め爾來彼の地にゐたが、大正二年鄕關豊濱に歸つた。然して何事か爲さんの雄心浩志已を抱く氏にして、時恰も不況に面し同地生產糸瓜の如きは買人だに無き悲境にありかくて栽培農家の苦腦と云へば思ひ半ばにして、こゝに明敏な腦細胞を作用した孫六氏は今しも相手なき糸瓜に考案工夫を加へ一新生面を拓く事は蓋し自己一人の好事に止まらず、寧ろ同地方一般を匡ふ所以なりと感こゝに至れば、氏は當時義弟土田台吉、加地茂次郎によつて營まれた糸瓜たわし製造業を譲り受けて斯界へスタートした。爾來孫六氏と土田台吉氏の研究努力は全く超人的寢食をも忘れての精進振りである

氏が最初創意せしは靴底革代用の敷物で、これを完成後上草履垢取手袋等々多種多樣の糸瓜製品を案出し、斷然斯界に一エポックを劃した、しかしその販路に至つてはこれ未開の境地にあり時に養父土田辨治氏は自らその製品を四國、九州方面を宣傳販賣に努めたのである斯して辨治氏も極力孫六氏

の事業を助成した。

此如き氏の熱誠に製品の聲價は漸次認識され特に海外への取引は最も好望視されるに至つた日下氏の生産する糸瓜製品は年額約五萬圓の活況を示し、ことに其の品質に就ては曾て畏くも　聖上陛下御買上げの光榮に浴する外、又各種博覽會にも優等入賞せる事によつて其品價は察知さる、孫六氏はこの身に餘る光榮に感激しつゝ精進を誓つて居る、尚氏が世の儀表たるべきは最近の町議改選に際して高點を以て當選せるにも拘はらず町政の圓滿を圖り自ら辭退した如き同氏の謙讓の美德人格の片鱗を窺ふに足るものがある。

# 豊濱製麺と合田照一氏

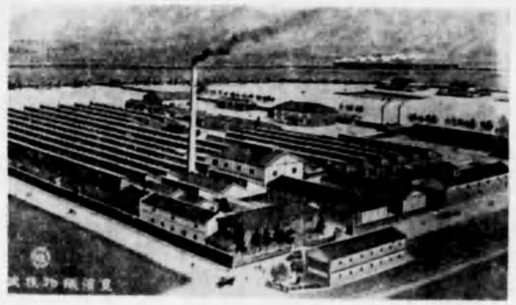
西讃豊濱町産業界に近時進展のあとも驚異に値するものは蓋し製麺事業である。即ち不況深淵の底とも謂はれた昭和七年にあつても約二十萬圓の生産を示せるこの一事を以て如何に同地斯業の基礎既に確立せるを證示するが、一面東洋的色調の麺類が依然大衆への魅力をも語る所であらう。

こゝに同地斯界の雄として合田製麺所の飛躍はまた刮目すべきものがある。同所は明治三十九年當主善太郎氏の嚴父照一氏の創業にして、以來製造する乾うどん、素麺は獨得の風味を以て斯界に中心的飛躍々進を續けた。而して氏は今や同町生産の麺類年額十五萬箱中六萬數千箱を生産し、その販路は四國、中國、近畿更に北陸地方にまで優質を謳はれて居る。

なほ同所の生産中その八割は乾うどん、二割が素麺にして目下事業の一線に立つて活躍して居る善太郎氏は壯年三十四才嚴父照一氏を扶けて斯業に專進し、その製品商標「譽の松」の輝かしき聲譽を愈々高めて居るが同氏は內に向つては個人經營の長を發揮して工場合理化の範を示しに向つては、卒先



地元同業者と提携も厚くその共同戰線には縣外進出を目標に善戰し豊濱製麺界に亘彩を示して斯業の發展に貢獻してゐる



# 豊濱織物株式會社

本縣の西端機業地として活氣横溢する豊濱町の機業界を代表するものに豊濱織物株式會社がある。由來同地方は手機の地とされてゐた。而してこの地方特技を利用したものに岡山地方の織物商人があつた。即ち各種織布の賃織を彼の地一般婦女子に求め彼女又家庭の副業として盛んに織つたものである。

かくて大正七八年歐洲戰爭當時に到れば岡山地方織物業者はその商況應接に遑なく殺到する需要は供給の比ではなかつた。茲に斯界の有力者現同社重役諸氏は豫て織布手藝に長じ且水質の良好及び交通の至便を具備せる舊知の地豊濱に大生産機構を整ふべき發意して遂に大正八年資本金二十五萬圓の同社は創設されたのである勿論株主は僅に四十名にして殆ど重役諸氏同族會社然たるもので、然して目論まれた堅牢綿布會社はその工場敷地として八千餘坪は劃し此處には織布染色仕上げ原料倉庫等三千坪の建物就中食堂衛生等その全施設を完備し正に近代的偉容にして西讃の一遇に新時代を象徴する嚴然たる生産の記念塔ではあつた。

かくて經營者は夙に斯業の眞髓を究め一切を體得し猶又これに拍車する地利地情の絶好無二を條件するに於いて社業の進展は俟つべくもなく着々として豫期の如くである。殊に同社綿布の地で往く名聲に社業は愈々順風滿帆の行進を續けた

されば其後に來た一般的不況にも重役の用意と共の合理的自然企業にも等しき惠まれの同社は些かの懸念遑算なく只勇壯たる前進の一途を辿るのみであつた。次いて大正十一年には世の經濟環境を外に同社はその生産機構を以てして一般の需要を給し得ず遂に共の規模擴張に迫られて十萬圓增資を決行し製品の需給は幾分調節されたが更に年と共に生産織布の眞價を弘く認識されて需要は超增の一方にあり又しても昭和七年一躍五十萬圓を增資し八十五萬圓の現在會社資本とはした

この如き異數の伸展擴充された業容こそ會社夫自體の誇りは無論本縣下に現存する生産機業界で比倫なき現實巨人の如き成率は恐らく群小の眩暈だに感ずべき異彩ではある。

目下同社は雲才綿服地小倉服地の製織を爲しつゝこの年産四百萬碼百五十萬圓を示し、繰糸糊付製織染色仕上げ等一切の部分を三百餘名の職工によつて運業しその製織品は京阪神は素より關東各地殊に鐵道省、海軍省、府縣道廳の指定を受けて納入しつゝあるが、この一事に由つても同社製品の資質卓越せるを謳する所である。

なほ社の專務大野隆一氏はかつて岡山銀行界に名を馳せその犀利な眼識と溫厚の中に霜氣と腹を藏する所同社創立と共に一轉して、その春秋を同社に捧げ且社業の將來を期待したのであるが、社業の今日は氏の期待も面目をも完全に徵羅して餘りあるのみならず、同社のこの繁榮と擴充を以て俗人の心眼には如何に映ずるか、たゞ正視すべきを殘すのみであらう。因に同社現重役は左の諸氏である。

專務取締役　大野隆一
常務取締役　余傳信太郎
同　大野恒太郎
取締役　佐藤太三郎
監査役　藤村猛
同　姫井三龜男



# 輝く島の石材と同業組合

由來小豆島の地方産業を代表した醬油素麺石材の三大産業は共に特殊の聲價を放つて今日に及んで居る。就中石材業に至つてはその惠まれの資源豐富と加ふるに石質の優良はかつて天正十一年豐臣時代に大阪築城の用石調納を初めとし以來慶長四年秀賴公の增築にも用命に接する等疾くに小豆島石材の眞價は謳はれたものである

今しも天下の名園栗林公園表門の橋墻は當時該築城の殘石にして、更に明治十七年畏くも皇居御造營の用石、これに續いて土庄町幸島晃治氏の産石は陸軍測量部專用の標準三角石として現に大森貞資氏これを繼承納石しつゝある。又かの日露戰爭當時に於ける難攻不落の旅順口閉塞にも前後三回天津丸以下十四雙は小豆島産石を滿載して空前絕後の壯擧港口閉塞は敢行されたのである

この如く島石材の利用々効は古今時代を通じて歷史的記錄に燦たる所であつて、これ等石材の多くは同島の北部福田、大部、北浦、安田を主として殆どその全面に産し、明治、大正にかけての驚異的進展は一時石材業者に非ざれば島人に非ずとの活況をも呈したが、共後石材の一大敵國セメントの躍出的勢容に遑が古壘を矜りし石材も漸次その業域を浸蝕され多大の恐威を覺へたのみならず、この業界前門の厄に一層の拍車は卽ち業者各自の競爭亂賣であつた。

競爭は石材界を擾亂するに止まらず全島約三分の一を占むる採石關係者の安危瀕滅を意味する關心事とてこの奔放無軌の弊を目視して大正十四年當時小豆島郡長たりし廣田氏は率先これが統制の機關たる石材同業組合創設の急務を叫び、努力して遂に創設した。卽ち同組合創設は正に頹勢に惰し衰退の一途を辿れる島石材界再建の楔子として特筆すべきものである昭和二年組合組織の正式認可と共に更に關西石材界統制の意味に於て主要産地を包含する關西石材聯盟は結成され以來規矩を整へた島石材界は組合統制の步調も嚴に着々新生面

を開拓し殊に市街軌道用板石の如き聲價の高峰にして、目下各種石材を合せて年産約五十萬圓を算しつゝあるが、依然島の三大特殊産業の一たるに愧らはぬ。

同組合は組員二百五十名を擁し第一次組長廣田氏に次で大森貞資氏更に昭和六年大森康守氏は組合長に就任し、三浦多藏氏副組長に共の他評議員、代議員は何れも各支部幹部として統制の局に當り以來一致協力青史も輝く島石材界に貢獻しつゝあるが近時の經濟的不況に抗して然も自力をモットーに需要の動向を省察して活躍して居る。尚同組合の幹部は左の通りである。

組合長　大森康守
副組長　三浦多藏
顧問　大森貞資
同　笠井昌平
同　三宅繁
同　小林松之助
同　森本政吉

# 小豆島馬越醬油合資會社

小豆島北部斷涯絶壁峻嶮を連ねた北浦村この地の馬越醬油合資會社はその全貌を通じて正に聖島北部醸造業を代表するものであらう。卽ちその赫々たる商程としてさきに慶應元年以來醸造に從事せし岡上亮平氏を中心とし明治二十五年資本金三萬圓の株式組織とはした、更に大正の初め氏及岡上俊郎岡上昇雄氏等同族三名共同經營の現小豆島馬越醬油合資會社に組織を變更し今日に至るが茂に岡上家は小豆島有數の商豪にして特に亮平氏の先代喜平氏の如き骨て著聞の同地北浦炭抗を經營し或は製鹽酒造造林等凡ゆる方面の産業的活動を以て地方開發に資す多かりし人材であつた。

尚後年濱野屋汽船の名も高く船舶運輸を以て遠く海外まで威勢を展べし壯事は今も斯史に記錄さるゝ所で地を馬越の稱こそ濱野屋使用人の馬で往來する事に發した俗稱だと謂ふ。

# 淵崎東紡と井上文八郎氏

かつて靈地小豆島の關門として島の巡禮を送迎した西部土庄淵崎も東部內海地方の近代的躍進に對比して今昔の感なき能はざるは如實であつた。

これは一つに意氣と觀念の相違に歸するが茂に生産の偉力と强靱を察した淵崎の有志は蹶起一番生産事業の表柱を建立したのである。この擧たる勿論同地方將來の發展を約束する劃期的壯圖にして然もそれが昭和八年完成を見た我國紡績界の寵兒東洋紡績の淵崎工場たるに於て祝福すべきであらう。

同工場は約二萬坪に紡機巨錘を設備し約六百名の職工を使役するが、此壯觀は慥に茫莫たりし同村に一大光明を揭げられたものとして强記しなければならない。素よりこの大事業斯の如き飛躍の令名を承けた同社は爾來同族俊郎氏主として經營に任じ古名の輝く所醸造醬油又質芳醇にして年次發展し阪神は勿論地方一般に好評嘖々眞に聖島北部の代表的商豪として毅然たる存在を謳はれて居る。

誘致に就ては同村長井上文八郎氏等の筆紙も尚且及ばざる犧牲と獻身的努力に主因し、井上氏は同村の豪農そして傍ら醬油を醸造し七代に亘り主は何れも信仰家である。

殊に祖父文八郎氏の如きつとに地方發展に意を傾け私立農事研究所を設立し、專ら米麥作園藝等の改良發達に資しそれ等篤行に因つて大日本農會より表彰されしあり又小學校建設村自治等に功勞切なりしは世人周知である。

現文八郎氏素よりこの意を承け早くより村政に携はり三十四歳の少壯にして村長に擧げられたが、以來同村發展の爲に日夜苦慮し遂に今回の東洋紡分工場設置と謂ふ劃時代的壯擧に到達したのである。

氏が昭和四年推されて村長に就任さるや兼て仄聞の大阪市所在合同紡績工場擴張に關して其眞相を探り事實と確むるや地方有志と語らひ之が誘引を目的に同社長谷口氏に運動を開始した。當時既に同工場設置を希望し候補地の選に入るもの關西に於て三十二箇所を數へられこの爭奪激化に同社も夫々調査を進めこの結果淵崎候補地は殆ど絶望に等しき地順であつたこれを聞くや氏は其實現の爲に犧牲を覺悟し上阪交渉を進める事百數十回宇内として拔くべからざる信念に道會社當局も感激……遂に井上氏等の所則に酬ふべく決定されたのである。

この間氏は初志貫徹を神佛に祈り地方の爲人の爲に誓つて進む誠心は開くだに感激そのものにして、更に氏の犧牲として自己所有の廢鹽田を殆ど無償を以て提供し尙用地埋立又住人の轉居等幾多の難事を總て圓滿に解決して、これが完成された、が今日の偉觀は如何、本來淋しかりし西部地方人心に一脈の事業意識を注入し更に廢鹽田餘地の利用甦生策と共に同地一帶は各般の面目も一新さるべく茲には井上文八郎氏等人材の沒すべからざる苦心と努力そして多大の犧牲が據として榮光を語るであらう。

# 小豆島特産素麵と同業組合

世人が小豆島に對する印象はこれ先づ高祖が遺德を巡る靈地の素嚴極まりなきにあると共に、その近代産業の發達も亦驚異すべき認識の的にある。その醬油業の如きは實に數字以上の何ものかを感得さるゝが、この旺盛なる事業意識は洵に敬服に値する。爰に島内三百年の歴史を誇る池田町を主産として特産島素麵の聲價又赫々たるは特記すべきであらう。

本來島の素麵は家内手業に屬し慶長十二年頃島人某は伊勢參宮の砌り大和三輪にこの製法を見參して以來種々考案工夫をこらし遂に製法を案出し、其後着々と普及驪て全島的特殊工業として莫大な生産を見て、島素麵の名は全國津々を風靡



するに至つたのである。

即ち明治初年の最盛時に於ける生産は一ヶ年約五十萬箱にも上り文字通り全國消費の大部を供給の盛況であつた。然るに其後漸次播州備中の各地方に斯業勃興し競激爭化するや道吉き歴史を誇る島素麵も原料及び販路等地利に惠まるゝ後進の挾擊を蒙り且識誣去勢の情勢に置かれたこの爲めに島素麵の販路は一時五萬箱内外を往復の悲境に陥ちた。

爰に怖るべきは大衆の向背にして盛なる者又衰ふとはこの事であらう。

かくて思はざる陷穽に島の斯業は殆ど滅盡し僅に點々たる狀を續けて居たが、獨り池田町は孤城を死守して遂に今日年産十五萬箱の大勢を奪還し長崎、佐世保、廣島、四國の諸地方に賞用されて居る、その不撓不屈の精進卓越せる製造技術獨得の風味は向ふ所更に洋々たるを望見され、目下主地池田町には副業生産家四百五十戸あり。其手製素麵「島の光」並に機械製「島の譽」は何れも斯界に壓倒的聲價を博し、ことに明治四十年創設された同業組合は爾來生産の統制檢査を勵行し品價の向上發展に主力を注ぎ異常の實績を擧げて居る。同組合長八代田勝次郎氏はかつて組合創設の功勞者にして副組合長野村庄七氏又同町助役を兼任終始組合機能を發揮して指導に努め更に將來これを根幹として統制ある進展を遂ぐべく大いに劃策しつゝあるが、組合員又之を期待して協力せるは蓋し歴史も輝く島素麵業の將來に幸多きを思はしむ。

# 聖島北部自治浦島本團と事業

海洋美の展望を以て生命とし誇りとする瀬戸内海を目して之が國立海上公園は實現したが、かくてその山海の雄渾絶勝は更めて天下の顧望を集中するであらう。

素よりこの國立公園たるや風景國讃岐を中心に開かれた新

しき生面であつて、同時にこの區間の人々には大一奮起の機運を與へたものではある。卽ち國立公園云々も畢竟内外大衆の遊覽自慰を主眼とし爰に於て海上周遊交通の完備の如き第一關心事にしてこの主要地高松小豆島の海上に小豆島北部大衆が自ら浦島丸本團を組織し公共的事業の旗幟も雄々しく小豆島高松間海上交通に至便しつゝあるは注目に値する

この非營利的浦島本團の自治事業浦島丸運行に關しても次の如き挿話がある。卽ち本來天惠の風致絶好を歌はるゝ聖島は物質の惠少く隨つて島人は齊しく自己の生活安定に最大の犧牲を省ず直往の共通的觀念を有つて居る浦島本團素よりこゝに發足して該航路に就いたが、大正十五年頃從來小豆島北岸海上交通運輸の極めて不利不便に鑑み同地方開發と福利增進を主眼に地の青年、

在鄉軍人は蹶然起つて地方的公共事業の主義に依て自營の發動船を運行した。これ第一浦島丸である。以來大部北浦兩村在鄉軍人、青年はこの交通機關の經營には幾多の悲劇苦闘を物ともせず團員一同は初期貫徹に精進したのである。

殊に幹部以下船員に至るまで犧牲的生血を綾る奉仕こそ世の感激共ものにして爰に漸く自治事業に一道の光明を得て昭和五年更に第三浦島丸を建造した。爾來輕快にして乘心地よく設備萬端小形發動機稀に見るモダン船を以て小豆島、高松間一日數回往復し、最短時間と最低賃金をモットーとして自己の使命を海上交通文化に托して寄與し然もあらゆる非道暴壓に耐へて邁進した。其後浦島本團の信念と善意を團結の協力はよく現代一部資本の暴擧に對する民衆的抗議の雄として時代は之を許し、且さらに期待をかけて熄なかつた。是は一面に近來社會の進化現象とも謂ふべく雄々しき姿である。目下浦島本團は大部北浦兩村の在鄉軍人、卽ち青年團卽ち四ケ團體不斷の努力を根基に本部長池西禎一氏を初め幹部團員一同の獻身奉仕を以つて高松小豆島の海上に午前午後交互に浦島丸の旗を揭げて運航しつゝあるが、この偉大なる世益と貴き公共の意義には一切の感情を離れて何ものかを感ずるはもち



ろん、今や國立公園設定の重要地區に力闘せる浦島本團の條理に同情は集中して居る。尙同團の幹部は左の人々である。

池西禎一、三宅保丸、西岡楳吉、三宅隆行、岡上　登
藤原　昇、葛西祐俊、畑中盛二郎、三宅宗次、佐伯富司

# 入部醬油合資會社

小豆島池田町の有力醸造場として聞こゆる入部醬油合資會社の歴史並にその生産する醬油品價は今や池田産業の誇りとはなつて居る。卽ち同社を代表主管する中塚条之助氏は現に池田町長として令名の人、明治二十九年氏の先代藤太郎氏はその經營する事業を中心に同族岡井熊太郎氏の事業をも合せ更に中塚吉郎、織田安太郎の兩氏を加へて爰に資本金三萬圓を入部醬油合資會社を創設した。素より氏並に一統の人々が夙に時流を明察の壯業にして爾來合資をめぐる人々は渾然一致更に次の目標に向つて邁進を續けた。

斯くて同社の星霜の効を積むこと約四十年、今や壯志は達せられ入部の醬油は廣島、呉を中心に中國地方に盛名を馳せ且堅實なる内容を誇つて居る。

然もその取引先は概ね中塚岡井の個人經營以來連續四十年の永きにわたり。その相互信用恪守誠實は商取引の一美談にも値する所であつて、かてゝ中塚家數代の祖業たる面目でもある。

目下中塚氏は池田町長の公職にあり長子享之祐氏以下岡井正次中塚新八、織田要氏等時代の人に依つて潑剌たる業況を展開せしめて居る。

# 聖島に輝く島電燈株式會社

由來聖島小豆島は信仰の地として名高く現代物質文明の滔々たる渦にも高僧の遺德は世俗を超越して久遠たるは蓋偲びても尚餘りあるところである。一度此聖地に至り靈堂に額せんか自ら深淵に浸る禪味を感受し清淨なる無我の心境を發見するであらう。

社長中田才藏氏

相談役中田延次氏

之卽ち偉大なる靈威の然らしむる所である、此の據として輝く靈光下に近來文化を表徵する電燈電力を供給し不動の島電氣株式會社の存在は又偉とするに足るおよそ世に粗雜は汝に玉を與ふとは蓋同社の今日に引用して極めて適當であらう。

今や島唯一の獨專事業として本據を草壁に置き堅實を誇る同社は大正八年の創立に係りこれよりさき大正五年草壁町の有力者中田延次氏の炯眼は地こそ島醤油の本場でもあり且は寒霞溪の雄勝を併せた內海地方の將來を靜觀して電燈の必要にして有望に着眼し、卽時これが實行に就いて考案を下した卽ち當時氏と接密の關係にある島醤油株式會社の餘剩動力を利用して同社に於て發電し點燈すれば事極めて簡單なりとしてこれに着手したが幸ひにも豫期の如く進展し、先づ草壁町千五百の點燈に初期の成功を收めた。かくて漸次電燈文化の恩惠に照して近接地の需要を喫し給電の不足を訴ふる狀勢をも來せば、爰に於て中田氏は事業の將來を察し此如き當面姑息の形態を排して斷然獨立機構を整ふべく決意したのである

而して資本金五十萬圓の島電燈株式會社創立に着手したが卽ち大正八年にしてこの壯擧會社創立に專念する事約半歲如何にせん未だ島の人心は電燈事業に理解なく氏は草鞋をかけて全郡村から村人から人と勸說大に努むれども應募は意の



如くならず迫の中田延次氏も殆ど奔命に疲るゝ苦境に立ち遂に初期五十萬圓の計劃を一擲三十五萬圓に減下し、島外に共鳴者を求めて漸く會社は成立を見た。かく陣痛の大なりし同社は島醤油の兼營を脫し營業を承けて爰に明るき一步をなすや、愈々島の全面電化を理想に山野を問はず開拓に努め更に駿足は翌九年池田町を中心とする小豆島電燈を。買收し爰に全く聖島を通じて獨專的電氣事業を一手に收めた。かくて普及發展の日を續けた會社は、十四年業勢擴大と共に資金の必要に迫られ十七萬五千圓を增して五十二萬五千圓の現資本會社を形成し以來順調な經過を辿つて居るのである。

其後昭和元年同社の產みの親にして聖島文化の一大貢獻者社長中田延次氏は痾疾の爲經營の第一線を退き新に令弟の現社長中田才藏氏社務を總攬するに至つたが。氏又賢兄延次氏と共に本事業の初期に携はり恰好の適任にして電氣事業の社會的使命を諒解し、只管經營の合理化に由る需要家負擔の輕減を念となし昭和三年犧牲多き自家發電の不益を察すや善處して中國水電よりの買電を決行、これを前後して再三料金値下げの英斷を敢行した。

さらに又直島豐島諸島にも點燈し製氷業をも兼營して最近七朱の配當を續行しつゝあるが、先に一割配當よりこの切下斷行の肚裡に潛む高貴な社會的觀念こそ洞察すべきものがあらう。

今や會社は確乎不拔の基礎の上に中田兩氏の經營の功を蒐めて聖地小豆島の潑剌さに寄與しつゝあるは實に偉大なる貢獻と謂ふべく特に中田延次氏の社會的獻身の努力と功績は永久に島の全土に燦然として輝き亘つて居る。因に同社現在重役は左の通りである。

| | |
|---|---|
| 取締役社長 | 中田才藏 |
| 取締役 | 平地實太郎 |
| 同 | 三好平三郎 |
| 同 | 菅豐三郎 |
| 同 | 太田喜十郎 |
| 同 | 三枝秀治 |
| 同 | 中田仙治 |
| 監査役 | 新茶春松 |
| 同 | 木下幸次郎 |
| 同 | 三好茂次郎 |
| 相談役 | 中田延次 |

# 清酒花の兄と時松酒釀場

小豆島に醤油の盛地として誇る東部内海地方に於て然も彼の醤油に對し清澄不滅の名聲を以て向ふるは草壁町の舊豪時松酒釀造場事菅氏生産の清酒花の兄であらう。現主豊三郎氏は香川郡鬼無の素封家德田家より菅家を嗣ぎ先代原道氏の歿後酒釀經營に當つて

居る。素より古くより聲名の當釀清酒は水質を天下の勝寒霞溪の清溪に發する好適に求め、隨て芳醇變るなき同酒質は島の内外に賞用されて居る。

殊に品評會共進會等に於ける成績は共醇良を如實に語る所にして尚菅豊三郎氏は小豆島内有數の人材なれば同町の多方面に盡し目下酒業の側ら信用組合長として活動して居るがその人格手腕はとくに定評あり。氏は釀酒の聲價と共に同町に於ける床しき存在ではある。

# 島の先賢長西英三郎氏と其の餘韻

かつて小豆島草壁に於て一世に其才幹德資を謳はれ、尚永く後世にその人格を思慕して措かない近來の傑人とは卽ち草壁町の故人長西英三郎氏その人を顧指するのである。

共在世中に於ける幾多の事績は今尚燦として輝き亘り就中島の釀造界に異常なショックを與へ、且今日の殷盛に梵鐘一打をなせる島醤油會社の組織の如き實に貴重な發動でこそあ



つたのみならず。明治四十五年天下の勝地神懸山拂下の議起るや某外人は正にこれを手中に收めんとす。折しも氏はこれ千歳の恨事としてこれを阻止すべく時の郡長綱谷某に諮り遂に氏は私財巨萬を以てこれを買受け勝地寒霞溪の名聲諸共本縣の誇りとして直に縣

に寄附したが、これ等世俗の夢想だに及ばざる崇高なる美擧にして今も尚氏に對する敬慕銘するあることは蓋し德孤ならずである。

然も氏が祖業たる醤油は嗣子長次郎氏これを經營し尚父君が創立の丸島會社も大正十一年以來社長として統轄する外數社の重役として島の事業界に活躍しつゝあるが、偉大なる父君英三郎氏の輝く遺鉢の適材として目下自己事業は愛媛、廣島下關等に發展し永年の地盤を擁して盛況を極めて居る。

# 丸島醤油株式會社

近時來り見よ天下の景として山姿秀麗四季四望の佳を誇る小豆島寒霞溪の雄峰絶勝は今更春の新綠秋紅葉の香を序すまでもなく、これが探勝客は遂年多きを加へつゝあるが、素よりこの自然の勝地にしてさもあるべきは當然である。この天下の景勝に處する草壁町は更に視野を一轉して生産事業にも醤油あり就中丸島醤油株式會社の如き實に草壁事業界の全面目を擔つて活躍發展の古豪である。

その歴史にも現況にも恐らく内海事業界の覇者として輝く同社は明治二十九年地の釀造家長西英三郎、中田爲三郎、鎌田定次、三好清次郎氏等發起し資本金七萬五千圓の島醤油會社と稱して成立し、同時に長西英三郎氏は社長に就任した。爾來同地方に於ける唯一最初の事業會社として内海醤油界を激發する所多く、然して長西社長はよく天禀の英明を須ひ經營に當るや業況漸時進展遂に明治四十一年資本を參十萬圓に增

加したのである。

これを決行後大正四年に至り同社の動力を利用して電氣事業を兼營し內海一帶の地ははじめて煌々たる電燈文化に浴した。その頃同社の發展活躍は實に目醒しく、次いで大正八年遂に電燈事業を分離島電氣株式會社に讓渡し醸造に專念するや、社名を丸島と改稱した。

昭和五年七月更に增資して六十萬圓と爲し今日の盛況を示して居るが、其創立以來三十有六年歷史と堅實なる基礎を築ける同社幹部の功績は又偉大にして目下醸造する巨萬の醬油はこれを全國各地に供給し尙海外に及ぶ盛況である。現社長長西長次郎氏はかつて轟く足跡をのこせる同社初代の社長英三郎氏の嗣子そして、その堅實主義は常務原田氏の明徹靜慮を相俟つて同町醬油醸造業の面目を双身に活動發展を續けて居る因に同社の現在幹部は左の通り。

取締役社長　長西長次郎
取締役　原田嘉一
同　菅豐三郎
同　高橋藤市
同　三好平三郎
監査役　松山實太郎
同　平地實太郎
同　中上男也
相談役　水野邦次郎

# 水野邦次郎氏



醬油王國小豆島內海に於て水野邦次郎氏の醬油業の發展は異常である。氏は自業の外各種事業に參劃し同島文化の促進開發に寄與する所多大にして嘗ては縣會議員として島を代表の政縣に席し幾多の實蹟功勞を止どめて居る。氏の先代金七氏は農業をもつて勤儉力行の士であつた。然もその明敏は明治十一年ごろ同地方に醬油醸造熱漸く興らんとするころ氏も農業のかたはら開始した其後斯業の將來いよ〳〵有望視さるゝや斷然醸造を專念し主力を注いで發展を期した。

かくて其後富士み印醬油の名は早くも阪神地方に拔くべからざる聲價を博し、この進展とともに確固たる基礎は築かれたのである。この人にしてこの子あり。當主邦次郎氏は其の長男にして島で最初の赤門工學士とは以て金七氏の識見の程を偲ばれる時代の新知識を修めた新進の邦次郎氏は明治三十九年以來父業醬油醸造に携はり。あるひは斯界の大立物木下忠次郎氏と協力して島醬油の改良發達を期し又は自ら清水醬油會社を創始等其多能を實行に移しつゝ遂に赫々たる今日の發展を招來した。

更に特筆すべきは島醬油の關東進出である。しかもそのトップは氏の富士み醬油にして此新販路開拓こそ島將來の好需地とし目下敢戰中にして。その他氏の斯界に致せる努力功績は洵に至大であるが、爰に期せずして衆望をあつめ大正八年以來三期十二箇年に亘り島を代表の縣會議員として光榮を擔ひ此間にあつてもオリーブ煙草の栽培等創始の外產業開發を主唱して實施の功績を收め、然も事に當つて功を矜らざるは氏の美德である。

最近店業を合名組織に改めると同時に設備を擴張し一大飛躍を期して居る。

# 清水醤油株式會社

小豆島内海醤油王國の圏下にあつて今を新進の英氣物凄く發展躍飛を續けつゝある清水醤油株式會社の現況は内海醤油界幾多の古豪に伍して誇るべき商程とは謂ふべきであるこれ島一流の貴き信念を把握すると絶へざる刺戟に精進を加ふることに因るのであるが

同社は明治四十年五月同村水野邦次郎、淺尾政太郎氏等有志發起し資本金二十萬圓を以て創立された。社長水野氏は周知の如く内海有力事業家であり淺尾氏又醸造經營に獨特の手腕を持つ逸材にして創立以來これ等幹部の達見も見事よく時流を理察し殆ど豫期に酬はれ文字通り順風滿帆の實績

をとゞめた。かくて事業の進展盛況と共に大正十年倍額四十萬圓に增資を敢行し以て飛躍の大勢をかまへ、同時に製品の向上を計つて施設を完備し、且販路を全國的に擴張した。殊に南洋、ハワイ等その密なる商策は寸地も餘さず我地たらしめずんばやまずの慨を示して精進を續けた。この如く生氣潑剌驍足の同社は異數の躍進を遂げて又も資本を六十萬圓に增資した。然も内容の堅實は他を以て誇るに足る所にして目下約三萬石を造石し名實共に内海斯界屈指の醸造會社として盛名を謳はれて居るが、最近南洋ハワイへの進出は目醒しきものあり同社の前途や察せらる。尙現在の重役は左の如くである

取締役社長　水野邦次郎
專務取締役　淺尾政太郎
取締役　高橋永藏
同　長西長次郎
同　高橋馬吉
監査役　矢形石松
同　松山實太郎
同　平地實太郎



# 小豆島醤油同業組合の活動

今や小豆島の經濟的發展はこれを代表する醤油醸造業を以てその中樞として驚くべき進境を辿り恰も他力の俗說者流をして愧死に値する勇躍を見せて居る。その共處には島特有の敬服すべき共通的理念卽ち各々勤儉力行が使徒を以て任じ且團結は力なりを服膺して庶二無二生産と生活に新しき希望をたゝへて日に現狀を打開しゆくその活況は萬事を熱と努力によつて解決して居る。然も斯業の生産より販賣には夙に健全にして合理的組織を整へ一絲もまぎれなき統制下に品質の向上と取引の圓滑が期せられそれが今日の盛況を依存して居る。この記錄すべき島醤油事業發達隆昌に沒すべからざる功程をきざむに小豆島

醤油同業組合の活動がある。その部門的有機的機能こそ正に島醤油界躍進の母性的分野をなせるは明らかである。島醤油の發展は世に詳かならざるも、明治初期には未だ家内副業的生産に過ぎなかつたが、其の後時代の推移と同島の地理的又は弘法大師の由緒それに加へた島一流の自已意識等の諸原因に依つて漸次阪神及び中國九州人士と取引を開始し、以來販路も阪神を中心として擴充された。

明治十一年であつたか島の醸造家は永久社なるものを組織し對外的取引の衝に當つた。かくて年月と共に業況の發展を萠したが、同時に又免れざるは業者各自の競爭の弊にしてこの裡に明治三十四年十二月はじめて重要物産同業組合法に則る現小豆島醤油製造同業組合の創設を見たのである。

卽ち同組合は島醤油醸造業百年の大局に着意し飛躍發展を前提とする業界統制の機關にして、これが重要規矩設定に參劃せし者は長西英三郎、水野金七氏の如き主なる人であつたこの同業組合は以來其の機能を遺憾なく發揮しつゝその後更

に木下忠次郎氏の主唱に依り明治三十八年十一月苗羽村に專ら醸造技術の研究向上を期して組合醤油試驗場を設立經營に當つた。

其のち該試驗場は縣立に移管さるゝと共に大正五年組合は又別個の研究所を開設し縣試驗場と協力して一層の研究と醸造家子弟の養成等高遠なる理想の下に着々實効を揭げ、又品評會講習會を實施する等凡ゆる努力を以つて時代の要求する否同地斯業發展の上に最も適切なる要求を計劃實施した。

素よりこの運用經營には至大なる苦慮を伴ひしもこれを打開し更に取引の因襲を正して資金の運轉圓滑迅速を期し或は商品代金回收不能を未然に防ぐべく敢然手形取引を開始決行する等尠くもこの一事は近代商取引上絶体必要なる相互信用確立の手段であつて、組合幹部はこの難事をよく遂行し斯くて取引の安全は期せらるゝのみならず取引上幾多の危難を免れこの最も著しき實例としてかの大正九年財界の激變に際し取引上の災害極めて尠かりしは、この特殊制度の妙味特筆すべき効果として當時組合員一同の衷心感謝せし所であつた。斯の如く同組合は生産事業の統制發達保證機關として必要を謳はれつゝ全島醤油業者を抱擁支持によつて目下大阪、神戸廣島、高知に各出張所を設置し、一ヶ年爲替手形の取扱ひ額七百萬圓乃至一千萬圓に上るの盛況にして、現下一般的不況にも一弊を吳れぬ島醤油界飛躍の半面にこの組合の如上緊切なる活動をこそ要因する事又多く手形取引實施に就ては特に木下忠次郎、水野邦次郎兩氏の努力は大であつた。

この醤油代金取立に關する事項及び組合特別事業たる研究所が研究ならびに子弟の養成は共に同組合の重要務にして是等積極的活動に要する組合經費は何れも造石賦課金として徴收して居るが、この總額七年度に於て經常特別を合せ五萬五千七百六十六圓を計上し、その規模如何に巨大整備せるを察知するに難くないこの賦課金に對しても組合員は快よく期限内に完納し活動を期待する所遺に事業内容の充實が偲ばれる尙最近同組合は時代の推移による近代的活動を思惟して組織を工業組合法に依るべくその筋に主唱し將來益々發展の餘命を有する島醤油界に更に機構の完備を期せんとする如き洵に時宜の考案にして其の他各種活動要項を包括してその存在の意義愈々深く今や島醤油界の赫々たる聲價信用地盤の確固も要はこの健全なる合理的助成研究機關の完備其の他一切の團結協力の賜にしてこの懌びは組合ならびに同地方にのみ享受



し得る誇りでなければならない。

然してこの多事多望の組合事業の運用に當る現組合長藤野茂氏は大正九年官を辭し同組合長に就任以來組合活動の諸狀について日夜苦慮し生産者對問屋に介在して常に相互的協定を施策し島醤油永遠の繁榮に寄與せる功勞の特記すべきは勿論その官息を脫する洒々落々大處高所の明斷は業界人の齊しく畏敬措かざる人材にして、組合にこの適材眞摯の藤野氏あり又誇るべき同島一般人士の氣格と旺盛なる事業意識を結晶した。關西醤油王國小豆島醤油界一般の拔くべからざる陣容聲價は尙これを一層の將來に延長擴充しつゝあるこそ、香川縣小豆島の名に於て壽ほぐ。

## 橋本屋醤油醸造場

今や小豆島の産業的偉容は殆ど内海地方に於ける醤油醸造業を以て代表し且集中するこの現實壯觀を正視して過去これが建設に須ひし意力惡戰苦闘の種々相を思察する時何人と雖も感激せざる者はないであらう。

爰に安田村高橋筆四郎氏の醸造場は同地斯界今日の盛況の祖師とも謂はるゝ高橋文右衛門氏の後裔にして文右衛門氏は今より約三百年前文化六年頃身を挺する苦心を以て始めて自家醸造醤油を大阪地方に販出之を楔機として以來京阪神は島醤油最大の需要顧地として拔くべからざる名聲を敷衍して居るのである。

この高橋文右衛門氏の開拓進取の壯擧こそ三百年後異常の發展隆盛を極むる島醤油業今日の基調にしてこの巨大沒すべからざる先覺的功績は斯業の發展躍進と共に愈々燦然たるものにして斯界の人々にもこの感銘やあらう。

# 高橋荒吉釀造場

茂に高橋筆四郎氏は六代の祖彌衛門氏に發し氏は文政元年前記先覺者文右衛門氏方より分家し爾來山や印醬油釀造元として歴史と盛況を謳はれた有力釀造家である、明治初年現筆四郎氏が祖業を繼承するや一意斯界の發達改善を期して邁進し逸早く倉庫施設に改善を加へ醸造の機械化合理的生産を視野に發展して大いに島醬油界鼻祖山や印の氣を叶いた。尚他方若くして縣政並に一般事業界に驍驍し雄名ありしは周知にして、目下六十八才の老齢は昭和五年事業を資本金二十萬圓の合資會社橋本屋商店に改稱し氏及び長男直晴氏を監督下に次男完三氏の新鋭を以つて專ら内外營業の衝に當らしめて居る、完三氏は壯齢三十才果斷の英才にして後に控へる老練の父兄緩急の配劑もよろしく斯界の雄者として島醬油界創始の舉れも輝く祖業に活躍しつゝある。

小豆島安田村に於て高橋家三醬油の一として又安田會社の重役として活躍せる高橋荒吉氏の醬油釀造は氏が高橋實藏氏の實弟として明治二十六年一月分家創業し當時身を教職に在りし氏は地の事業島醬油の將來興味深々たるを覺へて斷然職を辭して以來斯業に精進努力して遂によく今日の基礎を築いたのである。

目下は二千石内外を釀造し阪神地方に於て光輝ある聲價を誇つて居るが、實務は長子喬三氏これに當り喬三氏は大中出身父業に專念しつゝ其祖人の苦心と努力その功績が斯くもよく現實發展を招來せる事を偲び殘されたその將來の責任又輕からざるの感懷やあるは洵に頼もしき言辭でこそある。



# 安田醬油株式會社

小豆島醬油王國屈指の事業會社として安田村星ヶ城山麓に宏大を劃する安田醬油株式會社は明治三十三年の創立にして然も當時創立發起人として高橋實藏、高橋筆四郎、高橋荒吉、城實吉、永車菊藏、高橋彌三、森口榮三郎の諸氏を擧げては同社の實質は察するに足る。同社は前記有力者の主唱に資本金十二萬五千圓を以て創立するや高橋實藏氏社長に就任總意内容第一主義を固守して經營苦節十七年後大正六年社運の進展にまかせて資本を二十五萬圓に增額し更に大正十一年一般財界の膨脹と共に現在資本金七十五萬圓に增資した、この間幾多の變轉を閲し且揉まれ〳〵つ操舵の功を積み赫々たる現實隆盛を招來して居る。殊に會社の中堅幹部は過去及現在とも島醬油發展の始祖と謂ふべき先覺高橋文右衛門氏の一門それを支配する事に於いて更に意義深きあり。もと〳〵同社は最初高橋家一黨の合同企業として計劃せし所、同村有力者は尊敬する故人文右衛門氏の生地安田村の事業たらしめん事を懇望するあり故に高橋一門の人々もそれに變更して株式會社の成立を見た爾來株主は安田の人々に局限支持されて居ると。

かくて堅實順調に成長せる同社は現に二萬石を造石し阪神高知、愛媛、廣島を主要地盤として殆ど全國的販路を有するはその輝く歴史と安田會社の名に群雄逸足の業況を示す所以である。

尚同社に功勞多き高橋實藏氏は先年物故し現社長高橋永藏氏はその實弟にして熱心社業經營に當つて居るが、これ同社のため大に祝福すべきであらう。因に現重役は左の通り。

社　長　高　橋　永　藏

# 高橋永藏氏と醬油業

専務　永車萬藏
取締役　高橋筆四郎
同　松下爲人
同　高橋荒吉
監査役　高橋和三郎
同　高橋實造
同　高橋文治

小豆島の醬油村安田に於いて三大醸造場の一を爲す高橋永藏氏の山モ印醬油は又何んとしても斯界の嚴然たる明星である。氏も斯業の先覺者高橋文右衛門氏が一統にして文久三年の創業に係り聖島有數の豪家と謳はれた長見高橋實藏氏の經營中明治三十三年以來その事業に協力し醸造を主管せしところ昭和五年一月實藏氏長逝と同時にこれを繼承したが、目下其醸造する數千石の醬油は阪神に移出し就中大阪鐵道局購買部其の他官廳方面の大口取引は共の品質聲價信用を立證する所であらう。尙氏は年來醸造の外小麥大豆等醸造用原料並に米を取扱ひ年額四萬石五十萬圓に上る盛大を極めて居るが、何れも薄利を信條とし地の醸造事業發達に資しつつあるは當に一流事業家の氣高き商則とも謂ふのみならず、其人格を清書するに衆望を擔つて村會議員たり又在鄉軍人分會長として村自治に盡し更に同業安田醬油會社外數社の社長、重役として重きを爲して居る

# 福井貞二氏の活躍

小豆島内海醬油界の新人否世に自已建設の勇者として安田村の醬油醸造家福井貞二氏の如き今しも時代の要求する青年事業家と謂ふべきであらう。

氏は大正四年十六歲にして居村藤井醸造場に雇はれ稚事に從ひ餘勞にはげみつゝ切々主事に心をつくして居た素より氏の父はかつて廻船を業とし島醬油の販路開拓の功を以て表彰されし事あり。この子にして貞二氏は藤井氏方にある事六ケ年二十二歲早くも一角の醬油醸造を修め杜氏とはなつたが、一日感ずる所あり主に乞ふて離店を申出た。然るに常時世の青年と歩みを異にする貞二氏を手放す事を惜しみ容易に肯ぜず、その言偶々自分は今でこそ一介の雇ひ人ではあるが、將來必ず主をしのぐ醸造家として主名を擧ぐべく今や正に獨立獨歩の機である故にまげて寛暇をとの懇願は遂の藤井氏もその勇壯なる意氣と信念に感激し爰に將來有爲の青年貞二氏が前途を祝福して快く同店を退かしめた。以來鐵石の如く燃へ進む氏の事業意識は直に池田町に於て醬油小賣を開始した。

然るに世の成功の道はさに坦々たらず氏は來る日も〳〵行商を以つて續ける事六ケ月依然その成績香しからざれば、遂に業を煮やし何の道損失を免れずとせば損の仕ついでよろしく彼等に醬油を與ふべしと各戸に無料配付の實彈戰術を敢行した。元より良質と安價を誇つた醬油とてこの果敢の戰法に漸くその眞價は認められ爰に信用を生じて一舉從來の苦心は報ひられた。かくて三ケ年の後相當の成果を收めた氏は計らずも病魔に犯され醫師の最後の宣告に止むなく店を撤して生家に保養の身とはなつた、天なる哉その後奇蹟的に全快し爰に於て昭和元年氏は殘る少資を以て醬油醸造を開始し一陽來復の思ひして氏獨特の氣慨に邁進したが、これとて刻苦をつゞけ踏みしめ〳〵往く堅實さは漸次小より大を築いて目下一

千石醸造し尚他に諸味を求めて二千石内外を阪神地に販賣の盛況を見つゝあるが、其事業信念として從業員及取引先自己の三者は常に渾き連鎖と相擁して進むその戰術と殊に頭腦の緻密は諸般の事象に卒先これを制して居る。さきに容等徒手の一厖人の身を以て即下に單騎自己を開拓成功しつゝあるこの敏腕天才の福井氏は今や同地醸造界の風雲兒として興味と嘆賞を注がれて居る。

# 安田の山玉醤油

小豆島内海醤油村にあつて山玉印醤油の盛名は又記錄すべきがある。卽ち同醤油の神崎醸造場は慶應三年始祖作太郎氏の努力を一天張りに創まり當時僅に荷桶の醸造も朝露暮雪の刻苦をなめ遂に今日の基礎を築いた。此間不測の悲境に轉落しては作太郎氏の長男榮吉氏が捲土重來を期して邁進し遂に家運の挽回信望を博し更に其息民十郎氏の躍進途上又も昭和二年三十八歳の男盛

りにして氏は卒去した。

かくてこの盛年民十郎氏の病死後良妻ハルヱ女は以來祖業經營を亡夫並に祖先に對する唯一の香奠として孜々日下二千餘石の醸造醤油はこれを阪神地方に販路を求め、女性にして男にも優り自家事業を統制飛躍しつゝあるが、同女の如き又推賞すべき事業家である。

尚茲に亡き民十郎氏の弟啓三氏は宗家の不幸と共の後ハルヱ女の孤守健闘に衷心感激し自己事業の傍らハルヱ女に協力同家事業の發展に資しつゝあるが、何れこの家族的厚情の發露は山玉印神崎醸造場にかもされた麗はしき光景にして三者をして感快を覺しむるものがある。



# 内海醤油株式會社

内海醤油株式會社の濫觴は明治三十三年社の現幹部鹽田龜吉氏外數名の組合事業として僅の醤油醸造を開始し、次で三十五年好調によつて資本金五萬圓の内海醤油株式會社は組織されたのである。爾來經營の方針を自力の一天張りに終始し且内部組織の簡易は必然經費の節約合理經營の範を爲し更に吟醸の醤油は常に品質の擢良を腐心せば其の成績愈々向上し然も同社幹部は一切株主配當を顧念せずして年々其利益を全部蓄積運用に當てこれが複利的增殖の結果は遂に大正九年資本金二十萬圓を增資し之も會社内保有金を以てする自然增資であつて當時地の業界はこの好成績に一大ショツクを覺へた程である。

かくて一見鷹揚の構へにも着々實績を收めこの實質主義の堅陣に擁る同社は京阪神にぬくべからざる販賣の素地を築き同時に再び飛躍の秋を迎へた。卽ち昭和三年一躍六十萬圓に增資し此增資も大部分保有益金を以て拂込に充當したが斯の如き長足の飛躍進展は稀にして素より株主は年次の配當こそ入手せざれ投資の對照とする事業及び會社資産は日に月に增殖蓄積され繁榮を語るこの結果の懌びは又大である。

現に二萬石前後の醸造醤油は神戸出張所を通じて嚴撰する取引問屋其他に苦慮少く捌かれつゝあるが、此盛況裡に社長鹽田龜吉氏は小豆島事業界に資望高く支配人山本圓造氏と共に溫厚の御者として社業の經營に任じ島醤油王國の一角に異彩ある展開をなして居る尚同社現在の重役は左の如くである

| | | | |
|---|---|---|---|
| 社長 | 鹽田龜吉 | 取締役 | 山本圓藏 |
| 取締役 | 山本時藏 | 支配人 | |
| 同 | 阪下助三 | 監査役 | 藤井重次郎 |
| 同 | 福井嘉市 | 同 | 石井岩吉 |

# 香川肥料株式會社

最近小豆島醬油産業のそれが派生的注目すべき事業として安田村香川肥料株式會社の業態は異なる所である。從來醬油の地小豆島に副産の諸味粕はその利用粗雜にして僅に豚育又は肥料の一部として供用を見るのみであつた。

然るに大正十二年頃當時香川縣肥料檢査官吏の職に在る谷口賢次氏は諸味粕の化學加工に於てその効用價値の著大なるべきを創意しこれを究むるや愈々その肥料價値並に諸味粕の利用價を倍加すべきを確信遂に官をも辭してこれに沒頭すべく決意し企劃實現せしこそ卽ち香川肥料會社である。かくてこの理想下に地方有

志の協力を得て資本金五萬圓を以て創立した同社は爾來地に豐富の原料諸味粕に獨特の化學的加工混合を以て一流の桑肥配合肥料を完成特に靜岡、愛知、長野等關東並に北陸の養蠶盛地に餌粕代用肥料として經濟と簡易を兩面に意外の歡迎を受けて飛躍發展を遂げ、其理想は爰に達成された。その後同社は昭和元年資本を十萬圓に增資し化學部を併設醬油醸造に必要欠ぐべからざるアミノ酸の製造も始めたアミノ酸は化學的調味劑にして然も同社生産のものはその原料を精撰純正比類なき成分を含有し從來品の全く追隨し得ざる資質を誇り日ならずしてこれも壓倒的聲價を博したが、昭和四年會社は不幸にも不測の災禍に見舞はれ工場は全燒の上財界不況の悲境の二重奏に於て同社は嘗て味はざる多事多難に直面したのである。

爰に於て幹部は元より全員悲壯の思ひして直に社屋を再建完整と共に面目も新に一意轉禍爲福を期して健闘を續けたればその功は遂日顯はれ目下肥料及アミノ酸の外醬油着色劑カ



ラメル等醬油生産に必要なる資劑の自給自足と粕の處理を目標とし生面を拓きつゝあるが同社の存在及び谷口氏の獻身的努力は島醬油界一般に多大なる効用を博せる外その産業開發の意義こそ大書すべきものがある。因に同社重役左の通り。

取締役社長　高橋永藏
專務取締役　藤野茂
常務取締役　谷口賢次
取締役　福岡一郎
同　西山庸三
同　長西長次郎
同　尾崎条次郎
監査役　福井喜三太
同　淺尾政太郎
同　鹽田忠男

# 島醬油界の麒麟船山醬油株式會社

目下我國に於ける醬油醸造高はこれを概算二百數十萬石を算するが、この中千葉、香川兩縣に於て約八十萬石を醸造し、殘り全國に分醸されつゝある。千葉、香川の現醸は大要五對三の比率と見られ正に天下の兩雄として斯界を壓倒して居る片や千葉勢は野田醬油以下山サヒゲタの三印を以て固め、かつては我國醬油界の大勢を壟斷闊歩したものである。然るに時勢に蘊醸されて本縣小豆島醬油の鋭角的な進出を萌すや彼多年の牙城に肉薄する事急にして日ならず前述の大勢に迫つたこの我國醬油戰線の異狀下に世人の尠からざる注目を惹ける島醬油の級數的躍進こそ驚異の外ない。

尤も其處には特筆すべき島特有の信念の强さ並に鐵扉を拓く意氣と力これをあはせた不滅の眞理が藏されて居るからに

して凡そ現代過酷白熱。生と死の岐路に立つ經濟戰に於て把握せざるべからざるはこの一法であらう。

而して世にも潑剌たる小豆島醬油界に當代島の精神と生氣を遺憾なく表徵し異色の發展を遂げつゝあるものに船山醬油株式會社がある。その輝く存在は島醬油王國の一異彩として世の視聽を蒐めて居るが。同社の發足には又一大異彩が綴られて居る。卽ち時は明治二十一年頃恰も苗羽村の一部を爲す

而積僅に四町六反餘歩村有の船山は當時村人の飼牛場であり、刈草の地であつた。

然るにこの山の地味肥沃に着目造林を企てたのが卽ち照下兼吉氏外十名の人々で遂に明治二十一年共同出資各人負擔二十七圓を以てこの船山を買收し造林經營を開始した以來造林の成長により生ずる利益全部を共同基金に蓄積し只管前途の大を樂しんだのである。かくて明治卅三年この基金漸く二千圓に達すれば現社長照下兼吉氏はこれが別途の利用を考案、ついて醬油釀賣業を創始すべく議一決直に百石の醬油釀造を創始した。この幸多き一歩を然も、晴天の霹靂的船山組共同醬油は以來一同の奉仕的奮闘努力に因つて意外の好績を收め、次で三十五年百五十石に增石し更に三十九年には一躍一千石の實に驚異的進展を劃した。

この間一同は殆ど無給不休の精進を續け一切合財を運轉資本に活用し一意事業の擴大と內容の强化に努めるのみ、この世にも稀な超時代的意氣その經營は爰に成果を纒めて大正六年資本金十萬圓の株式會社に改變し以て事業の永遠性を確保と同時に更に一段の飛躍と榮光を孕む船山醬油株式會社は正式機構を整へて發祥した而してこの年の釀造も一躍三千六百七十石の巨石を示したのである。

按ずるに約三十年の昔少資造林の發圖は恐るべき一致團結の偉力によつて恒久的生產事業の明朗を獲得し叩けば開かれんの處世の秘訣を如實にして同社は更に大正十年時運に掉し資本金卅五萬圓に增資を敢行した。社業の進展愈々急にして然も特殊の集積された努力の結晶を內容とする同社の信用と商況は日一日と向上し又しても注文に應じ得ざる狀況に昭和二年再度五十萬圓增資を決議しこれを決行の途半各方面よりの投資希望者續出し遂に決議額を超過する事四十萬圓鄕黨の



熱意と信賴を拒み得ず遂に九十萬圓增資に變更して總額百二十萬圓の現在に定着した。

この一事を以ても既に同社の事業的眞價は察知され況や其後の不況に處しては一切超俗の營業信念に終始せばその活況や思ひ半にあり昭和六年以來全國的販賣網とそして一方化學的釀造の新施設を整へ今や一ケ年十萬石釀造の實勢能力を完備し島醬油王國の花形として潑剌無雙の躍進を遂げつゝあるが、實に雄々しき姿でもある。

爰に於て本項の最後を飾るべきは同社に社長照下兼吉氏の存在である。氏が十人組の初期より百二十萬圓の會社結成の今日まで絕へず主動的地位にあつてその歸趨を過たず同社をして今日あらしめて居るが、其の落々たる豪放浩志に熱火の氣力然して人に直截敢厚は氏の天賦にして正に要因を爲すがこの人にして秋毫も學校教育を經ず殆ど文盲の裡にこの展開やあり故に社員等の如きも學問よりか實力に主點し指導するが氏の事業意識は六十七歲の今日と雖も常に針の穴から天を覗き、時こそいたれば大海も一股とは蓋豪快そのものにして氏の偉大なる存在に堅實前進の步調を辿る同社の前途こそ眞に洋々たるは敢て言を俟たない。現在同社の幹部は左の通り

取締役社長　照下兼吉
取締役　木下仙次郎
同　照下源藏
同　森安吉
監査役　松下爲八
同　森松吉
同　川北茂三郎

# 島の若き人材照下源藏氏

京阪神地方を最大の活躍舞臺として全國に偉大なる進展を遂げた小豆島醬油界の現況は唯夫驚異の一語に盡るものである。この旺盛なる新興產業の意氣憐ゆるが如きその中に苗羽の新人照下源藏氏は同地靑年事業家として本年三十才少壯の

裡にも自ら大事業家の氣宇を備へてゐる。氏の醸場は明治二十年頃先代始めてこれを創始し僅に三百石の醸造より菅ならざる努力精進を以つて遂に確固たる現在の基礎は築かれた。

然るに昭和二年氏が大阪明星商業を卒へ未だ种々たる折しも突如父の卒去する所となり。爲に青年源藏氏は全く天涯孤獨夢想だにせぬ急變醸造業經營の重責を擔はざるべからざる立場に置かれた。爰に直

面諦思する時この新しき悲哀滾々として盡せぬ涙をぬぐひも暇せずこゝもと奮揮一番を決意した。

然も父が死を前にして曰く『人を敬し克く順ひよ』の一言は源藏氏をして感銘深きあり。爾來父在世時とかはるなき信用信頼をのみ世に求めて業務に精勵の結果は期せずして、信用をあつめ生産する島一醤油の名も雄々しく、一流醸造家として第十一師團の御用を達するの外阪神地方に聲價得て業況又日に進展の現況にあり。尙氏は鄕に村會議員におされ又船山及び小豆島兩會社の重役として多面の活動貢獻をなしつゝあるが、氏の如きは實に島醤油界に於ける中堅的人材にしてその將來に異常の期待をつながれてゐる。

# 苗羽の巨豪塩田龜吉氏

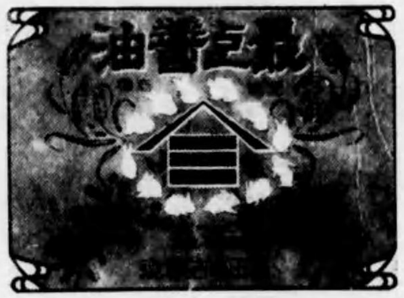
小豆島苗羽村醤油醸造界に於いて赫々たる盛價を持つ山三印醤油こそ即ち豪家鹽田龜吉氏の生産醤油である。氏の醸造は先代與平氏の創業にして明治二十七年氏が之を繼承した。

當時二十一才の青年にして造石又僅に五百石前後に過ぎざりしを以來奮闘をつゞけて今日正に六千餘石と云ふ巨石の發展を遂げた。此間氏は刻苦勤儉汲々として休まず産を爲して



益々頭を垂れ奢らざる所その謙讓の德は同地方人士の齊しく讃仰を惜しまない所である

この實力ありこの人格に寄頼する人々は明治三十年氏が二十五才早くも村會議員に選出し爾來三十年間村自治の爲盡瘁し、更に又醤油同業組合の創設を見るや選ばれて副組合長に推され其の他島一般事




業界に貢獻する所は絶大である。殊に最近は養嗣子忠男氏に營業を擔任せしめ身は專ら同地事業界並に公共に盡瘁しつゝある。

# 醤油キッコ石と石井平吉氏

小豆島苗羽村馬木石井平吉氏の醤油キッコ石の名聲は著名である。氏の醸造は父岩吉氏明治七年の創業にして以來の變轉にも不拔の努力を注いで今日の盛況を來して居る。日下その生産醤油は大阪及び堺、高知、播州等諸地方に廣く販路を求め品質優良を謳はる、殊に大正三年平吉氏が祖業を繼承の後異常の躍進を遂げ島醤油界の雄を爲した。尙岩吉氏はかつて餘技淨瑠璃に堪能にして義調と稱し老齢七十一歳の今日尙斯界の長老大關として關西西部支部長に推されて居る。

# 万金醤油と木下仙次郎氏

小豆島苗羽の醤油地帶にあつて萬金醤油の醸造家木下仙次郎氏近來の發展は又注目に値する。氏の醸造業は明治五年先代の創始にして幼時よりこれに從事の氏は大正十年父長逝後愈々斯業に注心し爾來急迫する經濟界の變動不況を常に洞察經理して異常の好績を收めて居る。

就中一般物質の低調を萌す

毎に氏は逆風を擁して巨利を博する等普く不況時にこの積極商策は他の追隨を許さぬ獨特の手腕であつて、不況に喘ぐ昨今氏は永年の事業的修練に鑑み現下の不況はこれ非常狀態に非ずして平常の狀態なりと自若である。故に人は口に好況を急望する如き實に沙汰の限りと稱しつゝある如き、此達觀は一般事業家に對する千鈞の辭にして。その晴雨平日の備を强調する邊り指導的言行と謂ふべく斯くて生産する數千石の醤油は資質をこめて阪神地方に盛價信用を博してゐるが、氏の如き營業の堅實と其人格を以て島醤油の雄たるは勿論尙數社の重役としても活躍して居る。

# 木下幸次郎氏

小豆島苗羽の醤油本陣に於て青年醸造家木下幸次郎氏の如き同地斯界の中堅事業家と爲すであらう。氏はかつて大阪明星商業に學び直に祖業を繼承したが以來約十五年朝夕を分たず。卒先業務を經驗研究し一意良品生産に苦心し、更に近時



の商況を察しては薄利多賣の方針を確守して邁進しつゝあるが、その現況にして氏が青年事業家の面目は躍つて居る

然して目下數千石を醸造し大阪、神戸、西宮を中心とする創業以來三代の確乎たる營業地盤に由つて潑剌たる商程にあり更に氏の堅實なる經營は斯界に多大の明朗を與へる

のみならず、かつて村會議員として又現に島電燈、內海汽船の重役として活躍しつゝある。

# 醤油金両と藤井庄春醸造場

小豆島醤油王國を繞つて其處に絶へず底流する全活動意識こそ今日の發展を招來して居るが、中にも苗羽村馬木醤油金兩の藤井醸造主藤井庄春氏の如き實に地の共通的意氣を遺憾なく表徵した青年事業家である。

同氏の醤油業は亜父吉藏氏が明治初年創始せし所で父庄太郎氏之を繼ぎ昭和二年更に現庄春氏が繼承今日に及び父庄太郎氏の時代に於て一大躍進を遂げて今日の基礎は築かれたが昭和二年庄太郎氏突如として急逝の時庄春氏は未だ十八

業學究の徒にありしを、この悼むべき環境の急變に餘儀なく父業經營の重任に就いた。爰に氏は世のあらゆる悲運を想到して蹶起するや以來身は實踐と誠心誠意をモットーに斯業に精進し既に七ケ年を經過の今日に於てはその一般に漸く圓熟し異常の活況を呈して居るが、氏の若きが故に外侮を禦ぐ眞劍さと意志剛健實行の勇のそれ等は特に、世の青年弱子の須らく一喫すべき事ではある。

## 品質本位の左海醬油釀造場

## 山ヱ印醬油と木下ヨセ氏

小豆島苗羽の醬油村に安政四年創業の歴史と信用を誇るは左海鹿藏氏の醬油業である。その山ヱ印醬油は阪神地方に盛名を博し芳味を謳はれてゐる目下釀造する數千石は長子廣象氏によつて生産より販賣の一切を統理しつゝあるが、坂出商業の出身溫厚の氏は不況の今日を可及的消極方針に依り經營し得意を嚴撰時節柄つとめて滯貨をさけるの商策をとりつゝある、然も大阪十軒、神戸十軒の堅實なる取引先は永年持續して今日の盛況を釀し特にその釀造醬油の品質優良はかつて内地は素より海外等屢々出陳して優賞を受領せるに徴して明かである。

## 阪下助三氏

小豆島醬油の本據苗羽に於ける錚々たる釀造家として木下ヨセ氏の山ヱ印醬油近代の發展は又素晴らしい。卽ち同店は明治初年の創業に係り店主ヨセ女は開業早々夫君晋治郎氏に死別し爾來華やかなるべき若き女性の身を敢て二夫に見へずの操守を持し泉下に誓つて夫業の經營に一意して遂に今日事業村苗羽の有力釀造家として進展を遂げたのである。

この間斯界の競爭場裡に同女の苦心經營は時に自ら多數倉人に伍して釀造に從ふあれば、又阪神中國方面の取引先と商談し常に男優りの女性として驚異痛快を極めたものである。斯くて孤闘孤獨の約四十年を世にも稀なる女事業家として一般女性の龜鑑とすべき實績を收めた。

目下營業は養子治氏に委して同女は成功の餘齡を靜かに過ごして居るが、治氏又大川郡富田出身夙にその性行は青年の模範としてヨセ女の信認信頼厚く且實地の經驗は現に釀造する醬油數千石を然も生産から販賣の一切に就て處理經營し内外共に聲價益々高くこの現況は蓋しヨセ氏過去の苦心努力の上に更に錦上華を添ふ點景と謂ふべきであらう。

小豆郡苗羽村馬木に於ける醬油釀造業阪下助三氏はその創業を先代仁平氏に發し氏が明治初年微々たる副業的釀造を擴張して本然の事業化し以來幾多の苦心を以て相當の資財と基礎を築いた。然るに明治四十年頃知己に對する友情が禍して想はざる損害を蒙り、殆ど無資無財の苦境に轉落した。この厄災に際會して仁平氏は悲壯にも再起を誓つた。その刻苦に

世の同情と天運は漸く家勢の恢復を萌したのである。

助三氏は幼にしてこの不運悲境を目のあたりして父と共に先の信用奪回に精進すれば父の歿後業況の躍進と共に世の信望を博し且事業の傍ら青年會長、消防組部長に推された。

その事業經營にも堅實方針を墨守し特に創業以來只一店の取引關係を有するのみにして、しかも千餘石を絶對安全に相互關係も厚く邁進しつゝある。尚氏は目下同村議員を勤め各種事業にも關係し尚趣味淨瑠璃には斯界の若手花形にして「車」の名は關西に轟いて居る。

# 黑島岩吉氏の釀造業

小豆島苗羽村島岩吉氏經營の醬油釀造場は明治二十九年の創業にして先代岩吉氏少壮を以て獨立開業、爾來開拓發展を一意して今日の大を成した先代死亡後現岩吉氏が繼承し更に一層品質の改良向上を計り目下數千石を釀造阪神方面に於ては異常の聲價を博してゐる。

# 上藤由太郎釀造場

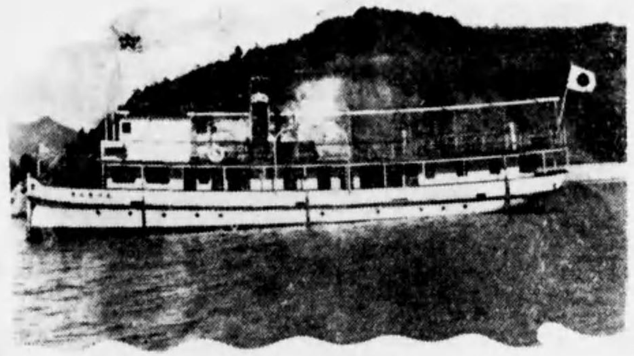
島醬油の本場苗羽村古江上藤由太郎氏の釀造するウヘフジ醬油の名聲こそ又床しい氏の醬油は明治五年先代の創業にして目下地の有力釀造家として數千石を釀造し阪神方面に販路を求め令息公平氏主として經營の衝に當りつゝあるが、公平氏は高中出身の新進事業家であつて、父業を執るに着實殊に斯業の將來に就ては多大の關心を持ち品質の向上改善等常に目視して怠らざる眞劍さと稀な熱心を以つて經營に當つて居る。

# 内海汽船株式會社

凡そ世の文化と共に人間の活動は愈よ緻密な尺度を示し殆ど惻殺されんの頃瑣にしてこの赴く所測るべからざるものを感ず。これ文明の窮極を識らざる所以とするが、爰に世の活人は其對照療法として各種の慰安が講ぜられつゝある、就中

自慰療法の最適として大自然に親む事を可とし殊に清新の氣滿々たる白砂青松山海の壯雅を蒐めた自然の風景を心身に浴して平日の勞を慰すると謂ふに歸して居るが恐らく自慰休安の方便としては右にしくはないであらう。

この意味に於て我香川縣を中心とする山姿海洋美の眺景は正しく天與の地として完備して居る故なる哉世界に誇る海上國立公園は本縣を中心の瀬戸内海と決定した譯である其圖内にあつて近時世人の認識を新にせる小豆島は寒霞溪をはじめ幾多の妙勝を收め且森嚴極りなき靈感を含せ萬化清淨の地である



として居る。

これかあらぬか近時この地杖にを曳く者漸く多きを加へるは正に無言の證左と謂ふべきにして、斯ては此小豆島に於て專ら島の東部内海方面の遊覽交通の便を掌り活躍せる内海汽船株式會社の使命又重しと云はなければならない。

同社はかつて島の風光と産業を通觀して大正九年創立し爾來高松小豆島間の遊覽華客と貨物の運輸に任じ活躍しつゝあるが現在資本金二十萬圓にして汽船かんかけ丸、瑞保丸の二雙を運航し一日三往復を以て創業以來極めて好績を擧げつゝ尙近時縣外遊覽客の誘引に努め殊に阪神並に岡山、廣島、愛媛等各地方人士の團體遊覽をすゝめ弘く地の紹介と共に彼等の天眞の氣を滿喫せしめ、好評を博して居るが、社の常務は支配人上藤雄一郎氏これを統べ氏は時代の活動家にして東奔西走眞に寧日なく社業發展に精進しつゝあるが、其將來は期待されて居る。因に同社重役は左の通りである。

社長　水野邦次郎
取締役　木下仙次郎
同　川野正善
同　上藤伊太郎



取締役　上藤由太郎
同　鹽田龜吉
同　川汐正美
同　森與之吉

監査役　三好好三
同　岡田幸藏
同　高橋永造
同　竹内愿三

# 小豆島自動車株式會社

今や讃岐を中心とする天下の勝景は海陸兩樣の自然美に於て國立海上公園が建銘されたが、茲に其重要機構をなす小豆島神懸山の絶勝は之を四望し大自然風光の極致にして近時認識も新に登攀探勝の客愈々多きを加へつゝあるは蓋當然である。殊に春季島の靈場を訪づる十餘萬の巡禮客は他に求め得さる點景であつて此聖地に此風光明媚あり然も同島を巡る近代文化の發達は正に驚異的事實にして、就中今日同島交通文化を代表し同島五萬の大衆は勿論巡禮探勝其他年中の外來客一般に多大な便益を齎しつゝあるは卽ち小豆島自動車株式會社である。

茲に歐洲大戰を機に島の事業界殊に之を代表する東部内海一帶の醬油醸造業は實に素晴らしき活況を呈した此時代的展開を眺めた島の有志等は爰に陸上交通機關の必要を痛感し現社長八木啓次氏は卒先之が實行に移し水野邦次郎氏に謀り協議の結果資本金十萬圓の小豆島自動車株式會社を組織すべく決定後、同島各村有力者は期せずしてこれに共鳴し、殆んど全島的期待の下に同社は創立された時は昭和三年であつた

かくて當時個人事業として土庄坂手間運轉の坂手村武井自動車部を買收以來土庄大鐸線、土庄三部線。草壁福田線、下村神懸線の島内横縱斷の諸幹線を經營し、近くは土庄町昭和自動車株式會社をも併合し土庄大部、土庄四海、土庄西浦線等全島道路のある處島バスの致らざる處なきの所謂全島バス

經營の總てを集握猶貸貸車として坂手、草壁、池田、土庄の各所に營業所を設置し車輛は勿論一切の陣容を整へ且郵便物運送の重任を擔つて奉仕犧牲的經營を續け、殊に社長八木氏は島の有力者として自他共に許し其人格手腕はかつて縣會議員として又多年池田町長として定評あり。同社の今日は實に氏の經營の妙に由る所であるが。一方實務を擔當する常務堀本文次氏又技術に長じ獨特の手腕家にして之と兩々相俟つて創業以來目標とする共存共營を使命に今日の發展を來して居る、更に其の內容に於てはこの種業界にあつて稀に見る所にして縣下に最たり。特に車輛の償却整備と客に對する親切は同社の信條にして常に大衆交通經濟に立脚し運轉回數を增加しより安い賃金により多數乘客の利用を目論み、其使命遂行上忠實に一般乘客をして彌が上にも近代文化の幸惠を喫せしめつゝあるは同社の現在及將來を通じて島の潑剌たる全貌と共に風光の地の生命を擔ふものであらう。因に現在同社の重役は左の通りである。

社　長　八木啓次
常務取締役　堀本文次
取締役　水野邦次郎
同　鹽田亀吉
同　高尾藤太郎
同　關　貫一
監査役　千葉嗟吉
同　太田喜十郎
同　川野助太郎

# 小豆島坂手の雄川野合資會社

小豆島「坂手」此處は島の東南部尖端に位置し海を隔てゝ相對する東讃岐、鳴戸の南風は地に絶へず濤波を送つて居る又東旭光を仰げば蒼々として水天髣髴播磨灘の魔境に面しやをら靜中に動を孕む然かも天然を讃へた良港は瀬戸內海交通



の便と共に實に勇壯の地である。

この地も當然島醬油王國のグループにあり。合資會社川野醬油釀造場こそ坂手の代表的豪商にして內海醬油界の錚々でもある合資會社川野醬油店は昭和二年資本金十五萬圓を以て川野助太郎、同正善の兩氏兄弟の組織經營にかゝるが、これより先明治廿一年祖業海運に從事の助太郎氏は時しも小豆島醬油の聲揚に斯業の前途を卜し爰に醬油釀造を創始した。

素より當時氏の釀造は僅に五百石程度で爾來弟正善氏と共に協力精進し年次增釀の盛況を見るに至つた。殊に歐洲大戰前後兩氏の活躍は海運醬油の兩面に實に目覺しく、卽ち川野兩氏にとつての黃金時代であつた、爰に實質を固めた氏は昭和二年現在組織に改組し專ら正善氏は醬油釀造販賣の實務を擔當し。この上助太郎氏は海運、醬油の兩部を統轄の分區にいよ／＼實績を收めたのである。

爰に特筆すべきは正善氏の醬油經營方針である。氏は得意先に對しては常に共同の戰士を觀念し密なる事骨肉の如く互に共存を誓つて邁進すれば、問屋側又川野釀造場を指して自己の倉元なりと稱す。この圓滿なる取引關係は信用信賴を交せて互に永遠を期すのである、この商則の下に廿年前千石釀造の時より一萬石釀造の今日まで其取引問屋は僅かに十軒を數ふのみ。然も增石の都度これを問屋側に通告し販賣擴張の分擔を求めて決行せる等條理ある方針に事業の進展は勿論如何なる場合にも不測の損害を蒙る如き、又問屋の爭奪等夢想だにせざる誠實安穩の取引が樹立されて居る。

更に氏自身は健康第一主義に依り萬年青年を自任し事業家の欠くべからざる要素は卽ち頑健と活動にありとして、之を實行する。そして氏は凝り往く肩のこぶを誇りとしそれが一切の勞務を體驗するのみならず信仰に篤して不斷從業員に精神修養及思想善導を以て眞に內外共に和氣藹々理想的經營の

實を擧げつゝあるが、これ期せずして現實の繁榮を招來する所以ではあらう。

尙一方助太郎氏の主掌する海運業は明治四十二年大阪商船尼ヶ崎の貨客取扱ひを開始以來地方の發展と共に乘降客激增し最近一ヶ年五萬人を數ふる盛況にして、さきに宏大な待合事務所を建設整備し、目下醬油釀造部の增設工事の途半にあるが、今や川野氏の釀造と海運の兩事業は風致坂手の港頭に嚴としてそびへ一異彩光をうたはれて居る。

# 我國醬油界の覇者丸金醬油株式會社

近時香川縣の名に於て天下に誇る小豆島醬油は我國醬油界の分野關西、關東の二大勢力の一を形成してゐる。而して島醬油の新鋭燃ゆる意氣は逐日新天地を開拓して異常の發展を畫しつゝあるは正に天下業界の一大壯觀にして同時に本縣產業の異彩である。

由來小豆島は靈地として高僧弘法大師久遠の遺德が偲ばれ且島を繞る幾多の奇勝絕景と共に夙に世を超俗的寫剛氣に人生修養の道場たる感を深ふせる所である。

故に每年春秋には全國より來遊する者實に十餘萬を算するは以て此間の消息を語るものである。然して一方同島に於ける產業に就ては本來物資に惠まれず、僅に石材素麵醬油を數ふるのみ、その中獨り醬油釀造業のみは近時驚くべき展開を示し勢ひの赴く所幾可級數的累進は現に全郡の生產高一ヶ年三十餘萬石、一千萬圓內外を計上し、關西斯界の王座に君臨し常に積極的攻勢は天下斯界の視聽と興味を蒐めて居る。就中丸金醬油株式會社並に同社長木下忠次郎氏は之が島醬油界を代表する事業並に騎士として、不斷勇壯なる行進を續けて居るがそも〳〵小豆島醬油の關西に於ける地盤は、さきに德川時代に開拓された、即ち島天領の頃安田村高橋文右衞門釀造の醬油を始めて浪速に搬入すべく同地川口に至るや、番舟役之れを拒みて許さず茲に是非もなければ松葉舟にやつして搬入する等古智と辛苦を傾け、漸くこゝを通じ始めて醬油を味

あはした。而してこゝにその眞價を知るや以來阪神の地は小豆島醬油を以て傳統的拔くべからざる勢力を扶殖されたのであつて、之れ現時關西に於ける小豆島醬油就中丸金醬油の壓倒的勢力と地盤を有する所以である。

こゝに丸金醬油株式會社は明治四十年九月現社長木下氏を中心に日淸、日露の二大戰役後國勢伸張と共に奔流の如き急潮に掉し島醬油の躍進を期して創立された。當時資本金三十萬圓の同社は木下社長、瀧川專務以下各員一致團結し業務に携はり名も床しき丸金のマークを飾し大阪を中心に全關西に目醒ましき飛躍を續けた。以來時代の進步と共に品質の改良取引の改善を銳意し遂に努力は酬ひられ成績大いに見るべきあり。かくて大正九年同社は商勢の殷振と共に增資を斷行した。即ち資本金百二十五萬圓として大量生產工場設備を整へ特に釀造施設に就ては近代化學の粹衞生等各般に留意して愈々名實共に關西一の模範的釀造場たらしめたのである。

この如くして天惠の水質、氣候適宜加ふるに同社の研究獨得の釀造菌に由る丸金醬油は斷然他品の追隨を許さざる風味を以つて普く聲價を博し、大衆的信用と繁榮をかち得全く旭日昇天の進展を示した。ついで昭和五年同社は、時運を明察し長驅して關東進出を決意し、東京を本據に商戰を布陣して

大いに活躍して居るのである。

今や本縣の代表的商品丸金醬油は全國斯界の覇兒として津々浦々は勿論日の御旗掲ぐる世界の全面に勇ましき行進をなしつゝあるが、是國境なき優秀商品の威力に外ならない。同社にして此商品あり。かつて高貴の宮殿下の來臨を辱ふせし名譽をも擔ふが社長木下氏は人もしる島當代の事業家にして自ら祖業山玉印醬油を醸造しつゝ丸金十餘萬石醸造の大會社を引具し實踐躬行の範を垂れ且時流を達觀して島醬油界今日の大勞馴致に偉大なる貢獻者たるは勿論、瀧川同社專務も創立以來木下氏と共に寢食を外に善處經營に當り社礎建立の功又沒すべからざるは周知のこと、又醸造部長清水十二郎氏はかつて本縣醬油醸造試驗場長として二十數年來研究に沒頭し斯界の逸材にして、島醬油王國建設に偉大なる主導をなせるは言をまたない。現に同社の職制中社長の外瀧川氏は總務販賣の兩部を統べ清水氏醸造部を黒島氏は工作部を各々擔任し尚販賣の一切を統轄する大阪支店には新進氣鋭の藤田、濱松諸氏これに當り同社に就業する約七百名は一絲みだれぬ整調を以て一途に其使命遂行に懸命の努力を傾倒し、東京に於いては權威ある問屋六十餘名を以て丸金會が組織され又大阪にあつても同じく縣人會中心に丸金後援を主唱し、更に婦人團體其他各種の團體的援助は何れも同社生産丸金醬油品質優良と誠實なる營業方針の歸する所にして、然も營業内容に至つては創立以來一回の利益配當もなさず。利益は擧げて之を償却積立に充當し、決算面に表示せる財産評價中計上する土地建物の如き坪當り時價の五十分の一にも當らざる如き同社幹部の周到なる用意とは云へ堅實以外の信念に基く特殊の經營にして故に目下の總資産は優に五百萬圓を下らずとする衆評も爰に基因するが、斯して始めて同社の基礎は永遠であり年々歳々異常の發展躍進を遂げつゝある所以にして、この丸金醬油株式會社並に社長木下氏の存在は實に偉大なる島の生氣と輝く意氣信念に基く新興産業の偉力を世人に示しつゝあるものにして、今し世相の陰慘に拘はらずひとり島醬油王國の一帶には失業の憂み若くば不況を嘴ぐなきこそ洵に注目し祝福すべき現象ではあらう。尚同社幹部は左の通りである。

社長取締役　木下忠次郎　取締役　長西長次郎
專務取締役　瀧川辰太郎　同　木下仙次郎
常務取締役　清水十二郎　監査役　高橋筆四郎
常務取締役　黒島仁太郎　同　鹽田龜吉
取締役　中井房太郎　同　小汐彌太郎
同　黒島傳次郎



# 香川縣有力産業組合と業績

## 香川縣信用購買販賣利用組合聯合會

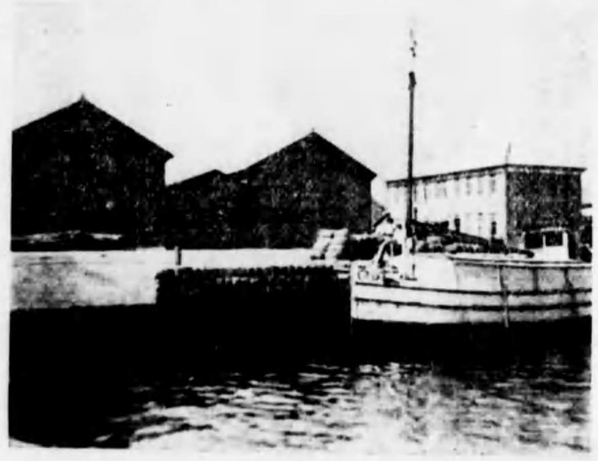
香川縣信用購買販賣利用組合聯合會は大正三年二月二十六日の創立である。高松市北濱町に事務所を置いて事業を開始して以來飛躍を重ねて今や縣下に於ける産業組合法に依る全組合の加入を見て遂年その實蹟を擧げてゐる抑々本縣に於ける産業組合は明治三十五年の設立を始めとして聯合會創立直前の大正二年末までには百三十二組合に達し、概ね順調なる發達を遂げつゝも地方的狀況により資金の缺乏或は過剩を患ふるもの多く、この必然的現象に對してこれが調節を行はれんを欲するも何等連絡機關なく資金運用上不便不利を感ずることは少くなかつた。

此處に於て縣下一圓を區域とする産業組合聯合會の創設を企圖して香川郡香西信用組合長神邊晟太氏等八名並に縣下十六組合長は自ら發起となり勸誘に努めこの結果加入組合は二十五に達せば直ちに聯合會を組織し神邊晟太氏を會長に選任して信用單營の下に事務所を高松市内町十九番地縣農會内に置き、設立許可と同時に事業を開始した、以來躍進を續け同八年五月には購買事業を兼營し更に同九年事務所を市内北濱材木町に移轉し其事業狀態も遂年盛況を見るに至つた。

又加入組合も激增し同十年十月の臨時總會に於ては販賣並に利用部の兼營をも爲すことゝなつた。かくて昭和三年七月現在の事務所たる北濱町六十五番地に新築移轉今日に及んでゐるが、大正八年聯合會の企劃者にして功勞者神邊氏の急逝後後任として岡佳吉氏は會長に就任以來組合の業績更に發展して最近の所屬組合及同聯合會は壹百九拾五の多きに達し拂込濟出資金拾四萬八千圓を示して居る。

しかも聯合會自体の積立金壹萬貳千餘圓、貯金四百拾參萬

貳千餘圓、貸付金百萬五千餘圓、購買品賣却高百參拾七萬九千百五拾七圓、販賣品取扱高百四拾壹萬六千百六拾七圓等何れも巨額を計示して居るのである。又他面聯合會農業倉庫の建築殆ど成り既に丸龜市に支所を有する外坂出町にも新築成らんとしてゐるが更らに進んで縣下樞要地に續々支所又は配給所並に聯合農業倉庫の設置を見んとするの勢にして正に同聯合會は時代の示す進路に滿帆の躍進を續けて居る。尙岡會長は全聯にも有力



なる關係を有し活躍して居るが他の各理事とも縣下產業組合の錚々たる偉材にして、これ同會に添へられた威容である。因みに現在の役員諸氏は左の通り。

會長理事（牟禮村）　岡　佳吉
理事（長尾町）　間島南海士
同（草壁町）　菅　豊三郎
同（香西町）　泉川亮平
同（坂出町）　中西孫太郎
同（善通寺町）　遠山源治
同（和田村）　田中甚造
同（高松市）　加藤勘學
同（丸龜市）　藤田政男
監事（相生村）　長町房榮
同（庵治村）　中繁治
同（池田町）　木村勝治郎
同（佛生山町）　中條陸郎
同（林田村）　福家善助
同（高篠村）　岸村森太郎
同（吉津村）　福岡一郎
同（高松市）　中村新太郎
同（金倉寺）　秋山正一

（寫眞は岡會長と組合事務所並倉庫）



# 高松信用組合

全國的に異數の業績を以て誇る高松信用組合は大正十年九月七日の創立である。當時は恰も歐洲戰亂の果來せし財界好況の末期に際會して市内の中小產者は何れも資金難に苦しみながら他面或者は奢侈荒怠に流れ勤儉の美風漸く地を拂はんとするその頃である、時の縣商工課長大野綠一郎氏は市街地信用組合の必要を高松市の有力者中村新太郎、細溪宗次郎、牧伴五郎等の諸氏に力說する所があつた。有志もこれ時代の示唆なりとて大いに共鳴し發起人となり直ちに創立準備に着手した。

その第一歩として牧氏等は他山の石とすべく要地信用組合を歷訪して具さに研究視察したが、當時郡部に於ける信用組合は未だ草昧時代にあり業績見るべきものなく從つて至る所その經營至難を說き聞かされ、況んや市街地信用組合の創設計畫の如き思はざるの甚しきものとして笑殺を受くるのみであつた。

しかし同氏等は飽まで初志を貫徹すべく只事業の成否は一つに其の人にありとし勿論一途に努力精進し一方當局の大野氏は陰陽あらゆる便宜と援助を組合成立に與へられ、遂に大正十年七月市内讃岐農工銀行内に創立事務所を設置し設立趣旨の宣傳と加入勸誘にかゝつたのである。この結果千六百餘名の加入申込者を獲得し、同年九月二日組合設立許可を申請して同月七日許可を得て同時に事務所を鍛冶屋町に移しいよ〳〵十一月七日一般事務取扱を開始するの運びに至つた。

爾來牧氏を始め各役員は學校の父兄會其他悉ゆる公開の席を利用して組合の趣旨徹底と理解に努めた。かくてこの努力に組合は日を逐ふて活況を呈し、殊に割增附月掛積金は最も有効な貯蓄方法で思はざる大衆的支持を博し組合は年々歲々

異常な躍進の數字を示した。斯の如くして創立以來數年にして其事務所は狹隘を告げ遂に昭和二年三月現在の場所に縣下組合隨一の輪奐の美を誇つた事務所を新築移轉するの盛況を迎つた。此の間大正十二年には市内西通町、栗林町及び築地町に大正十三年には鶴屋町に各貯金取扱所を設けて遠隔の組合員の利便を計る等内外營業の機構は遺憾なく整備された。

然して其創立當時に於ける組合員と云へば千九百八十一人出資金參拾壹萬八千七百四拾圓、貯金六萬八千八百九拾六圓貸付金拾五萬五千四百五拾五圓にして、次で事務所の新築を了せる昭和二年末には組合員四千五百二十四人。出資金六拾八萬四千百六拾圓貯金五百七萬七百九拾四圓、貸付金貳百拾五萬四千貳百貳拾五圓といふ尨大なるこれこそ眞に幾何級數を越へた昇騰振りを示したのである。

この事業成績は恐らく全國に冠たる所であつて、設立當初の組合長中村新太郎氏は大正十二年二月に辭任し爾來中村薫氏これに代り、專務理事牧伴五郎氏は創立以來組合成育に當り組合の發展と共に面目を諏はれて居る。斯くて昭和七年末に於ては組合員數四千二百八十二人、出資口數三萬四千五百十二口、貯金六百八拾五萬壹千九百參拾四圓、貸付金貳百四拾五萬九百五拾貳圓の躍進を示し、同年中の貸付件數は六千九百九十七件、主として商工農水産業資金、不動産購入資金、舊債償還、家事經濟その他に及び就中商業資金百四拾七萬七千七百參拾參圓がその首位を占めてゐる。

殊に同組合の誇る毎月壹圓宛の掛込み七ケ年滿期百圓拂戻契約の萬歳月掛貯金の如き滿期拂戻の際には百圓につき壹圓の奬勵金を交付するの特典を附し主力を此處に傾注したので零細の貯金も今や積つて百萬圓を突破するの盛況を示してゐる。而てこの蒐集された有機資金中餘裕金は擧げて安全第一主義による公社債を購入して絶休に平常の賣買を禁じて居る又毎期利益の一部を割いて社會事業基金を積立て有益なる社會事業には惜みなく支援して公共的義務をつくす等この堅實にして異色の營業方針の下に異常の發展あり。更に幹部の信用を科した同組合が今や全國屈指の信用組合として日に月に進展する事は寧ろ當然である。尙現在組合幹部は左の諸氏である。

組合長理事　中村　薫
專務理事　牧伴五郎
理事　細溪宗次郎
同　中村新太郎

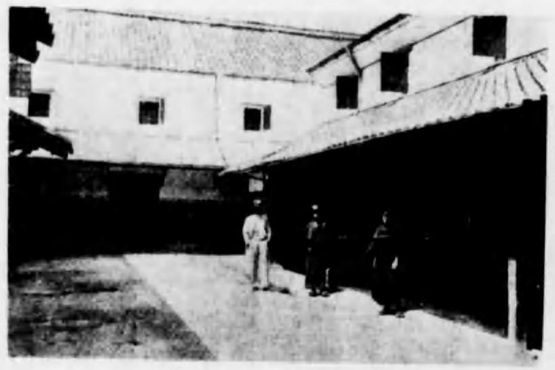


同　逸見常太郎
同　西本政太郎
同　吉本傳太
同　鈴木幾次郎
同　入谷哲平
監事　鹽田伊三郎
同　鎌田長八郎
同　鹽田良一

（寫眞右、中村薫氏左、牧伴五郎氏）

## 高松倉庫と其の業績

本縣四大倉庫として政府の指定たる販賣購買利用組合高松倉庫は昭和三年六月二十五日の創立である。さきに穀物集散の中心をなす高松に於てその保管上農業倉庫を必要とし高松米穀界の巨商灘波氏を中心に大正七年社團法人高松農業倉庫は設立された。これ高松倉庫の前身である。爾來農業倉庫として經營を積けてゐたが後産業組合法によるに若かざるを知り組織を變更し事務所を高松市東浜町に置き、高松市及び香川郡鶯田太田多肥一宮の四ケ村を區域として事業を開始したが、寄托は陸續として到來現在は高松市香川郡、木田郡、綾歌郡の人々にも多く利用されその最新式を誇る倉庫には專ら販賣並びに保管を中心に活躍眼覺ましきものがある。



殊に共同販賣の如きは阪神を控へて極めて便利に取運ばれ道が灘波氏中心の實勢を示し且政府指定倉庫の面目を輝して居る。最近の出資口數は二百五十口出資金壹萬貳千五百圓諸積立金壹萬五千圓、收容力八棟建坪四百七十六坪、五萬三百二十俵、入庫數玄米七萬九千四百五十九俵、小麥一萬六千三十六俵、裸麥六千五百三十七俵、保管料七千六百七拾九圓にして

倉庫の現役員は左の諸氏である。

組合長理事　灘波清平
理事　織田又市
同　中村新一郎
同　中村熊
同　濱垣規矩太
監事　灘波恒三郎
同　牧伴五郎

## 東讃鹽業信用購買組合

本縣東部鹽業地域に於て共同機關たる東讃鹽業信用購買組合は大正八年ごろ歐洲戰亂の影響を受けて物價騰貴し製鹽業者は之に對應する賠償金の引上卽妙も至難とし、此處に於て業者は鹽業用石炭鹽叺その他の共同購入をなし、合理的斯業の運營を企圖して高松市、香川、木田兩郡を區域とし大正八年十一月二十二日組合事務所を高松市福岡町に置いて創立したものである。

爾來鹽叺、石炭等の賣却代金は賠償金中より控除する方法に依つたがこの外、更に組合の利用を期しては各自に當座貯金をなさしめるの便法をも設け極力貯金の蒐集に努めると共に鹽田購入資金其の他其製鹽事業に必要なる資金を貸付けて組合員の利便を圖り、逐年業績をあげてゐる、今や組合員數百二十名を數へ、出資口數八百九十口、出資金四萬四千五百圓、諸積立金貳萬四千參百七拾貳圓、貸付金拾五萬壹千九百參拾五圓、貯金參拾五萬四百三十七圓、購買品賣却高貳拾九萬九千貳百八拾六圓に達するの盛況にして、殊に組合長加藤勘學氏は本縣斯界の巨頭にして組合創設以來の努力貢獻は著大である。又西村專務理事はかつて雌雄島信用組合創設經營せし事ありその經營手腕は斯界に定評を有するが其他各關係者は何れも東讃鹽業界の有力者を網羅して居る。尙現組合幹部は左の如くである。

組合長　加藤勘學
專務理事　西村鼎三
理事　大野英一
同　大林時次郎



理事　石田嘉市
同　岩佐熊次
同　中川榮
同　福西茂
同　尾崎德一
同　柏原義行
同　中村嘉太郎
同　德田德次
同　間島一治
同　上野二三郎
同　宮宇地貞一
同　木村仁平
同　佐々木直市
同　池畑政吉
同　大高恒次
同　木村市次
同　杉山榮太郎
同　磯淵國太郎
監事　淺田小三郎
同　柏原梶太郎

## 木田郡

## 牟禮村信用販賣利用購買組合

木田郡牟禮村信用購買販賣利用組合は明治四十三年五月十三日の創立であつて、現組合長岡佳吉氏は周知の本縣產業組合聯合會長で氏は夙に村民の經濟並に產業助長に本意しかつて金融機關の皆無を卿ち明治四十二年五月同村に報德社なるものを組織し、社員の貯金を取扱ひ且低利の貸付けをなして率先金融の途を開鑿した。

其後時代の推移に因つて產業組合法に組織を變更するまで同社は村に有用な機關として利用された同四十三年五月十三日いよ〳〵前記組織に由つて百八十四名の組合員と五百五十口の出資口數の無限責任牟禮信用組合を設立するや岡氏は組合長に推され事務所も其宅に置いて事業を開始した次いで大正元年十月九日更に組織を有限責任に變更し同四年十一月十二日より購買販賣及び利用部を兼營し事業の擴張を圖り。な

ほ大正七年には村民要望の下に農業倉庫經營の認可を得て翌月七日より事業を開始するに至つた、之業務の發展に伴ひ地理的關係より出張所を三ヶ所に設置して組合員の便益と事業の合理化を期し、逐年躍進を以つて今日の盛況を招來してゐる。

最近の組合員はその數一千二百三十二名、出資金貳萬七百五拾圓、拂込濟出資金貳萬五百八拾圓、準備金貳萬九百拾七圓、特別積立金七千貳百五拾四圓、借入金七萬圓貸付金貳拾四萬九千貳百四拾圓、貯金八拾萬五千九百圓、購買品賣却高四萬八千貳拾五圓と其鮮な數字はこれ何を語るか即ち組合幹部に此先覺的偉材あり、而て自治産業はこれに就く本縣産業組合中の優良組合たるもこの誇るべき業績に因るのである。

現在同組合の役員は左の諸氏である。

組合長　岡　佳吉
理事　岡坂謙三
同　井上芳雄
同　井上正一
同　小西一夫
同　高木大吉
同　鶴身藤太
理事　山田楳太郎
同　三好林太
同　久保計一
監事　岡照彦
同　岡坂政五郎
同　田中茂市
同　三好清信
同　田中八藏
同　井上泰三
顧問　矢野章

## 庵治村信用購買販賣利用組合

木田郡庵治村は海に突起した半島地形なる爲に平地少なく耕地は僅か田百六十町歩畑七十五町歩を有するのみにしてその主要農産物も米四千石、裸麥一千四百石、小麥二千石餘を産するに過ぎないが、天然産物としては天下に冠絶せる庵治石また工産品として瓦の産額もあり、更に水産物も相當の産



額を示して居る。然るにこの農漁相半ばする同村内の金融は嘗て極めて不便不備にして只中産階級以上の者は態々遠く高松に行つて貸借の用を辨じて居た。從つて多くの村民は各種頼母子講を以て一定期單一の金融方便あるのみにしてこの狀態の下に村民大衆は常に本格的金融機關の設立を翹望して居たのである。かくて大正元年郡當局は村内有志に信用組合設立を勸奬する所あり。これを機として有志は相計り遂にその設立を見たがこれ現に活躍せる同村産業組合である。

當時組合員は五百三名にして有限責任庵治信用組合と稱し事務所を同村役場に置いて、大正二年二月二十五日初めて事務を開始した爾來順調なる業績を辿つて村内金融は圓滿に而して事業も漸次擴張し購買販賣利用部及農業倉庫部を追加設置して大正十一年現在の場所に事務所を新築したのであるいま同組合の特徴を擧ぐれば、事務整理の嚴重正確なる事と毎年春秋二回購買部協議會を開催し購買部事業經營上に關する打合はせをなし、又毎月第二木曜日を定日として組合常務員の事務研究會を開催して組合事務の刷新を計り、組合員の爲め必要と認むる産業設備を調査し緊要なるもの若しくは容易に着手し得べきものより逐次設備利用せしめ、或は組合員訓育とか更に村内の出來事を一般に知らしめるためには組合時報を發行し、購買部は木材及漁具類の取扱をなし漁業者の利便を圖る等々その活躍は目覺しきものがある。

斯くして同組合の最近に於ける概況は組合員數千百七十五名、拂込濟出資金壹萬五千六百壹圓、剩餘金參千六百拾圓貯金五拾五萬四千八百貳圓、貸付金貳拾八萬八千五百五拾壹圓購買品賣却高七萬九千四百圓販賣高四萬五千參百貳拾五圓、農業倉庫入庫玄米二千三百九十六俵、小麥三千五百三十四俵裸麥八百十七俵等誇るべき業況は示現されて居る。

なほ同組合の尖端的歩みと好調を持續する事に於て大正七年二月十一日には木田郡長より、大正八年十二月二十三日に産業組合中央會香川縣支會より、大正十一年四月二十日産業組合中央會頭よりまた大正十三年五月二十日香川縣聯合會長より更に大正十五年三月六日中央會香川縣支會木田郡支部長より夫々表彰された程であつて、同組合の村勢に自助せるは推して知るべしである。因に現在の役員は左の諸氏である。

組合長　中繁治
理事　妙賀彌太郎
同　梶河佐次郎

理事　岡田苗一郎
同　佐藤富三
同　藤本利三郎
監事　安長作太郎
同　藤本岩吉
同　岡秀吉
同　木村条太郎

## 古高松村信用購買販賣利用組合

木田郡古高松村は戸數八百八十戸、四千七百名の農村であるが、村内には貯金の方法としてさきに郵便局が設置されて居た。しかし郵便局はあつても金は貸さない。從つて不時非常の場合にも儲けて拂ふ人には至極不便であつた。爰に於て信用組合の設立が急務を悟り且當局の産業組合創設勸奬もあり、村有志は相計つて各部落毎に其の趣旨を說明勸誘に努めたが、夙に金融機關に渴望せる村民の加入申込は時を待たずして五百九十名を數へた次で大正七年二月一日いよ〳〵前記加入者に由る一千二百八十口、此出資金を得て古高松村信用購買販賣利用組合を創設し、同年十二月六日事業を開始した

爾來無配當主義を採り剩餘金は全部準備金とし積立は出資と同額に達したる後始めて配當すると云ふ方針で組合の基礎確立に努力し貯金、集金の如きは毎月外勤者を派して組合員の利便を圖り、毎年春季一回組合員總會を開催して組合事業の現況並に方針を組合員に周知せしめ、或ひは講演會を開催して組合精神の普及徹底を期すの外組合員に對する貸付に就ても住宅及び建物並に自作農等の資金に對しては十ヶ年以内の貸付方法を構じて逐年業績をあげて居る、最近の業況として組合員數は七百六十九名、出資口數一千二百九十三口、貯金參拾六萬七千七百拾四圓、購買品賣却高參萬四千貳百貳拾八圓諸積立金九千五百五拾五圓、貸付金拾五萬五千貳百拾參圓を算しこれに對する剩餘金貳千貳百七圓と販賣高壹萬參千貳百四拾貳圓に達してゐる。

而してこの好成績に大正十三年五月二日香川縣聯合會より優良を表彰されたのを初め大正十五年三月六日香川縣支部木田郡支部長よりまた大正十五年五月二十九日中央會香川縣支會より屢々表彰されたが洵に誇るべきである。



因みに現役員は左記の諸氏である。

組合長理事　德田榮藏
理事　上枝英雄
同　松本淺次郎
同　中川太郎
同　久本儀太郎
同　植村清八
同　矢野善太郎
監事　谷野虎之助
同　稲田小四郎
同　松本忠三郎
同　伏見米次

## 川添村信用購買販賣組合

木田郡川添村信用購買販賣組合は明治四十五年四月三十日の創立にして當時の役員松井伊和太、梶原喜次郎、星野茂吉國宗長之、山地年八、佐野達太郎、宮武衡、新田恒次郎、中村和太郎、古市又八氏等の至大なる努力とこれが一般の理解ある支持に依つて組合創設を計畫するや間もなく一千十六口の加入口數を得て事業を開始した。爾來二十年間何等異狀なく文字通り順調なる進展を續けて來た。殊に組合長松井伊和太氏は多年縣會議員を勤めた有力者にして氏は特に組合員に對して自作農を奬勵し、その貸付金の如きも主として自作農の融資に貸出してゐる、この故に同村の一般自作農作者は一時は苦痛ありとするもこれを努力に依つて脱却する時は眞に農村生活の和樂を喫し得るのである、それかあらぬか目下同組合員は極めて裕福な狀態にあり、全村戸數五百三十六戸中七割までは自作農家なりとは蓋し羨望の的でもある、斯して組合が金融に當つても貸倒れ等の憂へは更になく組合の目的と使命は爰に於て完全に達成されりと稱すべきである。

この所組合幹部及び村有志の自治的貢獻にして特筆に値する所である。而して目下の組合員は四百七十二名、口數一千十六口この拂込金壹萬百六拾圓、貯金拾貳萬圓、貸付金拾壹萬圓積立金五千六百拾四圓、日用品賣上高貳萬五千圓、組合員の叺買入高八萬枚金額參千五百圓の活況を示して居る。

尙現在の役員は左の諸氏である。

組合長　松井伊和太

# 木太村信用購買販賣利用組合

木田郡木太村信用購買販賣利用組合は大正六年十月二十三日の創立にして當時溝淵荒太郎、上枝茂太郎、葛西茂八郎神内定市、山根東一、高尾槌藏等の諸氏は組合の必要を痛感して東奔西走し遂にその創立を見たのである。

本計畫に當つて村民はよく産業組合精神を理解し加入者も直ちに三百九十一名を數へ出資口數四百九十五口（一口十圓）

| | |
|---|---|
| 專務理事 | 宮武繁太郎 |
| 理事 | 稲井小三郎 |
| 同 | 森口惠太郎 |
| 同 | 新田喜平 |
| 同 | 國宗長之 |
| 同 | 高木虎市 |
| 監事 | 井上長次郎 |
| 同 | 前田澤市 |
| 同 | 南部清太郎 |

を得てまづ信用部單營の事業を開始した。爾來專ら內面的堅實なる經營方針を以て實力の充實に眞摯なる活動を續けた。故に逐年業運隆興し大正六年更に農業倉庫を新築して同年五月事業を開始し同九年購買部を新設更らに十年販賣利用部を兼營して今日に至つてゐるが、今や貸付金拾貳萬壹千八百五拾壹圓、貯金貳拾九萬七千四百九拾五圓、叺販賣高參千七拾八圓、準備金九千百拾壹圓、特別積立金壹千貳百貳拾圓の活況を呈し利用部では目下精米部を經營して一般組合員の便益を圖つてゐる。尙現在の役員は左の諸氏である。

| | |
|---|---|
| 組合長理事 | 眞鍋孝平 |
| 理事 | 小西助太郎 |
| 同 | 喜多碧 |
| 同 | 鈴木權市 |
| 同 | 石川清 |
| 同 | 森政七 |
| 監事 | 河合佐平 |
| 同 | 北原松次 |
| 同 | 大熊佐平次 |



# 林村信用購買販賣利用組合

木田郡林村信用購買販賣利用組合は明治四十五年四月十三日林村信用購買組合の名の下に創設したのである素より同村眞鍋米五郎氏等有志の奔走に由つたが最初の組合員は四百八十三名出資口數一千三十口（一口十圓）を以て同年九月十二日信用及び購買事業を開始したのである。

當時は事務所も同村々役場の一隅に置き、眞鍋米五郎氏は組合長に就任した。爾來同氏の獻身的努力は着々業績に顯れて逐年躍進を示した、次で大正八年一月には出資口數一千八十口に增加し同十年五月二十四日販賣利用兩部を新設して名稱も林村信用購買販賣利用組合と改め、更に同十二年五月三日には事務所を現在の林村大字下林に移轉し、同十三年一月に於ては出資口數更らに增加して一千百二口を數へた。

また昭和二年一月より農業倉庫の經營を創始したが、その現況に於ても組合員數五百五十七名、出資口數一千百二口、出資金壹萬壹千貳拾圓、準備金壹萬六千六百拾四圓、特別積立金八千四百貳拾貳圓、貯金貳拾八萬九千八百五拾參圓、貸付金拾六萬五千八百四拾九圓、購買部賣掛高貳萬九千九百七拾五圓、販賣部叺九千貳百五拾五圓、鷄卵貳千九百九拾六圓米壹萬四百五圓を示してゐる。

同村は從來村長矢野六三郎氏等の奬勵により鹽叺の製造盛況にしてその年産額貳萬數千圓にも達してゐるが、最近には肥料叺の製造も奬勵し、その加工機は同組合に於て斡旋して副業收入の途を得せしめて居る。一方これが蓄積の方法として鷄貯金を行ひこれは各組合員の自宅に於て養鷄をなし、其の卵は組合に於て共同販賣にかけ之が收入より養鷄飼料購入代金と差引いた剩餘金を全部貯金するのであるが、これを卵蓄と稱して好成績を擧げてゐる。

斯くの如く同組合をして今日の盛況あらしめたのは前組合長眞鍋米五郎氏にして、その創立以來十餘年の功勞に負う所大なるは言を俟たない。

現組合長矢野六三郎氏も同村々長として眞鍋氏と共に組合創設の初期より直接間接に貢獻し組合員の敬慕を集めてゐる因みに現役員は左の諸氏である。

| | |
|---|---|
| 組合長理事 | 矢野六三郎 |
| 理事 | 眞鍋米五郎 |
| 同 | 岡繁次 |

理事　宮井千太郎
同　眞鍋龜太郎
同　河野通胤
同　中川才市
同　久保辰次
同　高松佐一郎
同　熊野吉次
監事　高原兼藏
同　河野覺太郎
同　岡庄三郎
同　眞鍋周幸

## 前田村信用販賣購買利用組合

木田郡前田村信用販賣購買利用組合は明治四十一年十月三日同村山口熊吉、小竹助次、香西近次郎、香西芳太郎、山田惠一、藤澤文次郎等の諸氏發起となり同村唯一の金融機關として創設を見たが、同氏等の勸說の結果一口十圓を以て六百七十口の出資口數を整へ同村々役場に於て事業を開始した。爾來逐年業績を擧げ大正四年には既に出資金全額拂込濟となり、大正八年には一口十四圓に相當する組合資金の累增を見るに至つたのである。

而して更らに新口數を募集し總口數一千六百五十六口に達したが、大正九年財界の變動に際して殆ど全滅の悲境に瀕するや果然多數組合員からは一齊に奮起の聲を浴びるに至れば此處に於て一口の出資金を五圓に減資し漸く難關を切拔け現在に到達した、今や組合員五百五十七人、出資口數一千六百五十六口、貸付金九萬參千圓、貯金拾貳萬五千圓、積立金四千貳百圓、肥料其他共同購入六千圓の現況を示してゐる更に同組合では昭和八年度の新計畫として五千圓を投じて農業倉庫一棟を新築の準備を整へて居るが全組合員は前途を期して協力邁進して居る。因みに現在の役員は左記の諸氏である。

組合長　香西憲吉
理事　黑川喜太郎
同　藤澤鹿太郎
同　香西俊之
同　岩部藤太郎
同　香西近次郎



理事　國方淺吉
同　出口善平
監事　小竹助次
同　山田賢三
同　出石利三郎

## 十河村信用販賣購買利用組合

木田郡十河村は夙に村治の圓轉と自治の發達を期して卒先各種機關を整へ特に產業組合の興隆と經濟方面の統制には意を須ひたその第一歩として、大正七年四月十河村々民座右十綱目を制定して村民日常の規矩準繩となし民心の作興に資した。次いで既設貳池信用組合の區域が全村に及ばざるの不便を遺憾とし同村一圓を區域とする產業組合の設立を期して村の有志稻井唯一氏等二十名は發起となり大正九年五月五日十河村產業組合を設立事務所を同村々役場の一隅に於て事業を開始した。此れ現在の十河村信用購買販賣利用組合の第一歩である。爾來村民座右十綱目を日常の信條として業務の進展を圖り逐年業績を向上せしめてゐる。

卽ち大正十三年同組合の事務所及び農業倉庫の建設地を松平家より分讓を受け、大正十四年十一月農業倉庫八十二坪の竣工を更に、昭和二年八月組合事務所及び附屬建物新築に着工し同年十二月竣工、翌年一月事務所を同所に移轉、昭和三年一月組合の崇敬守護神として惠比須、大黑、八幡宮の三神を事務所內に祭祀し同年十二月組合是を制定し昭和七年四月報德一俵貯蓄會を創始した。

目下大字小村に農業倉庫支庫及び組合本部構內に農產物處理場を增築中にして同組合の擴充は實に驚異的飛躍の跡を示してゐる。昭和七年度に於ける組合員數も五百二十四名出資口數七百十八口、出資總額壹萬四千參百六拾圓、貸付金拾壹萬八千參百貳拾五圓、貯金貳拾萬四千九百參拾八圓、準備金六千參百九拾圓、特別積立金參萬九千四拾九圓、販賣高壹萬七千四百參拾四圓、購買高參萬七百參圓に及んでゐるが、組合の業績を此處に導き來つた其功勞者たる稻井唯一氏は夙に二宮尊德に私淑し事務所階上集會室には尊德の軸を掛けて村內青年の精神修養に資し、更らに一般村民にもその精神を徹底せしめてゐる。斯の如くして組合の好績は逐年顯著その簾

を以て先きには産業組合中央會香川支部より優良組合として表彰されたが是組合幹部の努力及び組員の協力を結果した輝しき光彩であらう。現在活躍せる役員は左の諸氏である

組合長理事　稲井唯一
常務理事　小川貫一
理事　久保近次
同　橘彌三郎
同　壺井市太郎
同　太田親義
同　大川彌太郎
同　岡内良平
監事　國方豊吉
同　畑田彌一
同　神田直八
同　森田辰三郎

## 川島町信用購買販賣利用組合

同組合は人口八千人その總てが農業と中商工業者よりなる小邑川島町の唯一金融機關にしてまた産業開發の重要機構を以つて任ずる同組合は明治四十三年七月の創立である當初は信用購買組合として加入口數二百餘口(一口十圓)を得てその金融は主として農家への肥料買入資金融通を目的としてゐたに過ぎなかつた。

大正十一年四月販賣利用部を追加し更らに昭和六年十一月農業倉庫業務をも開始して此處に初めて完全な農商工業者の金融並に共同購買機關の形態を整へた。而して現在同組合の動態は加入口數九百六十口、九千六百五拾圓、準備金七千八百圓、積立金約四千圓、政府及び銀行よりの借入金約參萬圓組合員の貯金拾七萬貳千圓を以て金融資金とし、組合員への貸付は拾五萬貳千圓。肥料賣掛代金壹萬六千餘圓、中央金庫並に聯合會への積立金壹萬圓、銀行預金四萬四千圓を示してゐるが、また共同購買事業は年額壹萬五六千圓の肥料購入を主となし利用方面は大豆粕粉碎機並に此れに必要なる發動機を有する外新農具出現の都度先づ組合に於て之を試用し然る後に農家に利用せしめる方針を採つて居るが、農耕改良に資する所は大なるものがある。

また農業倉庫開始以來米麥類の保管完全に行はれこれ等の



機能を綜合して地方産業の第一線に立てる同組合は愈必要なる存在を謳はれて居る。尚現在の役員は左の諸氏である。

組合長　田中武太郎
專務理事　鎌野久太郎
常務理事　土居紹次
理事　森與平太
同　川田宗太
同　村岡兵太
同　佐々木韓一
同　熊野規矩郎
同　入谷米市
監事　武田嘉平次
同　久保茂太郎
同　藤堂稔
同　溝淵正太郎
同　宮崎團之祐
同　多田勇

## 平井町信用購買販賣利用組合

有限責任平井町信用購買販賣利用組合は明治四十四年十月二十八日現組合長岸本澄太氏等の奔走によつて創立を見たが創設に當り其苦心は異常であつた。即ち八方勸奬の結果漸く口數六百三十三口(一口十圓)を得て事務所を同町役場内に置き事業を創始し、爾來着々業績を擧げつゝあつたが、大正九年諸物價の暴落の爲に思はざる損失を受け一時事業休止の止むなきに逢着したが、此四苦八苦裡に大正十二年現組合長岸本澄太氏就任し一意基礎確立に努力精進して漸く本組合更生の基本は整へられたのである。此勢況に乘じて元木田米券倉庫及び事務所を購入し同時に池戸にも出張所を新設して、大いに業務の進展を期した爾來岸本氏の施策よろしきに信頼を集中しその存在を讃仰されて日に擴充されて居るが、現在に於ける同組合の概況は組合員數七百四十七名、出資口數一千二百二十九口貯金貳拾八萬四千參百圓、貸付金拾貳萬貳千參百拾參圓、販賣高八百六拾壹圓、購買高壹萬參千七百八拾八圓に達して大いに面目を施し且近時異常な發展と之に伴ふ事

務幅輳を見て昭和八年度以降專務理事を設け又倉庫の改築等此盛況は正しく世の盛衰を不定の事實とするも何等憂ふるに足らざる所以にして平木組合の爲めに賀すべきのみならず一般社會の好事例たるを失はない。尙役員は左の諸氏である。

組合長理事　岸本滋太
專務理事　細川淳一
理事　松井愛助
同　岸本庄平
同　内海唯市
同　串田太市
同　細川清
監事　高島元逸
同　大松朋三郎
同　溝口理太郎

## 田中信用購買販賣利用組合

田中信用購買販賣利用組合は明治四十二年二月十五日田中村一圓を區域として創立し同村中村善三郎氏は初代の組合長に就任したのである。當時組合員は二百七十二名、出資口數四百三十八口（一口十圓）を以つて信用部單營の事業を開始したが爾來發展を續け大正十二年度には購買販賣事業を附加し信用購買販賣利用組合とは改稱した。購買部は專ら肥料の共同購入販賣部は日用品呉服類を取扱ひ兩部の賣却高金額一個年約四萬圓に達したが昭和三年購買部の在庫品四百七十種の商品は一般市況奔落のため思はぬ缺損を招き爾來肥料養鶏資料等の斡旋外他部は縮少するの止むなきに至つた。

其後多田喜次郎氏等の新役員は鋭意これが立て直しに努力し今や農會學校役場等全村協力一致自力更生の一途に進みつゝあり組合の貯金奬勵方法としても三ヶ年月掛勤儉定額貯金制度を設けて夫々良成績を示してゐる。現在に於ける事業概況を見るに組合員五百三名、出資口數八百十二口、貸付金五萬四千七百五拾參圓、貯金八萬參千六百六拾九圓、購買部賣却高壹萬六千壹百六拾七圓五拾八錢を示して居る。因みに現役員は左の諸氏である。

組合長理事　多田喜次郎
專務理事　多田万吉



理事　中村久馬象
同　上原平太
同　横山筆助
同　森本鶴市
同　長尾昌平
同　土居好郎
同　小川藤藏
同　多田紋藏
同　松原喜太八
同　廣瀬忠三郎
同　中野叶平
監事　大島藤次
同　横山六平
同　安部新太郎
同　元山喜一
同　大森仙太郎

## 井戸信用購買販賣利用組合

木田郡井戸信用購買販賣利用組合は明治四拾五年參月拾六日創設であるが當初古市依得氏其他村有力者の努力奔走によつて組合員百五十六名、出資口數三百三十三口（一口拾圓）を得て事業を開始した。然るに當時は組合員に理解乏しくためにその成績も極めて不振であつた殊に經營者も又購買品の賣買に關する經驗も尠ければ其他一切の事務に暗くすべては僅かに自己の手帳等に備忘的記入をなす程の粗雜さにして軈て此粗雜亂暴が禍根をなして貯金參萬圓に對して二千餘圓の損失を出したのである。

更につゞいてその數字は增大し大正十四年には四千六百七十餘圓の損失を生むに至つた。而も大正十四年に至る三ヶ年間無決算無總會の狀態にして大正十五年遂に有志立會の上總精算をなし兎も角經營は持續したのであるが昭和四年に至り更らに大損失を招きこのまゝ放任も許さゞれば直ちに斷然整理に着手したが何んと彌縫する事すら能はざる狀態にて同年三月六日遂に全然行詰りを見るに至つた。

この時桑城縣産業組合主事其他當局も何等かの手段に因つて組合を立直すべくと特別の配意あり又村有志一般村民もこの危急を救出すべくして極力努力の結果組合關係者及前役員より壹萬圓の據出せしめ更に新役員より一千圓を出して據置貯金にし辛うじて復活業務を續けた。かくて同組合の更始一新に際して八木長太郎氏は組合長に古市依雄氏を書記に各々就任して大死一番更生の鋭氣を以つて當つた爾來兩氏は他に人手を求めず一切の事務を處理し寧日なき精進を續けて組合の興隆を期せば兩氏の努力に因つて翌昭和五年の決算期には貳千參百圓の純益を見たのである。

更に昭和七年度に於ては貳千六百圓の純益を擧げ全く現時叫ばれて居る自力更生の先行を勤め着々擴充されて居るその現在に於ける貯金は十六萬三千餘圓、貸付金五萬二千九百圓購買高壹萬九千五百圓を示し年次の剩餘金は土地建物、機械等の償却に當て尚積立金六百五拾貳圓を計上して居るがこの如く發奮後の組合は驚くべき業績を展開して居る要するに組合の振不振は村民の協力經營者の頑腦と努力にあるのであつて同組合更生に死力を致せる現組合幹部の苦心と努力は正に記念すべきであるのみならずその約束された明日こそ待望すべきがあらう。尚現役員は左の諸氏である。

組合長　八木長太郎
理事　古市熊之進
同　岡田常八
同　多田宇次郎
同　鴨井信三
同　寒川新太郎
同　小倉彌十郎
同　眞田好太郎
同　眞田幸一
同　香西彌庫
同　赤木弘庸
同　小竹喜六
同　溝淵依得
同　岡田直一
同　森川元一
監事　白井甚吾
同　溝淵德太
同　岡田篤太郎



## 下高岡信用購買販賣利用組合

木田郡下高岡信用購買販賣利用組合は明治四拾四年四月同村笠井千代治、庵濱川政吉氏等發起人となり奔走の結果組合員貳百四拾六名出資口數七百三十五口(一口拾圓)を獲得して下高岡信用購買組合の名の下に創立信用購買の二事業を開始した。爾來順調なる業績を擧げつゝ大正七年には販賣事業を新設して下高岡信用購買販賣生産組合と改稱し更らに大正十一年に至り現在の如く下高岡信用購買販賣利用組合と改め同時に倉庫業を兼營して今日に及んでゐる而して大正九年の財界の變動に際し一時相當の打擊を蒙りしも大正十一年の變動に處しては英斷手持品を處分し補塡充實を計り爾來堅實の一路を邁進し續けてゐる。現在に於ける概況には組合員數二百七十九名、口數九百九十一口、貯金四萬七千九百貳拾八圓、貸付金參萬四千六百貳拾參圓、積立金六千九百貳拾參圓、銀行預金參萬壹千拾八圓、購買額千貳百參拾六圓を示して晏然の業績を誇つて居る。因みに現在の役員は左記の諸氏である

組合長理事　笠井宗一
専務理事　中原健太郎
理事　三宅與三平
同　寒川鹿太郎
同　庵治川政吉
同　松田喜代太
同　末廣佐太郎
監事　笠井貞一
同　土居秀信
同　笠井源太郎
同　三宅文夫
同　眞鍋官平

## 氷上村信用購買販賣利用組合

木田郡氷上村信用購買販賣利用組合は大正十四年四月一日同村香西甚之助、入谷哲平、大西行禮氏等の主唱により創立し組合員四百九拾五名出資口數九百五十八口(一口拾圓)を得

て信用購買販賣の事業を開始した。

爾來無難なる業績に發達を遂げて昭和六年三月三十一日には農業倉庫法により工費六千餘圓を投じて倉庫を新設し同事業を兼營して今日に至つてゐるが、現在の概況には組合員五百四拾八名、出資口數九百六十四口、貸付金六萬九千九拾五圓貯金貳拾參萬七千貳百五拾七圓、準備金參千八拾四圓、特別積立金貳千六百貳圓、購買品賣却高壹萬六千八百拾四圓利用料四拾壹圓の赫々たるを示してゐる。

元來同村は數字に示す如く村勢の豊かを以つて資金は常に餘裕綽々たるものにして、殊に組合員の金融に關する義務履行觀念の確固なることは稀に見る所で時に個人の經濟的不如意を招來しても凡ゆる方法を構じて共仕拂期日には必ずこれを償還付し又後は後の約束とする美習を有してゐる。從つて組合に於ては常に何等の危惧を感ぜずして組合と組合員は常に溫き連鎖も嚴たるあるがその爲めに個々個人の負債整理等に當つては極力援助し組合は組合員の組合たる相互的意識を以て和氣靄々裡に今日の發達を招來して居るのである。尙現在の組合役員は左の諸氏である。

組合長理事　内原藤次

理事　入谷哲平
同　青木和太郎
同　鴨井岩太郎
同　吉原吉太郎
同　小西菅太郎
同　松村格太郎
同　香西甚之助
同　日笠義延
同　入倉惣五郎
監事　高重逸太郎
同　鴨井岩太郎
同　多田庄平

## 三谷村信用購買販賣利用組合

三谷村信用購買販賣利用組合は大正十年十月十二日創立し組合員三百十五名、出資口數五百五十三口（一口二十圓）を得て翌十一月四日信用部單營の事業を開始した。その當時の業



態は貸付金六千貳百八拾圓、貯金貳千百八拾圓程度のものであつたが昭和四年一月一日購買部を開始し更らに昭和七年販賣部を兼營したがこれより先き昭和六年二月五千五百圓の建築費を投じて八十二坪五合の農業倉庫を新設し米麥の保管取扱を開始する等その活躍は愈々本格的となつた。斯くて最近に於ける業況を見るに組合員三百八十九名、出資口數六百九十二口に達し貸付金八萬一千圓貯金拾六萬參千圓剩餘金壹千五百圓、特別積立金壹千六百圓、購買高貳萬四千圓、販賣高壹萬貳千圓、倉庫事業の取扱數米貳千六百俵麥百俵を示してゐる尙同組合では特に學童貯金を奬勵し毎年一回小學校の各學級毎に就いて統計を取り優秀なる者には賞狀を授與し大いに貯蓄心の涵養に努力してゐるがこれ等は特記に値する所である。因みに現役員は左の諸氏である。

専務理事　山野直衛
理事　漆原伊太郎
同　漆原數平
同　岡内正一
同　松原長平
同　十河次郎助
理事　漆原久雄
監事　寒川小平次
同　黒川文次郎
同　松本喜三郎

## 西植田信用購買販賣利用組合

木田郡西植田村信用購買販賣利用組合は明治四十二年二月五日同組合現役員井上傳九郎氏等發起となり未だ組合の機能を無理解なる多數同村民を苦心勸說して漸く創設を見るに至つたのである。以來その時代的使命を了知するに及んで逐日歡呼以つてこれを利用し同村に於ける唯一の金融機關となつたが大正七年九月十三日不慮の大洪水に罹災し事務所及び重要書類悉くを流失し組合及び村内に於ける損害も多額にのぼつたがこの時組合幹部は捲土重來を期して鋭意復興に努力し大正九年事務所を移轉し更に活躍精進を續けた。

斯くしてその業績は逐年擧り昭和四年には近村稀に見る壯大なる洋館の事務所を新築し業務は異常の發展を來して左の

現況を示すに至つたのである。

組合員五百七十七人、出資口數八百六十口、出資拂込金八千六百圓、準備金及び各種積立金八千八百拾九圓、貸付金拾壹萬壹千拾八圓、貯金拾五萬參千五百五拾八圓。因みに同組合現役員は左の諸氏である。

組合長理事　村尾一義
理事　村尾克己
同　井上傳九郎
同　村井龜太郎
同　報平次郎
同　釜野駒三郎
同　利國新太郎
監事　村尾次五郎
同　上原米吉
同　山田安吉

## 東植田信用購販賣利用組合

木田郡東植田村信用購買販賣利用組合はその前身を寶池信用組合と稱したこの信用組合は東植田村及び隣接十河村間にある寶池部落を中心として設立され相當の業績を擧げてゐたが大正十年四月に至り現東植田村々長安藤甞太郎收入役青江正義及び寶池信用組合長谷本注連太郎等諸氏の奔走によつて現在の東植田村々役場内に事務所を移轉區域を同村一圓に擴張し同時に名稱を東植田村信用購買販賣利用組合と變更した爾來飛躍を重ねること十餘年今や組合員三百四十四名、出資口數九百十一口を得てその業績も出資拂込金九千百拾圓、準備金六千百貳拾貳圓、特別積立金四千參百五拾參圓、貸付金五萬八千五百五拾壹圓、預金拾貳萬六千貳百九拾圓貯金拾八萬四千五百九拾八圓を示すに至り同村唯一の金融機關としてその存在を謳はれてゐる。因みに現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　多田小太郎
理事　遠藤多喜男
同　谷本注連太郎
同　美濃瀧次郎
同　青井政義
同　飯間龜太郎



理事　久保伊十郎
同　森本與市
監事　青井武太郎
同　安藤甞太郎
同　山田嘉平次

## 奥鹿村信用購販賣利用組合

木田郡奥鹿村信用購買販賣利用組合は大正十二年三月廿八日同村中村善四郎氏の努力奔走により創立した組合員三百十八名、出資口數六百二十一口(一口拾圓)を擁して信用部單營の事業を開始し中村善四郎氏は初代の組合長に就任するや日夜組合發展に獻身的精進を積け今日の隆盛に至つてゐるが大正十五年購買販賣部を兼營し昭和三年五千六百圓を投じて事務所と農業倉庫を新築し大正十四年には利用部を新設してその與へられた全機能を發揮し稀に見る業績を擧げてゐる。

而して利用部の如きは大豆糟の粉末の製造利用の外に昭和六年八月醬油醸造場を新設して昭和七年十二月より發賣を爲し年産醬油二百五十石に達し全村を擧げて美味安價なる醬油を禮讃せしめて居る。殊に同村はその位置邊僻なるために勿論他に金融機關等はなくそれに村一般の貯蓄心は彌が上にも村内唯一の組合信用部を利用して現況の盛況に到らしめて居る。貯金貳拾萬九千六百六拾壹圓、貸付金拾四萬八千五百六拾五圓、準備金貳千六百八拾五圓、特別積立金七百七拾貳圓祝典記念積立金四百六拾五圓、尙同組合は近く農會と提携して生産的方面の援助をなし村内産業開發に努力することになつてゐるが現在に於ても組合員に藥を分配して醫師なき村民の保健衛生に資する等同組合は農山村生活の全面に遺憾なき活動を以つて全員の福祉に貢獻し信頼を深めてゐる。因みに現役員は左の諸氏である。

組合長　藤澤克太郎
專務理事　成瀨直三郎
理事　眞島義士
同　中村善四郎
同　平井又三郎
同　酒井孫三郎
同　浦邊高藏
同　筒井紹次郎

## 屋島信用購買販賣利用組合

木田郡屋島町は名山屋島山麓をめぐる山紫水明の觀光郷としてその名頗に高く更らに國立公園地として近來遊覽客の來往著しく激增し昭和八年四月一日より町制實施してその前途は愈々多幸を想せるものがあるこの觀光地屋島町一圓を區域とする屋島信用購買販賣利用組合は大正十二年相原金四郎、青木光雄、森田惣吉氏等發起人となり各戸に亘る勸說の結果多數の共鳴を得て設立した。

爾來好調を以つて發育を遂げ逐年業績を擧げつゝあるが同組合では特に勤儉貯蓄思想の涵養に努力せるため最近の貯金總額の如きも異常な數字を示して居る。之を昭和六年度に於ける概況組合員數七百八十九人、出資口數二千三百二十二口（一口拾圓）貯金五拾萬四千八百四拾六圓、貸付金參拾壹萬壹千八百八拾圓に達し購買販賣利用事業も近く實施の模樣である。現役員は左の諸氏である。

| | | |
|---|---|---|
| 組合長理事 | 青木光雄 | |
| 理事 | 森田惣吉 | |
| 同 | 磯邊朗 | |
| 同 | 谷脇伊三郎 | |
| 同 | 原田剛 | |
| 同 | 大浦留吉 | |
| 同 | 村上惣助 | |
| 同 | 大黒幸次郎 | |
| 監事 | 大西長富 | |
| 同 | 山田清助 | |
| 同 | 森田爲吉 | |
| 同 | 吉岡龜太郎 | |
| 同 | 藤岡金三郎 | |
| 同 | 新居金四郎 | |
| 同 | 脇鹿次郎 | |
| 監事 | 山田秀穎 | |
| 同 | 東安平 | |
| 同 | 北内垣三郎 | |



# 大川郡

## 長尾町信用購買販賣利用組合

「能く和し能く働き、能く貯へ」此れ有限責任長尾町信用購買販賣利用組合のモットーである。同組合は長尾町一圓を區域として大正四年に設立した。長尾町は大川郡の西南方に位して長尾西、長尾東、長尾名、前山の四ケ大字より成り南北三里十七町、東西三十町耕地反別四十八町餘歩、畑六十八町五反餘、山林千百八十八町一反餘、戸數千二百九十一戸六千二百四十一人、（昭和五年調）を有して町民は農及び商を專業するもの農商兼業するもの等各々その業態を異にせる爲め組合經營上頗る困難を極めまた從來中產者以下の金融機關なく從つて產業も微々として振はなかつたが偶々大正三年御大典に際し各地に記念事業が起り同町に於てもこの盛典を永遠に記念し併せて產業の發展に資すべく多年の懸案たりし產業組合設立の機運は萌來した。

斯くて當時大川郡產業組合指導員槙原紺次氏、故井上勘平氏等の奔走に依り贊成者四百十三名、出資口數千二十口を以て大正四年六月設立を申請したが第一回拂込成績は同年九月三十日に至るも半數を了するに過ぎず解約又は脫退するもの續出しこゝに一頓挫を來したが發起人諸氏の堅忍、勸說に努力せる結果十一月五日に至つて漸く組合員三百三十八、名出資口數九百六十四口を得て辛うじて創立總會を開くことを得た而も同地方は縣下に於ても貯金爭奪の最も激烈をきはめその爲め貯金蒐集については可成困難を覺へ町民集會の場所には必ず理事自ら出張して貯蓄の必要を說き部落講話には貯金奬勵を織りこみ又は戸別訪問を行うて勸誘する等各種の方法を講じて貯金蒐集に努力する狀態であつた。この役員及び組合員の協力精進は逐年業績に顯れて大正六年一月には購買部を新設し大正七年三月販賣生產部を加へ十一年一月更らに利用部を設けて現在の如く長尾町信用購買販賣利用組合となつた斯くして最近には組合員九百八十五名、出資口數一千六百四口を示し信用部の貯金總額參拾參萬八千六百六拾四圓、貸付金總額拾七萬九百參拾九圓に達し購買部も組合員使用の產

業用品中の八割を配給し販賣部また農業倉庫事業と相俟つて生産物の販賣年と共に増加し利用部は過般發動機數臺を以て麥脱穀、大豆粕粉碎、稻扱籾摺揚水、精米等を行ひその業績愈々向上を示し大正十年産組中央會香川支會より成績優良を以て表彰された程である。尚現在の役員は左の通りである。

代表　理事　佐々木傳五郎
理　事　間島南海士
同　間島仁平
同　小西岩夫
同　國方清二
同　福西樫太郎
同　安部好太郎
監　事　間島馬二
同　川田直良
同　山本德太郎
同　眞田與五郎

## 石田村信用購買販賣利用組合

大川郡石田村信用購買販賣利用組合は明治四十三年十二月一日信用單營にて創設されたが當時組合員は二百十二名、出資口數六百十口(一口拾圓)を得て事業を開始し創設功勞者たる山下庵氏が組合長に就任した。然かもその當時に於ては貸付金のみ五百七拾壹圓を示し貯金はしばし皆無の狀態にして次いで大正九年度に至り有限責任石田信用購買販賣生産組合と改稱し購買販賣利用部を新設し同時に農業倉庫業の開始の申請をしたこの時の業態は貸付金貳萬八千圓、貯金貳萬八千五百圓購買高參千圓、準備金參百五拾圓に達して居た。

斯くて依然貸出の多きを示しつゝ逐年進展を刻み現在では組合員五百六拾五名出資口數一千三百五十六口にのぼり業況も貸付金七萬參千圓、貯金拾萬圓、準備金五千七百參拾貳圓特別積立金貳千四百拾圓、倉庫事業は米二千五百俵、麥一千俵、購買販賣部は未だ充分利用活動の域に入らない。現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　木村市助



## 富田村信用購買販賣利用組合

大川郡富田村信用購買販賣利用組合は同村有志富田模一氏等の斡旋奔走により大正五年六月五日創設を見た。斯して信用部單營の事業を開始したがその當時に於ける事業狀態は僅々貸付金貳千圓貯金八百圓程度に過ぎなかつた、爾來組合員の支持と役員の努力により進展を重ねて大正十三年一月には購買販賣部を新設せしも同部は後日四圍の事情より中止し現在に於ては信用部のみに全能を傾注し其現況も貸付金七萬六千圓、貯金拾壹萬貳千圓、準備金壹萬貳千四百拾圓、特別積立金貳千九百六拾參圓に達して居る。因みに現役員は左の諸氏である。

理　事　有馬清平
同　三浦直吉
同　藤井浩
同　藤井好太郎
監　事　井川傳
同　遠藤伊之助
同　廣瀬定次郎

組合長理事　賴富新吉
理　事　鴨井啓三郎
同　井川雅章
同　松原直樹
同　田村英一
同　富田正平
同　齋藤要
同　鴨居堅太
同　六車勇一
監　事　向井四方之助
同　天野孫四郎
同　賴富清平

## 松尾村信用購買販賣利用組合

大川郡松尾村信用購買販賣利用組合は明治四十一年の創立組合員約百五十名を得て信用單營の事業を開始した。爾來年と共に進境を示して今や組合員五百三十名、出資口數千三百七十口(一口拾圓)貸付金拾貳萬貳千圓(主として養蠶資金に貸出)貯金貳拾萬圓積立金壹萬圓近くに達してゐる。現在の組合長大山直一氏は昭和三年に就任以來組合更生を自己畢生の事業として奮進しつゝ今日に至つてゐるが同氏の就任當時は農民組合蜂起して産業組合等を理解する者少く組合普及講演會等を開催すれども耳を傾ける者もなき狀態であつた。

此處に於て同氏は先づ組合の基礎を確立するためには實踐窮行に如かずとは思つて以來マツチ一本に至るまで節約する勤儉力行を以て文字通り獻身的精進を續けたこの熱誠と努力は天人も如何で捨てんや氏の人格的感化は漸次村民をして吾にかへらしめ組合精神を理解し組合を助成するは農村風景を淨化し自らを向上和樂に導くものとの信念信賴を集め着々實績を納めて居るが氏の實踐窮行は農村松尾村に建立された鄕く標柱でこそある。因みに現在の役員諸氏は左の通りである

組合長理事　大山直一
理事　大山茂
同　陶山玄八
同　多田幸太
監事　高島省吾
同　多田熊一
同　多田松平

## 鴨庄村信用購買販賣利用組合

大川郡鴨庄村信用購買販賣利用組合は大正十一年三月三十日同村野崎佐平氏等主唱のもとに創設組合員二百四十六名、出資口數六百十五口(一口拾圓)を得て事務所を同村々役場内に置き事業を開始した。爾來日進月歩の進展を續けて大正十五年五月事務所を新設すると同時に增募して組合員四百三十一名、口數八百一口に達しその事業動態も貸付壹萬八千圓、貯金五萬貳千圓、剩餘金七百八拾五圓を示すに至つた。

斯くして昭和七年三月經費二千三百圓を投じた新事務所を建築して面目を一新し躍進を續けつゝ昭和七年末に於ける事



業狀態は組合員數四百四十四名、口數八百七名(一口拾圓)貸付金貳萬五千二百九拾七圓、貯金拾五萬四百八拾圓、準備金及び各種積立金參千九百拾九圓に達しその數字の如く一躍貯金のみの超增を示し一方貸付金は極めて少額にあるが是は組合員に農家多く資金を利用する者勘きに因り農村疲弊の今日貯蓄心の旺盛なるは洵に同村の誇りとするところにしてこの推賞すべき地風作興にも本組合結成以來各役員の貯金奬勵がこの成果を揭げて居るのである大正十五年事務所を村役場より獨立したる際の如き役員自ら率先して一人當り二千圓宛を貯金し組合員を感奮せしめた祕話も殘されて居るのである。

更らに同組合では昭和七年十月廿一日組合の別働隊として本組合のため福祉を圖る意志ある者を以つて青年振興會を創立し農具、日用品、食料の共同購入生産品の共同販賣或ひは古叺の購入蓐旋より自家用醬油の醸造講習會等を開催して家庭經濟の合理化を圖り更らに社會奉仕的に村内道路の要所に自轉車空氣入を置き搭乘者の利便を企圖し尙毎月必ず一種目宛の有益事業を興す等その活躍に幾多嘆賞すべきものがあるが何れ組合精神の發露にして世を指導的意義こそある因みに組合の現役員は左記の諸氏である。

組合長理事　佐藤員善
理事　松岡義三郎
理事　織田要
同　白井孝三
同　半田宗一
監事　曾根昌平
同　竹内半三郎
同　多田長太郎

## 小田村信用購買販賣組合

大川郡小田村は戸口六百戸その大半は漁業者(內海漁業者約二百戸、朝鮮、シンガポール、樺太方面への出漁者約三百戸)によつて占められ內海漁業者もその殆ど總てが熊野灘其他遠洋に出漁してゐる。これ等漁業者の漁業資金の金融及び收獲の貯蓄機關は夙に要求されてゐたが明治四十三年一月一日同村紀多保太氏等の努力により小田村信用購買販賣組合の創立となり組合員四百九十四名、口數一千百三口(一口拾圓)を得て事業を開始した。

その當初は組合精神未だ徹底するに到らずして利用者も極

めて少くその存立をすら危れたが其後異常なる役員の努力と一般の理解によつて漸次發達を來し今日に至つた。今や組合員四百九十四名、出資口數一千八十八口、貸付金九萬九千六百七十七圓、貯金九萬貳千九百四拾壹圓、準備金及び各種積立金貳萬四千八百圓に達してゐる。

而して貸付は一定有力者の外漁家を主とするので漁船を擔保の外は殆んど信用貸にして從つて稍高率なるは免れずとするも極めて圓滑に運轉して克く組合機能を擴はれて居る。因みに現在の役員は左記の諸氏である。

組合長理事　小川半
理事　石原忠寄
同　石原計太郎
同　松岡市平
同　多田榮
監事　大須賀小四郎
同　木内今次郎
同　馬場勘七

## 津田信用購買利用組合

大川郡津田信用購買利用組合は戸數千三百戸（農家五百戸漁業五百戸、商業三百戸）を擁する津田町一圓を區域として大正九年六月廿三日創立した。而して創立功勞者大社恒吉氏は組合長に就任し組合員三百七十六名、口數一千百十二口を得て同年九月十日事業を開始したが爾來躍進を遂げて大正十四年一月十三日利用部を兼營し津田信用購買利用組合と改稱した。

昭和七年度末に於ける組合員數三百十二名、出資口數八百四十五口を以て各部の事業分量も漸次擴大されて目下は倉庫部も經營しつゝあり。同組合に於て異彩とするは貸付に對する信用程度の評定にして實に微に入り細を穿つものがあるその一例を示せば先づ性行出資口數資金に就いて一等より五等までの等級を定め一等九十點、二等八十點、三等七十點以上四等五十點以上、五等四十九點以下としてゐるがそのうち性行に關しては

時間及び約束を嚴守するや否



出資金の拂込みを怠らざるや否

平素家業に誠實勤勉なるや否

貯蓄心あるやか否

教育の程度家庭の狀態

等に亘つて入念なる人物調査を行ひ各項共滿點を十點として夫々評點し飽までその嚴正を期してゐるがこれ等は組合の經營堅實を期する上に周到なる用意とすべきであらう。尙現在役員は左の通りである。

組合長理事　大社恒吉
理事　木村理三郎
同　大眉東次郎
同　中川仁太郎
同　山本善七
同　時井源太郎
同　末竹作次
監事　橋本茂作
同　長町繁太郎
同　三木德次郎
同　田中次作
同　木内岩吉

## 三本松信用組合

大川郡三本松信用組合は大正十三年二月十日の創立、西尾兼太郎氏組合長となり組合員二百八十一名、出資口數一千六百二十七口（一口貳拾圓）を以て信用部單營の下に事業を開始したが爾來順調なる進境を示して今日に至り現在組合員數は三百二十九名、出資口數一千四百八十一口、貸付金拾萬七千參百參拾壹圓、貯金四萬參千七百四拾八圓、準備金及び各種積立金八千八百貳拾參圓を示して居る、

尙同組合は特に組合の貯蓄觀念の涵養に留意して機會ある毎に是を慫慂力說してゐる最近に於ても　今上天皇陛下御大典記念事業として組合員全部に五拾錢記入通帳を一冊宛分配し其れを基金として貯金を奬勵してゐるが實施以來三ケ年にして既に總額貳千七百五拾圓に及ぶの成績にある。因みに現役員諸氏は左の通り。

組合長理事　窪田楠太郎
理事　宮城清太郎
同　中松千太郎

## 三本松住宅購買利用組合

大川郡三本松住宅購買利用組合は昭和二年一月十二日現組合長西尾兼太郎氏等の努力斡旋により組合員六十名出資口數四百八十九口（一口五拾圓）を得て創立家屋建築及び家屋購買の二事業を開始した、爾來組合員の絶大なる歡喜と支持を受けて二事業共その業績著しく高揚して居る家屋建築部に於ては家賃を建築總費の年八朱に算出して一ヶ月拾圓内外の仕拂ひに依り最も簡便に組合員の希望を充し購買部に於ては建築申込みの場合はその都度設計と費用を協議して壹千圓の建築物に就き一ヶ月九圓拾五錢の割合にて十五ヶ年の月賦方法を設け更らに購入希望者に對しては其の建築費の約二割を購入と同時に納付せしめ殘金は貸付け月賦仕拂となすの便法に因つて居る。

斯くして既に建築竣工せるものに二階建二十五軒（二十五坪より十六坪に至る）あり、更らに東洋紡績三本松分工場設置以來住宅俄かに拂底を來たし目下これが對策について努力をして居る。因みに現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　西尾兼太郎
理事　多田丈太郎
同　坂本看三
監事　宮城清太郎
同　中野昂太郎
理事　中原馨
同　田中六郎
同　尾崎茂平
同　池田政太郎
監事　細川順一
同　多田清次郎
同　立石才助



## 福榮村信用購販賣利用組合

大川郡福榮村は耕地二百四十町山林七十町を有し村民は米麥の耕作の外に養蠶及び木炭の生産を以て生計を樹てゝゐるが由來村内に金融機關なくその不便言語に絶するものがあつた。茲に於て同村有志渡瀬卯太郎氏等夙に産業組合の設立を提唱して勸説しつゝあつたがその機は熟して大正十四年四月十四日組合員三百七十名、出資口數一千三百十七口を以て福榮信用購買販賣利用組合を創設直ちにその事業を開始した。

爾來村民唯一の金融と産業開發機關として絶大なる支持の下に逐年躍進を重ねて今日に至つてゐる。昭和七年度末に於ける組合概況は組合員數四百二十三名、出資口數一千二百三十七口、貸付金五萬四千四百七拾四圓、貯金四萬七千七百九圓準備金三千六百九拾五圓の勢況を示し昭和八年度に於ては更に建築費四千圓を投じて農業倉庫を新築し同事業を兼營すべく準備中である。因みに現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　渡瀬貞
理事　小島浦太郎
同　渡瀬卯太郎
同　赤松萬吉
同　桑島雅雄
同　田村熊吉
同　丸田治平
監事　藤原貢
同　平島龜太郎
同　生駒清定
同　松岡脇次郎

## 小海信用購販賣組合

大川郡小海村信用購買販賣利用組合は明治四十一年十一月十日の創立であるがその創立功勞者たる安倍實氏初代組合長に就任し同年十二月二日組合員數は百八十名、出資口數三百

六十日(一日十五圓)を以て信用單營の事業を開始した。

爾來逐年躍進を示して大正九年七月より購買販賣事業をも兼營し今日に至つてゐる。現在の貸付四萬五千圓、貯金參萬五千圓にして貯金額の少なるは昭和四年頃米價下落により地主の經濟狀態逼迫し競うて小作人に田地を讓渡せんとし他方當局の自作農奬勵もあり同組合員の多くもこれが自作農に就きその購入資金は當然組合の融資に依れる結果にして茲に同組合は一意貯金奬勵を爲し其方法として目下部落貯金及び更生貯金を行つてゐるその內更生貯金とは昭和七年度より自力更生を目して匡救事業に傭はれ其得たる組合員の賃金を組合にて受取り各自の貯金通帳に記入する方法にして他の組合に類例を見ない貯金方法である。

購買部は主として肥料取を扱ひ年額約五千圓を購入してゐる外販賣部の特殊的なるものは同地方の特產物たる松茸の共同出荷にして組合員は各自收穫したる松茸を組合に持ち寄り松竹梅萩の四種に等級を分つて出荷するが一ケ年の賣上げ取扱額は貳千五百圓に達する等同組合員一同の更生意識は實に眞劍なるものがある。因みに現重役は左の諸氏である。

組合長理事　松浦始平
理事　水口新七
同　水口茂一
同　細川定松
同　安倍實
監事　岡田万藏
同　奥谷助五郎

## 白鳥村信用購販賣利用組合

大川郡白鳥村信用購買販賣利用組合は大正八年三月十二日同村秋山清助氏等の努力により白鳥村信用購買販賣生產組合の名稱のもとに組合員四百名出資口數一千口を得て創立した爾來精進を重ねて大正十二年一月三十日現在の如く白鳥村信用購買販賣利用組合と改稱して今日に至つた。

その昭和七年度末に於ける業績を見るに組合員數四百六十六名、出資口數一千二百六口、貸付金六萬壹千百七拾九圓、



貯金四萬貳千七百貳拾六圓、準備金參千八拾六圓、倉庫積立金八百圓を示し同年度に於ける隣町白鳥本町信用購買販賣利用組合整理の餘波を受けて稍雌伏狀態の憾こそあるが目下幹部並に組合員の忍苦努力により更生への歩みを續ければその雄飛擴充遠き將來ではあるまい、現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　田中富之助
理事　小島忠三郎
同　六車辰次
同　田坂幸藏
同　鎌田林平
同　中野愛三
同　松村喜市
監事　六車廣太郎
同　川田吉廣
同　原井彌助

## 引田町信用購販賣組合

大川郡引田町の明治四十四年頃に於ける金融機關は大內銀行引田支店のみにして一般金融上尠からざる不便を感じてゐた此處に於て同町梶原富三郎、堺恒吉等諸氏はこゝに相諮つて中產以下の金融機關たるべき信用組合設立を企畫し機は熟せば梶原氏等十氏發起人として明治四十四年十二月二日設立の許可を得同月二十五日信用購買販賣部の事業を開始した。

爾來苦鬪を以つて躍進し更らに時代に平進して十二年六月には農業倉庫も兼營しつゝ今日に至るが今や同町に於ける必要缺ぐべからざる金融機關として多數組合員の利用に便して居る而してその業績も昭和七年末にして組合員數四百五十六名、出資口數一千八十二口、出資金壹萬八百貳拾圓貯金參拾萬七千參百八圓、貸付金拾參萬壹千拾五圓、準備金貳萬參千五百六拾貳圓、特別積立金壹萬六千六百七拾九圓、剩餘金壹千五百五拾貳圓、農業倉庫保管料百八十圓、入庫數玄米一千一俵、小麥五百七十三俵、裡麥四十四俵を示してゐる此好績の中に現組合幹部の堅實主義は農漁の町引田大衆をして全幅

の信頼を擔つては居る。尙現在の役員は左記の諸氏である。

組合長理事　阿部茂七
理事　入田最一
同　阿部驛
同　池田熊吉
同　榊原省吾
同　岡本一郎
同　寺島平吉
監事　福島虎逸
同　山本綾助
同　稲垣雄三

## 相生村信用購買販賣利用組合

有限責任大川郡相生村信用購買販賣利用組合は大正二年十二月二十七日同村一圓を區域として創立したが同村は戸數七百餘、人口三千五百餘、田二百五十町歩、畑八十町歩を有し農業を本業とする傍ら漁業用藁繩の生産が盛んである。由來交通不便にして金融機關なく生活程度低く更らに村内の自治圓滿を缺ぐ等經濟的にも自治的にも同村の前途は暗憺たるものがあつた。卽ち圓滿と平和なき所に繁榮はなくこの狀態には村有志も夙に痛心する所であつた。

かくて時に縣當局より産業組合設立の勸奬に接しこれを機として各部落毎に二三名の委員を出して戸別訪問を以つて組合を理解せしめ贊成者を募つたが大正二年十二月漸く四百六十八名の加入者を得て信用組合を設立し事務所を村役場内に置いて大正三年一月二十日より事業を開始した。

かくて漸次機能を理解と共に利用者を增して發展の趨勢を辿り大正十二年一月事業を擴張して相生村信用購買販賣利用組合と改稱し先づ購買部事業を兼營同年五月利用部を開始し更らに大正十五年四月に至り販賣事業も創始した。

昭和三年一月農業倉庫部を開始するに及び此處にその内容を完備し最近に於ては組合員六百三十七名、出資口數一千百三口、貸付金拾參萬參千貳百八圓、貯金拾九萬九百拾圓、準備金壹萬壹千八百貳拾貳圓特別積立金壹千五百參拾貳圓購買



部賣却高壹萬六千百五拾九圓といふ稀に見る好成績を示してゐるがこの盛況も當然善良なる指導者に依存して展開したものであつて其中心的人材と協力の賜とはしても同組合のこの繁榮を以つて村は平和に自治は發展すればそこには豫期以上の効果を收獲したと謂はなければならない。尙現役員は左の諸氏である。

組合長理事　長町房榮
理事　松村武左衛門
同　大畑晋一
同　丸山綱次郎
同　永峰廣吉
同　三谷伊之八
監事　矢野貞之丈
同　桑島兵次
同　岸上傳太郎

# 香川郡

## 笠居信用購買販賣利用組合

笠居信用購買販賣利用組合の區域は香川郡上笠居村、下笠居村、香西町の一町二ケ村にしてその面積は二方里戸數二千六十餘戸人口一萬二千餘名に上る廣域の組合であつて然かも同組合は縣下産業組合中最古の歴史も輝きこの輝きの下には貯蓄を以つて自己の保全を期し更にこれを隣人に融して有無相通じ相互扶助と共存共榮の社會的高風は醸されて居るのである。

この麗しき精神美作興と更にこれに由つて地方産業開發に資せる産業組合發祥の先陣を承る笠居信用組合及びその前身が結成に基本的努力を捧げし人々の貢獻は實に偉大にして本縣産業組合史の一頁を飾る特筆すべき一壯調でもある。爰に

本縣最古の歴史を誇る同組合は共發祥を組合法發布以前に發し明治二十七年頃に於て早くも農村金融の便として何等か共地方色業情に相合する特殊金融機關の必要を唱へられて居た即ち泉川亮平、神邊晟太、片岡龜吉、大橋茂一、神邊庫太、片岡梅吉、松田猪吉等諸氏は相寄つてこれが機關の創設に腐心中遂に明治二十七年三月同志積金講なるものを組織し貯蓄と金融の事業を開始した。然るに事業は未知未踏にして所謂或部局に限られた非大業的であり且幾多不備を悟つて同三十一年十二月一先づ解散したが恐らく同講會は本縣に於ける貯蓄團體として嚆矢であつたらしい。

共後有志等は更に一歩合理化せる金融機關を創設すべく種々研究中時の郡長近藤綿往氏よりその聞知せるものに福島縣にアイルランド式金融機關ありとの事であつた。これを聞いた有志等は直ちに夫に就いて研究した。就中神邊氏の如きは態々實地視察などし遂に明治三十一年三月中笠居村信友組合を組織し出資額を十圓と定め持分は任意に一ケ月金二十錢の拂込として有志等は五十口以上を出資し全く一般的金融機關として事業を開始した。勿論當時すでに隣村上笠居下笠居をも包含せる廣範圍にして次いで明治三十三年產業組合法の發令ありしも組合は其儘繼續經營し年一割二歩以上の配當を續行するの好成績を示して居たのである。

共後日露戰爭後の國勢進展に伴つて信友組合を解散し無限責任香西信用組合を組織同時に大組合主義を痛感して弦打村をも事業範圍となし同事業は愈よ本格的金融機關の體勢を整へて躍進したのである。この時組合長は明敏の定評あり且本縣斯界に功勞を謳はれし神邊晟太氏にして氏は後に縣聯合會組織を主唱し結成後聯合會長に就く等共大正十年二月急逝するまで香西信用組合の發展指導に當つた。

かくて四十一年には無限を有限に更に事務所を構築し支所を設置する等異常の發展裡にあり四十五年四月弦打村は地理的不便から遂に分離して別に弦打信用を創設した。而して明治四十三年の同組合抱擁人員は九百八名にして二千七百三十八口しかも當時すでに準備積立を合せて四千七百餘圓を計上するの成績にして他は推して知るべきである。

この趨勢を辿つて昭和五年十二月時代の要求を洞察し購買販賣利用農業倉庫の各事業を統合すべくして三町村内既設の前記機關を解體合併し現在の如く笠居信用購買販賣利用組合と名稱する縣下有數の實體を整へた。



尙同組合最近の業況を見るに七年度末に於て組合員二千三十一名、拂込出資四萬五千百六拾圓、各種積立金六萬八千七百五拾五圓五拾四錢、貯金百貳萬參千貳拾五圓、貸出六拾參萬七百參拾參圓、借入金八萬八千四拾九圓、購買販賣部價額五萬九千七百貳拾貳圓、利用部七百拾五圓、農業倉庫利用三萬數千俵等は何れも驚異的數字にしてこれを以つて眞に本縣產業組合の開祖たる面目と偉容は兼ねて正に赫々たるものである殊に現組合長泉川亮平氏はかつて積金講時代より深く關係を持し神邊晟太氏歿するや以來組合長に就任この農村稀な大信用組合の統營に當りつゝあるがさきに縣會議員にも推された逸材にして目下縣聯合會參與理事として重きをなしその功績も沒すべからざるものがある。因みに現在の役員は左記の諸氏である。

組合長理事　泉川亮平
副組合長理事　久保森吉
同　〃　南原千太郎
專務理事　神邊昂太
常務理事　大林武雄
理事　久保榮吉
理事　愛染藤太
同　片岡龜吉
同　河野常吉
同　高橋伊太郎
同　神邊庫太
同　德田源一
同　平木太八
同　富岡圭三郎
同　浮田又造
同　川原吉藏
常任監事　泉川文內
監事　久保德次
同　西村憲三
同　松田彌八

# 佛生山町信用利用組合

香川郡佛生山町信用利用組合は明治三十五年二月創立し翌三十六年三月九日事業開始して以來逐年躍進しつゝ今日に及んでゐるが同組合の設立までには約五ヶ年に亘る準備期間があつた。この間現組合長中條陸郎氏等の先覺的忍苦努力は大抵でなかつた。即ち明治三十二年十月ごろ中條陸郎氏は町内の庶民金融機關として時代的信用組合の設立を企圖して有志佐藤豊藏氏と計り資産家及び一般有力者を勸説大いに努めたが當時中條、佐藤兩氏とも年齢未だ三十に達せずこの若人が世と耳を傾ける者もなき狀態にして東奔西走すること一ヶ年折柄産業組合法の發布を見たのである。

爰に於て愈々機は熟せりと兩氏は心中雀躍し更らに勸誘に努めたこの當時町内に中立銀行と稱するものゝ代理店があつたが是は一般町民をして心を信用組合に投ぜしめざる對象をなして居た。されば中條氏等の凡ゆる説明努力も一向勸誘の上には顯れずかくて三十四年中立銀行の閉店に及んで同町に於ける金融機關は絶無ともなりこゝに初めて兩氏の戸別訪問的組合創設の趣旨徹底を期した努力は漸く効を奏し町有志の間に稍々諒解なつて遂に明治三十五年一月漸く正式に設立認可を申請するの運びとなつた。

次いで認可を得て明治三十六年三月九日愈よ事業を開始するに至つたが、爾來躍進に次ぐに躍進を以て大正三年一月には更らに六十六坪の倉庫一棟を新設して巨歩を進めた現在に於ける業績は組合員五百五十七名、出資口數九百七十八名、貸付金拾壹萬參千七百貳拾六圓、貯金拾壹萬六千百貳拾圓、預金壹萬五千貳百參圓、出資金九千七百八拾圓、借入金六萬六百五拾六圓、準備金七千七百八拾六圓、倉庫入庫數米二千五百俵、麥一千俵素麵六千俵、蠶一萬貫の活況を示してゐる尚同組合では更らに昭和八年度より通知貯金、參宮貯金、豫約貯金、就學貯金を開始し何れも好績を見つゝある。

斯くの如く逐年盛況を迎つてゐる同組合に對して最も功勞多き中條陸郎氏は明治三十六年三月監事に就任し其後明治四十二年二月理事となり明治四十五年二月組合長に就職し今日に至つてゐるが昭和二年六月十六日組合發展に努力した功績を以て中央會支會より表彰された。なほ同組合現役員は左の諸氏である。



組合長理事　中條陸郎
理事　川田喜代次
同　山本源七
同　岩橋完一
同　岸十郎
監事　山本政八
同　渡邊蕃

# 雌雄島村信用購買販賣利用組合

香川郡雌雄島村は高松市より海上一浬餘に位する島嶼にして從來金融機關皆無なると金融又圓滑を欠ぎ個人間に在つては一割五分以上の高利にして尚且困難なる狀態にあつた。この金融硬塞の實狀に西村鼎三氏等村内有志は相計つて大正元年九月信用組合の設立を計畫し組合員二百七十八人、口數六百五十二口、(一口十圓)を以て事業を開始した。最初島民中には組合に對する理解乏しく其普及困難を極めたが異常なる役員の努力の結果漸次組合精神の徹底化と共に利用者次第に增加し大正八年には購買販賣事業を兼營更らに同十年利用事業を加設し原動機並に精穀機をも備付け組合員の利便に資した次で昭和三年には事務所を新築する等逐次發展を畫しつゝこの間幾多の波曲あり。且受難の業態も經過し現組合長網本彌吉氏が經營の衝に當る事となつたが以來氏は全責任を以て恪勤精勵し其事務的果斷決行は却て成績を擧げて居る。今や同組合に於て取扱ふ日用品の如き全島消費量の六割を占め然も生産物は常に組合に於て物價標準を立てゝ共同販賣に附するがかくて從來の如く中間者に暴利を取らしめず一方生産者には大なる利益を齎らして居る。

更らに同組合に於て特筆すべきは組合員に對して從前は一割現在も八分の利益配當を敢行してゐることで總會の如きも全員悉く出席し如上配當金と外に土産品を分配し諸報告講話等一日の交歡は組合精神の徹底に十二分の効果を擧げてゐる尚近き將來に於ては現在の精米所經營の上に更に電燈事業を經營すべき計畫もあるが同村は地勢上孤島の中にも同組合は組合員の生活の全部面に配意能勵しよく文化の機關として積

極的指導に當つて居る昭和六年度に於ける業績は稍難期でもあつたが昭和七年より果然好轉を示しその現況にも組合員三百二十二名、貯金拾貳萬貳千百參拾九圓、貸付金拾參萬九千百四拾壹圓準備金七千五百九拾九圓、特別積立金九千參百拾五圓に達し良績を示してゐる。現役員は左記の諸氏である。

組合長理事　網本彌吉
理事　西村鼎三
同　濱中澤太郎
同　濱口藤兵衛
同　南戸又四郎
監事　森本米太郎
同　藪口清次

## 弦打信用購買販賣利用組合

香川郡弦打信用購買販賣利用組合は明治四十三年七月一日弦打信用組合の名のもとに創設にして當時の同村長松野源八氏等は村内各戸を歴訪して組合の趣旨徹底に努力したが村民の福利のために遂には各戸の貧富に應じて戸數割賦課と同樣の率を以て持分を持たしむるの方法を以つて組織したのである。斯くして杉野氏は組合長に就任し組合員四百十九名、出資口數一千九十五口(一口出資金拾圓)を得て信用單營の事業を開始した。

爾來年と共に進展を示して大正九年に至り購買販賣部を新設して信用購買販賣生産組合と改稱し昭和三年更らに現在の如く信用購買販賣利用組合と名稱を改めて今日に至つてゐる昭和七年度末に於ける概況を擧げれば組合員數七百五十四口出資口數三千二百四十九口(一口十圓)貸付金拾八萬貳千九百貳圓、貯金拾六萬四千貳百四拾九圓、準備金壹千七百貳拾參圓、特別積立金貳千八百五拾五圓、購買部は肥料日用品の共同購入にして參萬五千參百五拾七圓の活況を示し農業倉庫も約壹千圓の收益をあげてゐる。現在の役員は左の諸氏である

組合長理事　大久保專太郎
理事　前田忠次
同　西谷健三



理事　諏訪喜太郎
同　英利喜三
監事　杉野源八
同　佐々木高榮
同　川崎一太郎

## 檀紙信用購買組合

香川郡檀紙信用購買組合は明治四十一年十二月三十日同村山下茂太、辻正三郎氏等の努力により創設組合員百五十五名出資口數三百口(一口二十圓)を得て信用及び購買兩部の事業を開始した。購買部事業は大正七年より休止の狀態にあつたが昭和五年創業二十周年に際して協議の結果再興した。斯して昭和五六兩年に亘つて各々五千圓の建築費を投じ第一第二倉庫(各七十坪)の二倉庫を建設して倉庫事業を創始し昭和七年四月には村内御廐に出張所を設けて加入者の利便を圖り着々業績をあげてゐる昭和七年度末に於ては組合員六百六十三名、出資口數八百六十口に達し貸付金貳拾萬圓貯金拾八萬七千圓、入庫米麥壹萬壹千俵を示すの活況にして、なほその信用部は貯金奬勵方法として三年間の月掛貯金及び兒童貯金に依り學童の貯蓄觀念を涵養する外組合員の出産の場合には出産祝として五拾錢記入の貯金帳を贈りそれを基本に貯金せしめるが如き方法もあり何れも好績をあげてゐる現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　田中誠太郎
理事　松本次平
同　谷崎貫三
同　岡崎達三郎
同　天雲芳太郎
監事　芦原義雄
同　井宮熊太郎
同　谷本義村

## 圓座村信用販賣購買利用組合

香川郡圓座村信用販賣購買利用組合は昭和四年十月二十五日の創立であるが同組合創立前同村にはすでに明治四十五年信用組合が設置されたが殆んど有名無實にして大正三年頃までは預金なく貸出のみ徒に多く解散にも等しき狀態となつてゐた茲に昭和四年同村宇喜多幸太郎、藤田彦一、藤田辰次氏等有志は村民必須の金融機關を死地より救出すべく又再興と面目一新を期して現組合を創設し更生的活動を開始した。

斯して昭和七年度末に於ける事業狀態は組合員五百名、出資口數一千二百十一口(一口拾圓)貯金五萬九千四百四拾九圓貸付金金四萬九千參拾八圓、準備金七百參拾圓、特別積立金壹千六百五拾六圓に達し昭和七年八月更に倉庫事業を開始し同年度に於ける取扱數も三千俵にのぼる盛況を示して更生の意氣も潑剌たるものがある尙現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　藤田辰次
專務理事　渡邊正義
理事　藤田彦一
理事　小倉伊三郎
同　宇喜多幸太郎
同　遠山良一
監事　下谷小太郎
同　大西彌太郎
同　藤谷喜平
同　藤井八重吉
同　丸尾文助

## 川岡村信用購販賣利用組合

川岡村信用購買販賣利用組合は大正七年三月六日同村の有志稻本元三郎氏等の奔走により創立した。然もその當初は村民の理解更になく利用者も寥々たるものであつたが役員の努力及び有力組合員の支持により漸次事業分量を增大し現在では組合員數二百五十五名、出資口數一千二百口を得て信用販



賣購買事業及び倉庫業を兼營し着々その業績を擧げてゐる昭和七年度末に於ける業態を見るに貸付金拾六萬參千圓、貯金拾七萬貳千圓、準備金四千六百九拾九圓、特別積立金貳萬圓示して居るが更に農業倉庫の入庫數は米二千二百五俵麥その他三千百俵に達しその別途積立金も參千九百參拾參圓を有し創設當時の利用者僅少に比較して近來は委托者續々の狀態にあり稻元氏はかつて縣會議員として活動せし人である。

尙現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　稻本元三郎
理事　井上米次
同　武内武次郎
同　穴吹兼助
同　穴吹道雄
同　佐藤縫治
同　小泉正太郎
監事　田中彌太郎
同　中田才藏
同　堀川忠一郎

## 川東村信用購買組合

川東村信用購買組合は大正十一年四月一日同村三好健治土居喜三郎氏等委員となり勸誘奔走の結果組合員六百三十九名出資口數一千百十口(一口拾圓)を得て信用部購買部の事業を開始した。爾來躍進を重ねて大正十五年には販賣部の事業を兼營するに至つたが目下購買部は申込者に對してのみ現金取引にて用を辨じ販賣は農會に委托して組合の主力を信用部の活用に集注してゐる。最近の業績は貸付金七萬三千圓、貯金八萬七千圓にして貯金は兒童貯金を奬勵する外青年訓練所入所より後修了に至るまで一定額の貯金を爲さしめてゐる。而して同組合は琴平銀行整理當時預金の大半が回收不能に陷り大打擊を受けて一時は解散の聲すら起つたが近年漸次舊態に復し發展の光明を見るに至つてゐる。因みに現役員の諸氏は左の通り。

組合長理事　淵田彌平
專務理事　吉本清治
理事　中村和七

理事　安川元吉
同　岡本龜太郎
同　鎌田正太郎
同　池田忠太郎
監事　池田萬
同　森孫太郎
同　藤川元三郎

## 池西村信用購買販賣利用組合

池西村信用購買販賣利用組合は明治四十五年二月當時の同村長妹尾彦六氏等の努力により創立を見たが爾來信用部の單營を以て進展し昭和六年に至つて初めて購買事業を開始し目下六十六坪の農業倉庫を建設中にして竣工の上には農村大衆に利用と便宜を與へるであらう。由來同村は政黨的關係より村民の組合利用に對する障壁が寄生して發展を阻害される感もあつたが最近に至つてこれは解消し村民の組合に對する理解正調して漸次業績を擧げてゐる。現在の事業概況は組合員三百名、出資口數一千二百口、貯金參萬六千圓貸付金七萬圓を示してゐる。尚現役員の諸氏は左の通りである。

組合長理事　藤田清八
專務理事　西原公一
理事　河西正慶
同　片山彌太郎
同　浪尾茂太郎
同　妹尾松太郎
監事　江郷正夫
同　齋藤保太郎
同　小早川善三郎

## 淺野信用購買販賣利用組合

淺野信用購買販賣利用組合は明治四十五年五月十五日の創



設であるが當時は未だ組合に對する村民の理解殆どなく僅に一部落が利用するのみであつた。この間にあつて當時の組合長武田準氏の令兄武田恪平氏は組合の發展成長に陰陽の人となり努力活躍し村民の理解利用を促進せしむる忍苦八年かくて其努力は空しからず大正八年一月一日組合員九十名、出資口數三百十四口(一口拾圓)を得て此處に初めて本格的に事業を開始するに至つた。爾來躍進を續け今や組合員三百五十六名、出資口數六百十九口に達してゐる購買販賣利用部の事業は未だその機能を發揮するに至らないが近き將來には活動を期待されて居る。

その最近に於ける概況としては貸付金八萬四千九百圓、貯金九萬七千八百圓、準備金五千八百貳拾四圓、特別積立金六千四百貳拾九圓を示し尚貯金の方法としては昭和八年度より開始せる納稅貯金負債整理貯金の外に從來初穗貯金、規約貯金家族貯金、團體貯金の各種に亘つて奬勵してゐるがその內他に類例なきは初穗貯金にしてこれは農作物の初出來を賣却する場合その一分以上を五ヶ年據置く貯蓄方法で勤儉農村の面目躍如たるものがある。現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　武田恪平
專務理事　松本直太
理事　津森之治
同　赤木龜太郎
監事　赤木長八
同　幸田與八郎
同　井下元一郎
同　平尾米太郎

## 大野村信用購買販賣利用組合

大野村信用購買販賣利用組合は昭和七年十二月廿日大野村一圓を區域として創設した出資金一口貳拾圓(七回拂)を以て昭和八年一月十八日第一回の拂込みを終了したが同組合はその組織を保證責任として一口貳拾圓の外にその一口の損害保證として更らに貳拾圓を積み立てることになつてゐるがこの堅實無比なる組合基礎は果然村民の信頼を集めて創立未だ日

淺きに拘らず組合員二百六十八名、口數七百十五口を得てゐる而して現在の事業狀況を見るに貸付貳千圓、貯金五千圓に達し貯金は家族貯金、兒童貯金に分つて村民の貯蓄觀念の涵養に努めてゐる。販賣部及び購買部の事業は未だ開始してゐない現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　芋坂四郎
專務理事　二川秀一
理事　二川肇
同　富田喜三郎
同　眞鍋清
同　中村繁太
同　宮脇鹿太郎
監事　長尾八郎
同　中村小三郎
同　生島松太郎

## 安原信用購買販賣利用組合

香川郡安原信用購買販賣利用組合は明治四十年四月二十三日同村々長藤澤又太郎、尾形多五郎氏等の努力により無限責任安原信用購買組合の名の下に創立を見たが當時の組合加入者は僅かに三十六人、出資口數七十六口、拂込總額百五十貳圓に過ぎず。從つてその事業狀態も貸付金七拾四圓貯金六拾圓、購買（肥料、鹽）五百五拾六圓といふ微々たるものであつたが逐年飛躍を遂げて大正九年五月十日名稱を信用購買生産組合と改め大正十二年度に於て更らに現在の如く安原信用購買販賣利用組合の名稱を冠し而して組合員數も三百四名、出資口數一千百九十口、出資總額九千七百六拾參圓、貸付金貳萬壹千圓、貯金參萬參千五百圓、購買高參百貳拾五圓利用（豆糟粉碎機購入利用）百圓の躍進數字を示すに至つた。現在に於ては販賣利用部は活動を中止してゐるが尙貸付金八萬四千圓、貯金拾萬六千圓、購買高貳千貳百圓に達し昭和八年度より五ヶ年計劃の下に學童貯金團體貯金愛育貯金出産貯金を設けて貯蓄勤儉の實踐に拍車を打ち更らに全村民をして悉く組合に加入せしめ出資額をも現在に倍加せしむべく又事務所、農業倉庫の新築販賣利用部の開設等進取的方針の下に邁進して居るがその時代的意氣は當るべからざるものがある。



因みに現役員の諸氏は左の通りである。

組合長理事　小谷勇
理事　中將幸太郎
同　松浦藤五郎
同　大澤參四郎
同　藤澤菊次
監事　山本才一郎
同　上原正彦
同　森佐次郎

## 岩部信用組合

香川郡鹽之江村岩部信用組合は大正十年八月の創立である

その最初は信用部の單營を以て進み而て業況も貸付金貳千圓貯金參千圓程度の微々たるものであつたが昭和三年以來漸次發展を遂げ現在に於ては組合員百四十四名出資口數三百九十六口（一口拾圓）に對する貸付金參萬貳千圓、貯金四萬五千圓積立金七千圓に達し組合資産の膨脹と共に出資も一口貳拾六圓に相當するの活況を示してゐる。斯くの如く同組合は特に形式主義を排して實質本位を以て進み從つて冗費の節減には絶えず腐心し事務所の如きも組合長の宅に置き役員自ら事務を處理するの質實振りである。現在の役員は左の諸氏である

理事長　桐谷友吉
理事　藤澤唯七
同　藤澤新一
同　川田忠實
監事　藤澤寛一
同　大西万英
同　辻藤丸

## 安原上西信用購買組合

安原上西信用購買組合は明治四十五年七月六日の創設組合員五十五名、出資口數九十八口(一口拾圓)を得て先づ信用單營にて事業を開始した、その初期に於ける貸付金の如きは四百八拾圓貯金は貳百八拾八圓の微々たるものであつた大正十年購買部を兼營今日に至つてゐるがこの間に於て零平銀行の閉鎖により與へられた損害は實に多大なるのみならず組合員に極めて惡印象を刻ませ中には信用組合に惡感を抱くものすら續出し其少時は利用者も漸減を呈する業況であつたが現役員諸氏の異常なる努力に漸次信用を回復し近來は頓に業績を擧げて居る。

而して同組合の現況を見るに組合員數二百九十七名、出資金五千百七拾圓、貸付金壹萬八千七百九拾六圓、貯金貳萬四千九百八拾壹圓、準備金壹千參拾七圓、特別積立金八拾九圓購買部は未だ充分利用されずたゞ申込者に限つて肥料の委托購買と及び石油、地下足袋の購入位に止まりその手數料四百拾貳圓を計上されて居る。因みに現役員は左の諸氏である。

組合長理事　藤澤憲正
理事　和田茂
同　西原剛太郎
監事　藤澤恒八
同　藤澤保平



綾歌郡

## 坂出信用組合

坂出信用組合は昭和三年七月二日同町々會議員商工會役員等の主唱により御大典記念事業として創設し組合員五百四十名、出資口數四千百二十二口(一口二十圓)を得て同年九月五日事業を開始したのである。當初は津島商事會社内に事務所を置いたが其の後安田銀行跡に移轉するに及んで本格的活動に入つた。

而も同地は新興の活氣横溢し既に各種の金融機關あり從つて創業當初に於ける同組合の歩行は勤々艱難を極めたが組合幹部諸氏の異常なる努力は漸次酬はれて理解利用は年と共に加はり昭和七年度よりは七歩の利益配當を爲し得るに至つた

創設日尚淺き同組合がこの躍進振りは刮目にも價するものがあつて殊にその内部の整備に至つては各組合銀行等の長所を選採して一糸亂れざるものあり。夙に當局より模範事務狀態を激賞された程である。昭和七年度末の事業狀態は組合員數八百六十三名、出資口數五千三百八十七口、現組合員貯金參拾貳萬六百六拾八圓、家族貯金參拾六萬九千九百七拾壹圓休貯金六萬參千七百六拾八圓、組合員外貯金參萬六千參百拾四圓、貸付金約七十萬圓、準備金八千三百四拾九圓、特別積立金貳千圓に達し見るべき成績でもある。

尚現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　津島太郎
專務理事　須崎角太郎
理事　亀井岩太郎
同　野口專次
同　西川馨
同　木田惣助
同　津島才助
監事　濱田六藏
同　高木清次郎
同　鎌田榮
顧問　鎌田勝太郎

## 宇多津信用利用組合

宇多津信用利用組合は同町久住俗平松山清平氏等設立委員となり大正十四年十月十八日創設し組合員四百十六名、出資口數一千四百九十六口を得て翌大正十五年五月七日より信用部の事業を開始しそれと同時に元財團法人農業倉庫二百坪を買收同事業を兼營した。爾來着々發展を示して現在に於ける組合員は八百二十二名、出資口數二千八百二十五口に達し貯金の如きも創設第一年度には僅々壹萬圓に過ぎざりしものを今や參拾壹萬圓に達し貸付金また拾參萬壹千貳百八拾八圓に及んでゐる。

然るに同地方有產階級の人々は未だ產業組合を理解する尠く銀行心酔の傾向にして爰に地方の發展繁榮を望む組合利用の如何は町大衆の心理に影響する所大なればと同組合幹部は特に此方面に組合利用を慫慂しつゝある。尙昭和七年度の事業概況を見るに貯金參拾壹萬五千圓、貸付金拾參萬壹千貳百八拾八圓、準備金五千九百八圓、特別積立金壹千四百五拾八圓に達し倉庫部の入庫米は六千俵に及んでゐる。現在の組合員は左記の諸氏である。

組合長理事　松山清平
理事　久住俗平
同　長尾騏
同　浮田俗二郎
同　豊島數造
監事　宮崎彌壽藏
同　川瀧芳平
同　加藤東平

## 端岡村信用購買販賣利用組合

綾歌郡端岡村には由來金融機關なく產業組合の設立は同村多年の宿望であつた時に千載一遇の　大正天皇御大典に際して最も有意なる記念事業とし且又年來の宿望を是非實現すべくして有志末澤潤吉、瀨尾嘉五郎氏等十五氏發起となり大正



二年三月三日端岡信用組合を創設した時の組合員三百五十名出資口數九百三十三口(一口十圓)を以つて事務所も同村大字新居に置き同月二十六日信用部單營の事業を創始した。爾來逐年進展を續け大正十年三月購買販賣利用部を新設し名稱を現在の如く端岡信用購買販賣利用組合と改め同十五年肥料並に養鷄飼料の販賣を開始し同年五月一日大字國分に出張所を設けて組合員の便宜に資し次いで昭和三年十二月には利用部の事業を開始し同年五月出張所を新築同六年一月更に驛前に事務所一棟及び倉庫一棟を新築して愈々業運の盛況を誇つたこゝに於て昭和八年創立二十周年を迎へば創設以來の功勞者末澤、瀨尾兩氏を表彰して組合の萬歲を祝福したのである。

昭和七年度末に於ける事業狀態を見るに組合員六百八十三名、出資口數一千二十四口、貸付金拾七萬參百九拾五圓、貯金貳拾四萬五千百六拾圓、準備金壹萬參千百貳拾圓、購買品賣却高參萬七千貳百貳拾八圓、利用料百貳拾五圓を示すの進展振りである。現在の役員は左記の諸氏である。

組合長理事　瀨尾嘉五郎
理事　末澤折市
同　末谷宗一
同　末澤虎三郎
同　末澤繁太郎
同　大川清
同　岡田玉吉
同　宮武峻
同　井上瀧三郎
監事　植松茂一郎
同　藤井秀三郎
同　中條恒太郎
同　大熊司馬二

## 山内信用購買販賣利用組合

綾歌郡山内村には明治三十年頃既に農村金融機關あり縣下に於けるこの種施設は先驅の部として活躍してゐたが大正二年不幸にして破綻を來たし解散の止むなきに至つた。其後村

内金融機關の再興は必然の要求として此處に同村松本熊藏、乃木正樹氏等の靈力により出資口數六百五十口(一口十圓)を得て大正十三年七月六日再び設立を見たもの卽ち現在の山内信用購買販賣利用組合である。

前身組合の破綻に先入的恐怖症に陥せし一部村民は依然これに共鳴せずためにこの新興組合を理解せしむるの努力は異常であつた。卽ち役員或ひは事務員自ら戸別に訪問し、力說するの狀勢にして斯くして順次理解する者はこれを入れつゝかくて金解禁後農作物或ひは諸副業品の暴落に各農村は疲弊を感じた此一般の情勢に產業組合の利用意識を更生して組合の事業分量は年と共に增加し著しき進境を示したのである。

然して昭和七年度に於ては組合員數五百十二名、出資口數九百六十一口、貯金四萬八千四百七拾圓、貸付金四萬參千八百五拾七圓、準備金壹千九百參拾六圓、特別積立金貳千六百拾四圓を計示するに至つた。現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　福井虎三郎
專務理事　野上正樹
理事　松本熊藏
理事　中西孫慶
監事　平尾正平
同　兎子尾長八
同　津川彦一

## 陶信用購買販賣利用組合

陶信用購買販賣利用組合は明治三十九年十月の創立であつて信用部單營のもとに事業を開始したが以來村民の金融硬塞は一掃され組合禮讚の聲は大いに揚つた。斯くて大正七年四月農業倉庫を經營し大正八年五月には更らに購買販賣生產事業を新設また組合員の主要副業たる麥稈眞田の販賣の合理化を目的として同年八月麥稈眞田販賣斡旋を開始した。又翌大正九年十月には更らに米麥の加工を目的とする精穀其の他の利用事業を開始、大正十一年一月二十六日に至り現在の如く有限責任陶信用購買販賣利用組合と改稱した。



斯くてその活躍は愈々速度を加へ同年四月には葬具の利用同六月には鹽の購買を開始、大正十四年七月には揚水喞筒の利用昭和四年六月繭委託販賣を開始する等眼覺しき進展は積き組合員の信賴を集中して各事業とも逐年その量を增加し鄙く業績を誇つたのである。

この良績に大正十三年四月十四日成績優良の廉で產業組合中央會より表彰されたがこれ全く村民一同の理解協力に基く發展にして祝福すべき農村風景ではある。尙この外同組合では最近電氣モーターサイレンを設備して正確なる時刻を村民に報じ時間嚴守の美風を涵養に努め又罹災組合員には罹災貸付規定を設け救難の實を擧げてゐる等は他組合に類例少き好事例である。その最近の事業動態に於ても組合員八百二十六名出資口數一千四百五十五口、貯金貳拾七萬六百拾四圓、貸付金拾九萬六千七百貳拾壹圓、準備金及び各種積立金五萬壹千四百四拾七圓、購買品賣却高四萬壹千四百六圓、販賣高九萬五千百貳拾五圓、利用高參千五百參拾貳圓、農業倉庫收入壹千四百參拾七圓の盛況はこれ縣下有力組合の面目であらう

因みに現在の役員は左記の諸氏である。

組合長理事　細谷關雄
理事　新名太樓
同　細川八太郎
同　牧野又八
同　上田忠次郎
同　福家傳
監事　溝緣勳太郎
同　福家重二郎
同　栗林茂夫

## 千疋信用購買販賣組合

昭和村千疋信用購買販賣組合は千疋、畑田二村合併前大正七年六月十二日當時の千疋村一圓を區域として創設、小田伊三郎氏組合長に就任し組合員二百十五名、出資口數七百七十九名(一口二十圓)を以て信用單營の事業を開始し更らに大正十一年購買販賣部及農業倉庫を兼營しつゝ逐年業績を改め今

日に至つてゐる。今や保證責任の基本制度も整へ昭和七年度末に於ては組合員二百三十八名、出資口數八百七十八口、貸付金八萬七百貳拾參圓、貯金六萬九千五拾五圓、購買部參萬圓、利用部八百九拾貳圓、農業倉庫入庫米貳千百七十四俵、小麥一千五百九十三俵の數字を示し特に貯金奬勵方法として特異的收穫貯金あり農家に適切にして好成績を擧げてゐる現在の役員は左の諸氏である。

組合長　小田伊三郎
專務理事　澤田雅義
理事　小川久間太
同　石丸芳太郎
同　三好嘉市
同　角福太郎
監事　宮脇次之
同　加藤治太郎
同　大野憲枝

## 山田信用組合

綾歌郡山田村は同郡の東南部に位置し東西一里二十丁南北二里人口四千百八十餘人を有する純農村にして村民は自作農多く夙に勤儉の美風の誇るべきがあつた。然るにかつての時村内に金融機關なく特に中產以下の者は他市町民の賴母子講に依るを唯一の金融方法としこの爲めに好まざる現象にも村内の耕地は漸次他町村民の所有に歸しつゝあつた。

此處に於て村内有志福田薫、桑島康三、岩瀨辰三郎、山田利平太、桑島傳等の諸氏は共に感ずる所あり產業組合を組織して低利資金供給の途を講ずるに若かずとなしその創設勸誘に奔走の結果加入者三百二十九名の多きにも達したれば爰に明治三十九年十月十五日初めて山田信用組合として村民歡呼裡に創設を見たのである。

斯くして金融は勿論肥料の共同購入溜池の修繕等着々業績をあげ組合の發展は年次飛躍々進を續けた。その資產は今や參拾六萬參千八百餘圓に達する盛況にして特に同組合は相互相助に對する組合意識は最も徹底し加入者の慶弔には夫々相



當の金員を贈りまた七十歳以上の高齡に達したる組合員或ひは奉公人中五ヶ年勤續者には賞狀並に金品を贈つて是を表彰する等社會的美風の振作に努め益々村民の信賴を厚くしてゐる。最近に於ける事業概況は組合員數五百八十七人、出資口數一千百二十二口、拂込濟出資金壹萬壹千貳百貳拾圓、各種積立金參萬四千七百八拾貳圓、貸付金六萬九千五百四拾壹圓貯金拾四萬八千六百貳拾八圓の巨數を以て組合幹部の努力と村民の協力を高揚して居る。現在の役員は左の諸氏である。

組合長　岡田榮
理事　山田鹿太
同　福田薫
同　桑島傳
同　岩瀨一太
同　桑島幸七
監事　金瀧兼三郎
同　山地勘平
同　高尾桂吾

## 瀧宮信用購買販賣利用組合

瀧宮信用購買販賣利用組合は大正二年六月六日に創立し三井延次郎氏組合長に就任組合員四百六十七名、出資口數一千百七十三名を得て信用部單營の下に事業を開始したがさらに大正八年一月購買販賣部を兼營同時に農業倉庫も開始した。現在の貸付金四萬貳千參百拾五圓、貯金參萬拾壹圓、購買部參千七百圓の數字を示してゐるが同組合は大正十四年より昭和二年度まで貸付金回收不能となり事業を停止の苦境に立つた其後昭和三年有志岡田中央、鹽田定一氏等の努力により再興し貸付金の回收に努めると共に役員を初め組合員協力自力更生に邁進の結果昭和七年末倉庫一棟七十五坪七千圓を投じて新築し又事務所を併築する等捲土重來の意氣を以つて精進を續け殊に購買品の如きも一切現金主義を以て一錢の貸付もせず現金ならねば安價なる品は手に入らずとのモットーを强調し此觀念を涵養に努めて居るが組合員またよく組合の精神と內情を理解して復興の氣運は勃々と漲るの快調にある。尙現在の役員は左の諸氏である。

組合長　岡田中央
専務理事　松岡誠
理事　鹽田定一
同　岡田又八
同　辰巳久茂
同　山下嘉平
同　横山信重
同　中井彌三郎
同　乙武康次
同　大門隆道
同　大林和次郎
同　中尾喜三郎
監事　津村義信
同　松永卓榮
同　井上雪次
同　久保善七

## 枌所村信用購買販賣組合

綾歌郡枌所村枌所信用購買販賣組合は村内中小産者の産業及び經濟の發達を企圖し生活の安定をモットーとして大正九年十二月二十日設立した。爾來村民の組合に對する理解は逐年徹し常に自己の組合といふ觀念の下に絶對的信頼を以て組合を讃仰して今や同村に於ける最も重要なる金融機關の要務を果して居るその準備金の如きも出資總額以上に達する盛況にして現在の加入者(一口出資金十圓)口數は七百口、出資總額拂込濟六千七百圓、貯金參萬七千參拾貳圓、貸付四萬貳千七百圓、共同購買貳千六拾圓販賣貳千圓の業績を擧げてゐる特に同組合は貯金奬勵方法として定額月掛貯金、收穫貯金及び學童貯金を設け月掛貯金は各部落毎に小組合長が集金して組合に納め收穫貯金は米麥蠶の收入額一割を收穫の都度積立て居る更らに學童貯金は各入學の際入學祝として貳拾錢記入の通帳を贈り逐次貯蓄せしめて卒業までは引出しを禁ずる方法であるが何れも好成績を擧げてゐる。因みに現役員は左の諸氏である。



代表理事　松岡正忠
理事　小比賀清忠
同　松原永次郎
同　松原宗太郎
同　湯淺祇一
監事　小谷原一
同　小谷岩八
同　西山嘉藤次
同　龜山忠敬
同　龜山平五郎

## 富熊村信用購買販賣利用組合

綾歌郡富熊信用購買販賣利用組合は昭和三年十一月十一日同村原岡仙八氏等の努力により富熊信用組合の名稱を以て創設し信用部單營にて同村重要金融機關たるその使命を遂行しつゝ昭和六年十一月に販賣購買利用部を新設して現在の名稱に改稱し今日に至つてゐる而して今や組合員三百二十名出資口數五百九十口(一口十圓)に及びその加入率は全村戸數の約八割にも相當し創業日尚淺きに拘らず業績は見るべきものである。

昭和七年末の組合概況にも貯金六萬貳千圓貸付金參萬五千圓、購買高(主として肥料及雜貨)貳千圓、積立金貳千參百圓に達するの勢況である。現役員は左の諸氏である。

組合長理事　原岡永江
理事　三井豊吉
同　松井亮平
同　眞鍋勘三郎
同　佐藤巌義
同　香川榮太郎
監事　岩崎孝太郎
同　淺田佐太郎

## 栗熊村信用組合

綾歌郡栗熊村には大正の末頃まで綾歌銀行の支店あり又琴平銀行支店もあつて村民の金融を掌つて居た。然るに其後兩支店とも合併又は破産のため村内より退散し村民は金融的苦惱を感ずるに及んで同村有志宮本長四郎氏等奔走努力の結果昭和四年五月創設された金融機關こそ即ち同信用組合である

爾來信用部單營の下に、組合員四百七十名、出資口數一千口（一口十圓）を擁して事業を開始し今日に至つてゐるが最近の業態は組合員五百十二名、貯金五萬參千六百六拾五圓、貸付貳萬七千六百八拾圓、積立金千四百圓に達し貯金は定期及び普通貯金の二種類の外に學童貯金等大いに貯蓄を奬勵してゐる。而して販賣部購買部の新設も多年の宿題であるがこれも近く實現の機運にある。現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　宮本長四郎
理事　片岡良弼
同　安部条次
同　長尾三次
同　虫本茂樹
同　小島卓
同　小島愛助
同　川池勇次
同　大林彌三郎
同　長尾清太郎
同　熊谷貞一郎
監事　津村三四郎
同　鈴井新五郎
同　内海米三郎

## 羽床上信用組合

綾歌郡羽床上信用組合は大正八年十二月三日に創設されたがこれより先同村芋坂貞吉、河田壽次郎、田岡松太郎等の諸



氏は夙に産業組合法による村内金融機關の設立を期して村民に勸說の結果遂に同組合の創立とはなつたのである。

爾來堅實主義を以て産業理想鄕建設への一路を精進し現在に於ては一口資金五拾圓、出資口數九百二十二口、出資金四萬六千圓、貸付金拾萬五千九百五拾壹圓、貯金拾參萬五百拾參圓に達してゐる。而もその間にあつて琴平銀行破綻當時四萬參千餘圓の損失災厄を受けたが然し當時の組合長は此難局に善處經營もよくその大受難を自力更生に求めて只管脫却挽回に努むれば斯の不測の大損も今は殘り尠く償却を了せし狀態にして間もなくその全部を解消して光明の途に出づるも遠くはあるまい。尚現在の役員諸氏は左の通りである。

理事　芋坂和夫
同　田岡松太郎
同　河田壽次郎
同　尾崎忠孝
同　高橋榮
同　田岡雄次郎
監事　小早川岩次郎
同　津村永五郎
同　寺島揚次郎

## 羽床村信用購買販賣生産組合

羽床村信用購買販賣生産組合は大正十年五月の創立であつて同村木村茂一郎氏組合長に就任信用部單營のもとに事業を開始し爾來進展を續けてゐたがその途次琴平銀行破産の巨擊を受け不測も一大暗礁に乗り上げたが現組合長小林茂一郎氏等は犧牲的必死の努力を傾注し年と共にその損失を補塡抹消しつゝ今や將來への飛躍を目して待機の姿勢に到達し信用部に全力を集注して活躍しつゝある其昭和七年末に於ける業況にも組合員百八十九名、出資口數四百六十七口、貸付金六千九百壹圓、貯金七千五百七圓準備金壹千九百六拾五圓の概況を示すに至つた。尚現役員は左の諸氏である。

組合長理事　小林茂一郎
理事　岡川巖
同　眞鍋澤太郎
同　宮武文一
同　長尾恒三郎

理事長　尾助八
監事　竹内次郎平
同　長尾雛次
同　津村覺太郎

## 岡田村信用購買販賣利用組合

綾歌郡岡田村信用購買販賣利用組合は明治四十年八月五日現在の組合長木村榮吉氏等の主唱により同村一圓を區域として岡田信用組合の名稱のもとに創立し組合員三百名、出資口數七百口（一口十圓）を得て信用部單營の事業を開始した。

爾來逐年躍進を重ねて昭和三年十二月には購買販賣部の新營を劃し同四年一月事業を開始して着々實蹟を擧げ更らに同六年十一月農業倉庫の經營をも創始したが最近には利用事業をも始め精米所を設備して組合員多年の宿望を滿し又肥料の配給統制に當るべく目下倉庫の新築に着手してゐる。而して同組合の沿革中異色とすべきは大正六年に於て減資を斷行しこれも拂込出資金一口十圓のうち組合資産中より九圓を拂戻し一口の出資一圓とはしたのである。この英斷は出資者組合員をして同組合の本質を知らしむるに充分であつた。

斯くして同組合は今や組合員六百六十五名、出資口數一千四百六十五口を擁しその業績も昭和七年度末に於ては貸付金四萬六千六百五拾六圓、貯金五萬參千七百十五圓、積立金壹萬壹千九百五拾七圓、販賣高壹千八百四拾四圓、購買高壹萬九千八百貳拾六圓を示し貸付は主として肥料農具購入、土地購入、家政整理、營業資金として貸出してゐるがこの成績を一見して本縣政界の巨頭たる組合長木村氏の面目躍如たるものがあらう。因みに現役員は左の諸氏である。

組合長理事　木村榮吉
理事　鴨居一義
同　村山裁介
同　小谷又八
同　細谷佐門之助
同　井原孫市
監事　佐野多四郎
同　古市正



## 法勲寺信用購買販賣利用組合

綾歌郡法勲寺信用購買販賣利用組合は大正七年七月十五日當時の同村長吉馴義信氏等の奔走により創立し組合員三百九十五名、出資口數八百口（一口十圓）を得て信用單營を以つて事業を開始した。斯くて年と共にその業績は向上し昭和元年十二月には購買販賣部を新設更に元中國銀行支店倉庫一棟七十五坪を購入農倉を兼營する等組合の業務は順次擴充しつゝ昭和七年二月一日新事務所構築なつてこゝに移轉し總ての陣容は一新された。

而して昭和七年末には組合員四百五十三名、出資口數八百三十四口（一口十圓）に増加するに至つたが、その事業動態を見るに貸付金六萬五千圓、貯金九萬五千圓、購買高壹萬四千、圓諸積立金壹萬六千餘圓を示してゐるこの貯金中最も異なるものは在鄕軍人貯金にしてこれは國家に一朝有事の際出征費用に充てるため平素より積み立てる用意金にしてその性質上分會長の許可を得ない限りはその引き出すことを禁じてゐるこの如き他に類を見ざる用意の高貴にして時節柄注目に値するものである。因みに同組合の現役員は左の諸氏である。

組合長理事　平井七五三八
專務理事　吉馴敏男
理事　河村猪久五郎
同　香川房太郎
同　吉馴秀雄
同　增田勘太郎
同　宮武甚五郎
同　綾野宗藏
同　河内寛
監事　福井喜三太
同　三原新太郎
同　新居伊三太

# 飯野村信用購買販賣利用組合

飯野村信用購買販賣利用組合は大正十二年の創設であるがこれよりさき明治四十三年同村には信用組合あり經營しつゝあつたが大正八年に至り四圍の情勢に依つて一先づこれを解散した。其後更に構圖を改めること五年、大正十二年に至つて當時の村長野田仲四郎、横田歌次、宮島甚五郎氏等有志の努力により再興したのが現組合にして、當初は野田氏組合長に就任信用部單營のもとに事業を開始し昭和四年三月より購買販賣部を兼營現在の如く名稱を改め更らに翌五年五十坪の農業倉庫を建設業務を開始し今日に至つてゐる。然るにこの倉庫新設に當つて物議騒然たるものあり、こゝに幹事は毀譽褒貶を外に敢然實施せしに業績意外に擧り遂には設備の狹溢を感ずるに至つた。其好績には嘆賞の外なく更に五十五坪の倉庫を增設するの盛況を示した。

かくて野田氏は創設以來同組合の功勞者として敬慕されつゝ老境に達してこの程退任目下は横田理事を中心に農村自力更生をモットーに甲斐々しく組合夫其本據として一切を指導し助成に努めて居る。尙現在に於ける概況は組合員五百五十七名。出資口數一千百三十七口、無擔保貸付金參萬六千七拾五圓、擔保貸付金貳萬參千五百拾圓、組合員當座貯金壹萬壹千貳百七圓、家族當座貯金六千六百貳拾圓、團体當座貯金四千七百七拾五圓、兒童當座貯金壹千參百五拾參圓、約束貯金參百拾四圓、組合員外貯金貳萬六千百五拾五圓、家族定期貯金貳萬貳千八百八拾四圓、月掛貯金四千五百四拾七圓、團体定期貯金五千貳百參拾參圓、週間貯金壹萬四千四百參拾六圓準備金及び積立金四千九百七拾七圓、販賣高貳千九百六拾四圓、購買品賣却高壹萬五千百貳拾參圓、利用料貳百四拾七圓等の華やかなる內容を見せつゝ更に邁進して居る。現在の役員は左記の諸氏である。

理事　横田淺太郎
同　宮島甚五郎
同　松永友義
同　都築小平
同　大畑六助
同　平野千太郎
監事　眞鍋澤造



# 府中信用購買販賣利用組合

府中信用購買販賣利用組合は同村有志藤尾龜三郎氏創立委員長となり大正十年四月廿九日創設し組合員三百四十人、出資口數六百八十四口を得て事業を開始した。爾來好調裡に進展してゐたが昭和五年不祥事件起り一時は正に破滅に瀕したも役員の努力と組合員の理解により更生し理事飛谷榮、平田三郎の兩氏は專ら實務に携り日夜寢食を忘れて組合に獻身奉仕してこの難面を打開し今日では着々業礎を堅め躍進しつゝある。その昭和七年度末に於ける概況は組合員四百四十九名出資口數七百九十六口、貸付金八萬參千貳百圓、貯金八萬八千七百九拾貳圓準備金壹千七百貳拾參圓、特別積立金參百五拾五圓、購買品賣却高貳千七百八拾參圓を示して居る。現役員は左の通り。

組合長理事　藤井龜三郎
理事　飛谷榮
同　平田三郎
同　池浦恒次
同　栗林次郎七
同　谷本雪次
同　松本惣市
同　荒井充
監事　石井虎助
同　尾崎利平
同　橋本沛
監事　田邊一美
同　山西岩太
同　宮本正一
同　中尾駒一

## 加茂村信用購買販賣利用組合

加茂村信用購買販賣利用組合は明治四十二年四月二十一日同村河合七郎、河合休市氏等に依つて創設し組合員二百五十八名、出資口數六百三十口を以て事業を開始した。爾來廿有五年間終始一貫堅實主義を本領として邁進し村民の組合に對する信用信頼を蒐めた。殊に現組合長河合七郎氏は創立以來の功勞者にして更らに同村々長として組合員の敬慕を一身に集めてゐるが同村は戸數僅かに三百九十餘戸の小村落にもかゝはらず昭和七年度末に於いてはその組合員三百九十二人、出資口數九百九十六口、貯金拾參萬四千百八拾壹圓、貸付金九萬四千貳百八拾六圓、準備金壹萬五千貳百圓、特別積立金九千八百八拾壹圓、購買高壹千五百九拾四圓、販賣高壹千六百九圓の好成績を示し殆んど全村殘らず組合員たるの盛況はこれ同組合の誇る實体を表示して居るものである。

尚現在の役員は左記の諸氏である。

組合長理事　河合七郎
理事　井上芳三郎
理事　池下雪太郎
同　堀市郎
同　末包克興
監事　加門實次
同　上居勇七
同　大美嘉四郎

## 松山村信用購買販賣組合

近時村勢産業の發達に因つて知られる綾歌郡松山村は東西一里二十町南北二里十町北部は瀬戸内海に面し地味肥沃にして耕作には適するも戸數八百戸に對し耕地餘りに尠くさきには農家の疲弊共の極に達せんとした。而してこれを見た三野伊三郎氏は村内有志と金融機關の必要を語らひかくて勤儉貯蓄の奬勵及び肥料の共同購入に便せん事を期し遂に明治三十二年六月松山村信用組合を創立したのである。



而して其後同三十四年八月之を松山産業株式會社に組織を變更したが更に大正三年四月松山産業株式會社を松山銀行と改稱すると同時に別個産業組合法に依る有限責任松山村信用購買販賣生産組合を創設し業務を開始したのであるが、爾來躍進を續けて最近の組合員數は七百五名、出資金貳萬五千五百圓拂込濟出資金貳萬壹千四百貳拾圓、借入金五萬七千九百貳拾五圓、各種積立金貳萬五千八百五拾貳圓、貸付金貳拾壹萬五千貳百七拾五圓、貯金拾七萬壹千七百七拾壹圓、購買高四萬五千四百九圓、販賣高九百拾五圓利用料貳百七拾九圓を示し其役員も左の諸氏である。

組合長　三野伊三郎
理事　福井正三郎
同　松浦開二
同　保井長義
同　松浦伊平
同　福家留七
監事　杉野政太郎
同　川西久吉
同　河合半四郎

## 王越村信用購買販賣組合

王越村信用購買販賣組合は大正十二年同村北山伊勢松、大和藤太郎、都崎六太郎、田畑卯次郎の諸氏創立委員となり全村歡呼裡に事業を開始したが同村は綾歌郡の最北端に位し由來金融機關等更になく常に不便を喞たれて居たが前記諸氏の發心に同組合結成さるゝや村民の貯蓄の關心は翕然として此處に集り村内金融の窮通機關とはなつた。殊に同地方は早くより山林を開拓され各種の果樹欝蒼として繁茂し又除虫菊、煙草等各種生産多くまた海岸線には漁業、船舶業、鹽田業者あり。豊富なる生産を擁すする産業村に於て同組合の發展は素より目覺ましく異常の好成績を擧げた。

創立功勞者北山伊勢松氏は多年同組合長として盡瘁し信望を集めてゐたが昭和六年逝去し其後長男貞市氏後を繼いで嚴父に劣らざる名組合長の譽れを得てゐる。昭和七年度末の事業動態は組合員五百人、出資口數七百九十九口、貯金拾壹萬五千四百拾貳圓、貸付金七萬參千參拾壹圓、準備金五千六百七圓、特別積立金六千九拾參圓を示して赫々たるものがある

現役員は左の諸氏である。

組合長理事　北山貞市
理事　大和藤太郎
同　田畑卯次郎
同　都崎六太郎
同　仲濱吉
同　下津藤吉
監事　先崎三吉
同　西脇長八

## 林田信用購買販賣組合

林田信用購買販賣組合は林田村一圓を區域として大正十一年四月五日同村福家善助、猪熊善次郎氏等の努力を集中して創設し組合員五百二十五人、出資口數一千六百二十八口を得て事業を開始したが同村には明治四十年ごろより產業組合あり大正十年不幸解散せしその後とて前組合に對する村民の不信任未だ失せやらず新組合の前途に對する危惧は依然たるものがあつたが現理事福家氏等これが創設は時代の要求なりとして一途に邁進し堅實主義を高唱して勸說せば遂にその實現を見たのである以來着々業礎を固め大正十五年には倉庫部を開始しあるひは同村字東梶に出張所を新設して遠隔組合員の利便を圖り更らに購買販賣部を兼營し組合員の生活必需品の安價購入と生產品の高價販賣の斡旋をつとめた。

かくては必然同組合の信用革まりこれを援用して業績は驚異的發展を遂ぐるに至つた。この業績にして昭和七年度には本縣產業組合聯合會より優良組合として表彰されたのである次で同年六月には約壹萬圓の工費を投じて洋館事務所を新築し村の近代美を一堂に集むるの觀を呈すれば昨日まで遠さかり居りし村民の一部も今日にしては組合及その幹部を讃仰措かざる心境の變化を來し愈よ全村一致の機關とはなつた。

而して昭和七年度の業況にしても組合員六百八十四名、出資口數一千六百五十口、貯金貳拾八萬五千七百六拾五圓、貸付金貳拾參萬壹千貳拾參圓、購買高四萬百貳拾參圓、販賣高貳萬四百七圓、利用部參百五拾壹圓、農業倉庫八百六圓、準備



金壹萬貳千六百貳拾貳圓、特別積立金貳千九百七十圓の活況にあるが同組合の現況を眺めて經營の巧拙こそその一切を解決の關鍵たるを知るものである。尙現役員は左の諸氏である

專務理事　福家善助
理事　松浦和喜之進
同　中川精逸
同　濱崎嘉一
同　猪熊善次郎
監事　熊本甚六
同　石明明
同　川井和太次
同　松浦太次郎
同　吉田嘉藤太

## 西庄信用組合

綾歌郡西庄信用組合は昭和三年六月二十八日西庄村一圓を區域として同村本條光男氏等創立委員となりその創設を見たが同村は縣下に於ける最小の村であつて組合への理解者多く設立と共に組合員百十四名、出資口數二百三十五口を得て信用單營の事業を開始した。次いで昭和四年倉庫及び事務所を新築し昭和五年度より更らに販賣購買部を兼營して今日に至つてゐる。

現在組合員百七十三名、出資口數三百三口、貸付金貳萬五百拾六圓、貯金參萬壹千八百四拾圓、準備金及び各種積立金壹萬壹千圓、販賣高九千九百五十七圓、購買高壹萬貳千七百貳拾六圓を示し爰には全村一致渾然たる光景が點綴されて居る。尙現役員は左記の諸氏である。

組合長理事　本條光男
理事　井上駒男
同　山田阿吉
同　竹內金太郎
同　出田隆一
同　西井正吉
同　西井源太郎
同　富田丹三郎
監事　本條重太郎
同　猪熊正義

# 川西村産業組合

川西村産業組合は明治四十五年十一月五日同村倉井房義氏が中心となり創立し組合長には同村香川擔太郎氏專務理事に倉井氏就任組合員三百名、出資口數五百口を得て事業を開始した。爾來躍進を重ねて大正九年に至るや組合員四百五十人出資口數一千口に達し倉井氏組合長に就任、同時に購買販賣利用部及び農業倉庫を新設して本格的活躍に移つた。昭和二年倉井組合長逝去の後現組合長岩崎義三郎氏その後を享けて今日に至つてゐるが創設以來二十餘年に亘る同組合の業史には一點の汚穢なく終始常に堅實なる足跡を殘し組合員の信頼も年と共に强化して昭和七年末に於ては組合員數四百九十一名出資口數一千口貯金七萬四千八百九拾壹圓、貸付金八萬七千七百六拾九圓、準備金壹萬壹千九百五拾圓、特別積立金壹千九百五拾圓、購買部賣却高壹萬五千八百參拾貳圓の盛況に到達し更に一層の躍進を期して居る。尙現在の役員は左記の諸氏である。

組合長理事　岩崎義三郎
理事　香川嘉臣
同　草薙芳太郎
同　宮脇輝元
同　鷲岡保弘
監事　近藤和吉
同　岩崎亟平
同　大平健之助

# 川津信用購買販賣利用組合

川津信用購買販賣利用組合は明治四十年五月二十五日同村中西孫太郎、中井六三郎、奈良國次氏等發起となり創設し中井氏組合長に就任して組合員二百二十八名、出資口數七百五十二口(一口十圓)を得て事業を開始した。而して其拂込方法は最初一口に付き一圓宛を拂込み以後は剩餘金を以つて充當する外毎月一口に付き二十錢を徴收するといふ最も簡易にして



組合細胞本位の方法を採つた。爾來約三十年に亘る長歲月を幾多の業績を記錄しつゝ今日の盛況に至つてゐるが現組合長佐藤忠治郎氏は昭和七年五月就任しその才幹を揮つて組合員の信望を一身に集め役員諸氏また熱誠事に當り昭和七年には現在の事務所及び農業倉庫を新築して飛躍發展を劃した昭和七年末に於ける事業狀態も組合員四百十名、出資口數七百五十二口、貯金拾參萬四千五百八拾九圓、貸付金九萬貳千四百七拾八圓、準備金貳萬壹千貳百七拾貳圓、特別積立金貳千百四圓、購買高壹萬參千貳百六拾六圓の驚異すべき數字はその內容を語るものである。現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　佐藤忠次郎
理事　村井友八
同　藤本大八
同　岡重緣
同　中西政七
監事　宮本旋一
同　中井稔

# 西分信用購買販賣利用組合

西分信用購買販賣利用組合は明治四十五年四月十三日の創設にして同村南可員氏組合長に就任組合員百五十九名、出資口數五百口(一口十圓)を得て信用單營の事業を開始した。爾來年と共に進展し大正十年一月現在の如く購買販賣利用部を兼營して今日に及んでゐるがその昭和七年度の事業動態に於ても貯金四萬五千百七拾圓、貸付金四萬九千七百七拾四圓、購買品賣却高貳千四拾九圓を示してゐる。尙現役員は左記の諸氏である。

組合長理事　芋坂昌
理事　細谷勝雄
同　細谷彦市
同　南貫一
同　毛利杉次
同　三島虎一
同　篠原且美
同　岡田淺次郎

# 坂本村産業組合

理事　西部兼次
監事　森田政太郎
同　上原岩八
同　稲毛谷次
同　杉原鼎

坂本村産業組合は明治四十年六月の創設にして平尾喜惣次氏は組合長に就任し五百三十四口（一口十圓年二回一圓宛拂込）を得て信用部單營の事業を開始した。爾來順調なる發達を遂げつゝ大正九年購買販賣部を新設昭和三年八月倉庫業を開始し目下米二千二百俵麥一千二百俵を收納してゐるが組合員には倉庫利用料を特別割引の恩典を附與してゐる。現組合長佐藤清三郎氏は昭和三年就任、專務理事眞鍋勝氏等と共に産業組合主義を高唱して啓導的奮闘を續けてゐるが前組合長小林磯、佐藤茂平太氏等も同組合成育の功勞者として輝く足跡を殘してゐるこの如くして昭和七年度末に於ける組合の概況は貯金拾四萬五千八百八拾五圓、貸付金八萬七拾七圓、準備金壹萬六千貳百拾七圓、特別積立金貳千貳百六拾五圓、別途積立金壹千四百五拾圓の巨數を示して居るが、赫々たる業容と謂はう。尙現役員は左記の諸氏である。

組合長理事　佐藤清三郎
專務理事　眞鍋勝
理事　平尾喜惣次
同　大林秀治
同　脇正
監事　眞鍋長平
同　尾崎善四郎
同　松永熙夫



# 土器村信用購買販賣利用組合

土器村信用購買販賣利用組合は大正十一年一月廿六日の創設にかゝり組合長に岩瀬純一氏就任し組合員は五百十名、出資口數二千五百四十三口（一口十圓）を以つて信用購買事業を開始した。爾來積極方針を避け堅實の一路を辿つて今日に至つてゐるが同村は鹽田業者多く故に組合の貯金は概ねこれ等鹽業關係者に因つて膨脹せしめて居る。その反面に純農家は副業として盛なりし叺製造業が近來不況にして正に休止狀態にあればこの方面組合員の貯金は餘り變化なき狀態で購買部は肥料雜貨日用品の一部分を取扱つてゐるが昭和八年度より約五十坪の農業倉庫を新設すべく目下計劃中にあり之を昭和七年度末の概況に依れば組合員數四百八十六名、出資口數二千三百三十九口、貸付金九萬貳千拾七圓、貯金拾八萬貳百拾六圓、準備金及び特別積立金壹萬五千貳百五拾七圓、購買品賣却高壹萬四千九拾九圓を示すの盛況にしてこの數字を以て村勢の一班を窺知されるところがある。因みに現役員は左の諸氏である。

組合長理事　岩瀬純一
理事　平澤勇平
同　森崎萬太郎
同　眞鍋英夫
同　朝田彌三郎
監事　林安治郎
同　津田好太郎

## 丸龜市及仲多度郡

# 丸亀信用組合

丸龜信用組合は丸龜市一圓を區域として大正十二年二月二十日設立したが往時は瀬戸内海の要津としてその繁榮を誇つてゐた丸龜も明治維新後の急調なる交通文化の發達によりさきの殷盛は何處へと、その商工業も漸次衰頽の徴を呈し金融の硬塞は年を逐うて深刻化して來た而も市内に大小の銀行は多く其支店銀行は概ね傳統的方針として市内一般商工業者に對する金融の圓滑を缺ぎその吸集せる資本の大部分は常に彼が本店所在地に吸集せられ一般は正に貧血の症狀にあり從つて市勢は日に不活潑な狀勢に惰すのみである。此處に同市有志は蹶然信用組合の設立を企劃提唱して遂にその實現を見たのが大正十二年二月二十日であつた。而もその設立の事を聞くや心ある市民は擧つてこれに參加し旬日ならずして組合加入者は數百人に及ぶ盛況を示して如何に庶民的金融機關が時代的に希求されつゝあつたかを窺知されるのである。

かくて出資口數は既に數千口に達し貯金も陸續として組合に集まり資金の充實を得て組合員に對する金融の道は完全に開かれるに至つた。其後も組合は極力勤儉貯蓄を奬勵しつゝ貯金高も逐年增加して遂に今日の盛況を見るに至つたのである。尙昭和七年度末に於ける組合員數は一千二十二人、出資金貳拾四萬參千七百八拾圓、各種積立金拾壹萬八千九百五十八圓、貸付金六拾貳萬壹千七百四拾六圓、定期貯金百四拾七萬四千八百五拾貳圓、小口貯金貳拾六萬八千六百圓、當座貯金五千四拾九圓、月掛貯金參萬八千八百八拾九圓、据置貯金壹萬壹千六拾貳圓、皇誕貯金壹萬四千百九拾五圓等貯金の總計百八拾壹萬餘圓の巨數を示すの盛況にしてこの短時日にこの如き進展を見せしは一つに組合幹部の努力信用を語るものである尙組合現幹部は左の諸氏である。

組合長理事　石井秀治郎
專務理事　竹内照雄
理事　大久保實
理事　尾池松太郎
同　三谷助四郎
同　高谷織四郎
同　竹内英雄
同　都村源吉
同　石川金助
監事　齊藤定五郎
同　秋山正一



# 丸亀農業倉庫

丸龜農業倉庫は明治四十二年未だ農業倉庫業法の實施せられざる以前に於て農業倉庫單營の目的に創設されたが、從てこの當時は民法に準據する丸龜米麥倉庫組合の名稱を以て經營して居たこの種の組合は全國的にも稀にしてその創立に參劃せし現組合長藤田氏の如き異常の苦心を嘗めて遂に之を實現其後幾多の難關に逢着しつゝこれを打開し一途邁進せば漸次世の認識と共に業況の進展も遂げた。ついで大正六年農業倉庫業法發布の機運漸く萌すや他府縣の同業者と共に同法律制定の請願運動を起し參考資料を當局に提出等大いに努力し間もなく同法律の發布さるゝや直ちに組織を社團法人に改め更らに昭和二年産業組合法に準據する機構を整へて今日に至つた而して同倉庫の設備規模大なるは縣下有數にして四百五十坪を整備し最近一ケ年間の入庫數量は米麥豆合計八萬六千五百二俵、共同販賣數量、貳萬八千七百七拾五俵、農業倉庫證券發行數二千四百九枚、金融の斡旋拾四萬八千四百九拾六圓、準備金壹萬四千九百四拾參圓、特別積立金貳萬壹千六百六拾圓の巨大なる數字を示してゐる。就中共同販賣は大正四年一月より開始し最初は一ケ月に三回五の日に開催しつゝあつたがその後一週二回火曜日及び金曜日に開催し開始以來滿十八ケ年開催數九百六十餘回にのぼつてゐる。

また同倉庫は大正九年以來丸龜第十二聯隊の所用米全部を一手に引き受け一ケ年の取扱高七千數百俵に達しこの外政府の指定倉庫として買上米一萬二千俵も保管に任じてゐる。

この重要倉庫業務は組合長と共に功勞多き藤田專務これを

處理し誇るべき成績を揭げて居るのである。尙組合の役員諸氏は左の通りである。

組合長理事　藤田政男
專務理事　藤田八百一
理事　馬場良太郎
監事　入江俊輔
同　竹内照雄

## 購買組合丸亀共榮社

購買組合丸亀共榮社は丸亀市一圓を區域として組合員の生活上必要なる物品、米麥、薪炭、味噌、醬油、砂糖、茶、肉酒等を購買しこの中米麥類は組合に於て精白これ等の物品を組合員に買却する事を目的として大正八年十月創立せる產業組合である。斯てその合理的機能と存在價値は忽ち區域内の俸給生活者、勞働者、商工業者の認識する所となり加入者は逐年增加して昭和七年末に於ては組合員四百七十四人、出資口數六百八十六口、出資總額參千四百參拾圓、購買高貳萬百九拾五圓、準備金五百五拾九圓に達し年四分以上の出資配當を行ひ着々業績をあげてゐるがその發生すでに尖端的なる同組合が共後の業容も逐年充實し一般市民の實生活に介入して完全に所期の目的を達成しつゝあるはこれを時代の要求と謂はなければならない。尙現在役員は左の諸氏である。

理事組合長　齊藤定五郎
理事　横田都太郎
同　臼杵運三郎
同　藤田政男
同　合田松治
同　谷本榮吉
監事　中山喜平
同　永井愛太郎



## 南村信用購買組合

南村信用購買組合は大正二年四月六日の創立にして大岡濱吉氏組合長に就任し、組合員二百五十二名、出資口數六百口(一口十圓)を以て事業を開始した。爾來躍進を續けて昭和七年末に於ける業況は組合員三百八十名、出資口數一千二百三十九口、貸付金八萬七千五百五拾九圓、貯金拾四萬六千六百七拾七圓、準備金壹萬貳千參百九拾圓、積立金壹萬參千六百貳拾圓を示す盛況にある特に同組合は貯金を奬勵しその方法として團体貯金、出生貯金、青年團貯金等を數へ就中出生貯金は名付けの贈答物を節約して貳拾圓以上を貯金せしめ男子は徵兵檢査まで女子は結婚まで繼續せしめてゐるが、この成績極めて良好である。更らに目下自力更生の秋に當り其新計畫にも納稅者は各々一ケ年分の稅金を前以て貯金せしめ翌年の稅金に充つる方法にして又組合員の肥料購入にも何らか新方法を構ずべく考究して居るが、近く實施する筈である。

尙現役員は左記の諸氏である。

組合長　福崎磯治
理事　山内佐源太
同　大岡武治
同　直江與三郎
同　廣田德三郎
同　藤澤喜之助
監事　豊岡政太郎
同　大岡利八郎
同　横井駒助

## 郡家信用購買販賣利用組合

郡家信用購買販賣利用組合は大正十四年八月の創立にして組合長に高畑澤太郎氏就任し組合員五百二十名、出資口數一千三百口(一口十圓)を得て信用單營の事業を開始した。爾來飛躍を重ねて昭和四年より更らに購買販賣利用部を兼營して今日に及んでゐる。現在組合員は五百二名その出資口數一千

二百九十五口、貸付金四萬壹千百五拾八圓、貯金參萬八千百四拾四圓、準備金二千七百拾六圓、積立金壹千九百五拾六圓にして役員は左記の諸氏である。

| | | |
|---|---|---|
| 專務理事 | 高畑澤太郎 | |
| 理事 | 白川登代七 | |
| 同 | 堀家與市 | |
| 同 | 由川定雄 | |
| 同 | 武田一男 | |
| 同 | 小林要 | |
| 同 | 行成宗七 | |
| 同 | 河井貫四郎 | |
| 同 | 香川榮一 | |
| 同 | 横井忠太郎 | |
| 同 | 蒔本今治 | |
| 監事 | 高畑定五郎 | |
| 同 | 河井宇八 | |
| 同 | 平尾義雄 | |
| 同 | 池田忠雄 | |
| 同 | 谷口蒔藏 | |
| 同 | 行成傳吉 | |
| 同 | 平尾忠次郎 | |

## 龍川村信用購買組合

龍川村信用購買組合は大正三年二月九日同村和氣卷太氏等の努力により創立し同氏組合長に就任した。その組合員は二百九十七名、出資口數七百十二口(一口十圓)を得て事業を開始したが創立當時は事務所を同村役場に置き事務を村當局に委囑して居たが充分其機能を發揮されず從つて本格的發展を見なかつた其後大正十四年三月十六日現在の事務所を新築移轉すると共に一轉組合員の利用繁盛を來し躍進を見つゝ逐年業績を向上せしめて居る。

而して現在に於ける組合内容中積立金の僅少なる事は琴平銀行破産により受けし貳萬壹千圓の損失を年次の剩餘金より補充せる故にして此打擊後組合幹部は勿論一般組合員も大い



に奮起し近くこれが補塡も完了すべく目下五ヶ年計畫として購買部の發展增資をなし飛躍の姿勢にあるがその昭和七年末に於ける業況を見るに貸付金六萬四千貳百四拾九圓、貯金拾萬貳千六百參拾圓、準備積立金貳百六圓、購買品利益金貳百貳拾貳圓にして近き將來の發展を期待されて居る。現役員は左記の諸氏である。

| | |
|---|---|
| 組合長 | 次田德左衛門 |
| 理事 | 松浦半吾 |
| 同 | 小田猪一郎 |
| 同 | 高田實奈次 |
| 同 | 次田公威 |
| 同 | 入江小市 |
| 同 | 高田理太郎 |
| 同 | 土井武 |
| 同 | 谷本半四郎 |
| 同 | 大平櫛次郎 |
| 監事 | 眞部熊太 |
| 同 | 宮武和右衛門 |
| 同 | 高木齊 |
| 監事 | 山地紀一郎 |
| 同 | 佐藤兼吉 |

## 與北村信用購買販賣利用組合

與北村信用購買販賣利用組合は大正十三年十月の創立にして當時の功勞者堀家清氏組合長に就任し組合員數二百八十名出資口數九百十八口(一口貳拾圓)を以て信用單營の事業を開始した。爾來躍進を重ねて村内唯一の金融機關となつた昭和七年三月現在の如く信用購買販賣利用組合と改稱各部の多彩的活躍に入つたが同組合に於て最も賞讃されてゐるものは貸付金返債の誠實なる美習にして期限が至れば執務時間外其夜中に於ても元利を揃へて持參返濟する、從つて未だ回收不能を來せしもの等曾てなく萬一の場合は證人が進んでこれを支拂ひ組合に對して毫末の累をも及ぼすことなきとはこれ一般組合員の道德率高きと又内容の充實責任感强きを證左するも

のでその金融觀念には學ぶべきものがあらう。

昭和七年末に於ける業況に於ても組合員數三百三名、出資口數九百十四口、貸付金拾萬六千八百七拾六圓、貯金總額八萬參千九百七拾九圓、準備金四千貳百七拾圓、特別積立金貳百圓を示してゐる。尙現役員の諸氏は左の通りである。

組合長理事　堀　家　清
專務　理事　關　居　筆之助
理　事　片　山　畫　三
同　堀　家　力　太郎
同　高　畑　景　民
同　紫　和　尙　太郎
同　秋　山　十　太郎
同　和　泉　正　三
同　山　下　彌　平　太
同　松　原　八　郎
同　浮　田　常　太郎
同　横　田　登　良　太
同　坂　本　茂
同　田　村　精
理　事　平　田　嘉　次郎
監　事　川　邊　渉
同　宮　田　音　次郎
同　篠　原　吉　之　進
同　岡　崎　長　太郎
同　大　平　良　雄
同　紫　和　善　太

## 金藏寺農業倉庫

金藏寺農業倉庫は大正十年三月の創立山地陽三氏外六氏役員に就任し組合員百七十二名を得て事業を開始した。而も當時は未だ農業倉庫に對する一般の理解乏しく活躍の域に至らなかつたが昭和四年頃より漸次利用者增加し更に現專務理事山地栞氏就任するや鋭意活動を續けこの結果在庫數量も遂に一萬俵を突破するの盛況に到達し縣下有數の倉庫業となつた



茲に於て倉庫の狹隘を感ずるに至れば三十坪一棟を增築し收容力二萬俵を有する擴充振りを示したが更に最近の業況と將來の躍進に備ふべく一萬俵收容の倉庫を增築計畫中である尙從來は保管のみに止つてゐた業務を一歩を進めて金融販賣を行ふの外既に着意せる醬油釀造事業の兼營をも爲すべくまた管て存否の程も疑問視するの狀態であつた信用部をもこの機に增資し倉庫事業と併進せしむべく加入者の勸誘に奔走しつゝある等何れ時代の要求に棹さゝんとする同倉庫今後の活動こそ眞に刮目期待すべきものがあらう。

尙昭和七年度末の概況は組合員百七十名、出資口數三百口(一口五拾圓)保管料貳千四百五圓、雜收入貳百拾九圓、燻蒸料百九拾四圓、復興貯金壹千九百參拾八圓、貸付金八千五百五拾貳圓、準備積立金百壹圓を示して居る。因みに現役員は左の諸氏である。

組合長　高田砂吾一
專務理事　山地栞
理事　元木滝太郎
同　宮下久太郎
同　次田茂
理事　佐藤熊吉
同　高畑宣五郎
監事　松本菊次
同　横田八郎
同　櫛田好太郎
同　尾崎千葉次
同　坂本定夫

## 垂水村信用購買組合

垂水村信用購買組合は大正二年十二月廿五日の創立にして同村岡政助氏組合長となり組合員二百五十名、出資口數六百九拾壹口(一口拾圓)を得て信用購買部の事業を開始した。以來組合は極めて純良にして些かの波瀾もなく圓滿順調なる業績を續けつゝあつたが大正十五年琴平銀行破產のため參萬圓の大損失を蒙つたのである、こゝに於て現專務小松鷹麿氏等

は痛く責任を感じ之が善後策には全く日夜寢食を忘るゝ苦力を捧げて結句組合事業には何等の支障も來すことなく事業を繼續するを得た。爾來同組合は嚴に虛飾を避け堅實を一途の精進を續け今日に至つてゐるが昭和七年末に於ける事業狀況は組合員數三百六十名、出資口數六百九十一口、貸付金八萬九千百六拾八圓、貯金拾萬九千九百八拾圓、購買部壹千貳百七拾圓、純益金九百貳拾五圓、準備金七百九拾五圓、特別積立金壹千參百六拾八圓に達してゐる。

而して同組合の貯金奬勵方について異色とするものに部落集金貯金がある。同貯金は各部落毎に「貯金は誰にも出來る御奉公」の文字を記入せる袋を配布して部落代表者が集金して持參するものにして非常に好成績を擧げてゐる。尙現役員は左の諸氏である。

組合長　岡　政　助
專務理事　小　松　鷹　麿
理事　尾　松　壽　平
同　西　川　鯛　次
同　金　武　治　郎　一
同　奥　田　透　吉
理事　今　田　孝
監事　本　田　茂　市
同　明　地　安　造
同　宮　川　秀　男

## 豐原村信用購買販賣利用組合

豐原村信用購買販賣利用組合は大正五年十二月の創立山本二男氏最初の組合長に就任し組合員百二十六人、出資口數二百二十三口を以て信用部單營の事業を開始した。斯くて逐年飛躍を爲しつゝ大正十年購買販賣部を新設更らに昭和六年利用部を兼營して現在の如く信用購買販賣利用組合と改稱した而て茲にも其途次琴平銀行破產により五萬參千圓の大損失を課せられたが遂次剩餘金を以て補塡昭和八年度に於ては完結し得ることになつた。從つて目下一錢の準備金も保有せざるが組合員一同はよく理解し今後に於ける經營に期待して捲土



重來組合員の福利增進を翼つてゐる。殊に現專務北村小太郎氏は質素を以て聞へ炭火、茶菓の如きものは絕對に事務所に用ひず新聞等も自辨の節約振りにして爰に期せずして組合員の信望は集り組合は日に堅實性を加へて居る。

昭和七年度末の業況を擧げるに組合員數二百六十名、出資口數四百六十口、貸付金壹萬九千六百五圓、當座貯金四千三百九十四圓、團体貯金七千五百九拾四圓、定期貯金七千八百參拾八圓、豫約貯金八圓、紀念貯金九百四拾九圓、購買品壹千貳百八拾貳圓を示して居る。現役員は左記の諸氏である。

組合長　山地虎之助
理事　北村小太郎
同　神原卯三郎
同　青山茂一郎
同　笠井理吉
監事　山本勇
同　藤林房太郎

## 下吉田信用購買利用組合

善通寺町下吉田信用購買利用組合は明治四十一年二月廿九日に創立し爾來逐年業績を擧げてゐるが同組合に於て最も異色を讃へられるは金錢をも徹す組合員の强靱なる團結力である而してその設立の動機にもこの特異性を如實に物語るエピソードが綴られては居る、卽ち現在同組合の區域たる善通寺町大字下吉田の部落には明治三十七年日露戰役記念として生れた一日一錢貯金會が存立し然してその蓄積せる資金は是を產業資金に運用したが異常なる成果を示し他の部落も漸次之を倣ふの傾向を生じた。この時下吉田の部落內に於て一小作人が部落外の某地主と小作米改正の件に就き紛擾を釀しその解決の曙光も容易ならざるに至るや區域民は一致團結巍然として陳情歎願遂に小作人側の希望を貫徹するを得たのである茲に於て團結力の偉大性を體得した部落民は從來の貯金を產業開發に轉用すべく明治四十一年二月廿九日諸般の手續を完了し壹錢會の舊套を脫して生氣潑剌たる下吉田信用利用組合

の創設を見るに至つたこの團結意識は磐石に生れた同組合の進展はいよ〳〵堅實化し躍進に次ぐ躍進を遂げて最近の事業狀況の如きも組合員百三十六名、拂込濟出資金八千貳百八拾圓諸積立金參千四百七拾貳圓、貯金拾萬參千四拾壹圓、貸付金五萬參千八百拾五圓、購買品賣却高貳萬八百拾四圓を示して居るが一致協力の賜こそ偉大である。尙現役員は左の諸氏である。

組合長　遠山源治
專務理事　遠山長治
理事　西山彌三郎
同　横田加壽一
同　森塚茂太郎
監事　武内憲三
同　谷口今治

## 象鄉信用購買販賣利用組合

象鄉信用購買販賣利用組合は大正六年六月十四日の創立組合長に大西英一氏就任し組合員三百五名、出資口數五百二口(一口貳拾圓)を以て信用部單營の事業を開始した翌年更らに購買部事業を兼營昭和六年より販賣部事業を新設せる外農業倉庫も大正六年十二月以來經營して一般組合員の便益に資して居る殊に同組合の特異とするものに減債貯金と名付くる貸付金回收方法がある一回五十錢以上の貯金を以て借入額に達するまで繼續せしめ簡易に返債し得る効果的便法である又組合員は農會と協力して購買販賣事業に努力し掲示場を村内十ケ所に設置して組合の狀況を告知し購買部は組合員の希望により物品を配給し組合員死去の時は組合より弔意を表して會葬香奠を贈る等産業組合主義の高揚に努めて居るが組合に對する信頼の念愈々濃やかにして戸數四百四十戸中殆ど悉く加入せるの徹底振りであるかくて昭和七年度末の事業狀況に於ても組合員數三百八十一名、出資口數五百三十三口貸付金七萬壹千九百九拾貳圓、貯金拾壹萬七千四百八拾貳圓準備金九百七拾壹圓、特別積立金百五拾壹圓、購買部賣却高四萬壹千百六拾圓、販賣高八千八拾六圓、農業倉庫入庫數八千二百八十二俵の好績を示してゐる。現役員は左記の諸氏である。



組合長理事　大西英一
理事　西山久雄
同　大西唯一
同　大西桑太郎
同　大原利吉
同　氏家兼太郎
同　氏家與三郎
同　山内嘉藤太
同　宮内栂太郎
同　森德治
監事　永原時太郎
同　氏家茂次郎
同　安川淺一
同　安部利章

## 琴平信用購買利用組合

琴平信用購買利用組合は大正十年十月一日琴平土産物業者信用購買組合の名稱のもとに創立しこの背景をなす神都琴平町は人口七千人戸數約二千戸を數へ土讃線各社電鐵等交通機關は錯交終點を爲すが必然仲多度綾歌三豐の一部を擁する經濟的集散地をも形成して居る。かくて毎年三百萬人の賽客を吞吐する同町は旅館飲食店土産物店櫛比してそれ等業者の發展は縣下他に類例なく從つてこの斯業者間に産業組合を組織すべくその聲は夙に叫ばれて居たのである爰に大正十年十月一日土産物業者中の有志數十名發起となり土産物信用購買組合を設立し鈴木憲三氏組合長に就任二百餘名の組合員を得て事務所を同町本町十七番地に置き事業を開始した。

而もその當初は經營意の如くならず組合長を初め役員の苦心は筆舌にも盡さざるものゝ裡に漸次組合事業の理解徹底は漸時業績あがり接客業者以外の加入者も來り參じ遂に大正十二年三月十七日現在の如く琴平信用購買利用組合と改稱し區域を琴平町一圓及び榎井村字横瀬に擴張今日に至つてゐる。

その間琴平銀行の破産を初め幾多の苦難に遭遇しつゝ一路共存共榮の理想を實現に邁進し大正十五年三月廿九日現在の場所七百九十四番地に事務所を新築移轉し以來その活躍は愈々本格的にして躍進見るべきものこそあつた。

今や同組合は擴充五ケ年計畫を以て更らに着々內容外觀の充實に努力してゐるが昭和七年末に於ける組合員は四百十四名出資口數一千百十一口(一口參拾圓)貸付金九萬七千五百六拾七圓、定期貯金拾參萬九千貳百參拾參圓、當座貯金貳千五百圓、小口貯金參萬八千七圓、定額貯金四萬四千百拾八圓、準備金六千百參拾貳圓、特別積立金壹千參百四拾貳圓、購買高五萬五千八百拾五圓、利用高壹千四百六拾五圓の業績を示し縣下組合中錚々たる業績を示して居る。因みに現在の役員は左の諸氏である。

組合長　鈴木憲三
專務理事　前田熊吉
同　臼杵政太郎
理事　山田爲三郎
同　細川元次
同　崎馬太郎
同　平田次郎
同　平田元次郎
同　增田伊吉
同　鈴木信太郎
理事　橋嘉市
監事　安達正
同　三德彌太郎

## 高篠信用購買販賣利用組合

仲多度郡高篠村高篠信用購買販賣利用組合は明治四十四年八月八日の創立にして爾來同村民共存共榮の趣旨の下に村內唯一の金融機關となつてゐた然るに昭和五年末不測の蹉跌を招來し各役員の犧牲的努力に依つて辛じて窮地を脫した以來自力更生の眞劍溢るゝ精進裡に村民の支持をかち得て今や着々光明の彼岸に近づきつゝあり。

尙貯金者も年毎に增加を見更に組合活用を意慾して近くは農業倉庫も計劃して居る。而て最近の加入者數は四百二十名出資總額六千拾圓、積立金貳千七百拾貳圓、貯金六萬四千圓貸付七萬五千參百八十五圓、共同購買壹萬九千貳百五拾壹圓



を示してゐる。因みに現在の役員は左の通り。

代表理事　岸村森太郎
理事　篠原和七
同　田中忠太郎
同　富田多藏
同　古市房太郎
同　多田和助
同　渡邊主馬八
同　本田喜惣次
同　古川祐太郎
監事　田中正義
同　平田喜代次

## 四條村信用購買販賣利用組合

四條村信用購買販賣利用組合は明治四十五年五月十三日四條村信用購買組合の名稱の下に創立大西純一氏組合長に就任し組合員百二十二名、出資口數二百三十五口を以て信用購買事業を開始した。爾來逐年進境を示して大正七年十二月倉庫業を開始し精米部及び倉庫部の兩面に亘り活躍を開始し同十一年五月廿四日四條村信用購買販賣利用組合と改稱して今日に至つてゐる。その間大正七年十一月縣支會より優良組合として表彰され組合幹部並に組合員の面目も光彩陸離たるものあり。昭和七年末に於ける事業狀態を見るに組合員三百二十九名、出資口數六百六十六口、貸付金拾五萬百參拾圓、貯金九萬四千貳百參拾參圓、組合員外貯金貳萬七千參百六十五圓準備金貳萬貳千參百九拾參圓、特別積立金貳千八百拾四圓、販賣利益金百六拾四圓、購買利益金壹千六百五拾貳圓、利用料壹千四百拾參圓、倉庫部入庫數米四千九百三拾三俵、裸麥五千六百俵小麥四千八百俵、精米部米二千俵、麥二千八百俵の大活況を示してゐる。

更に同組合では昭和八年度よりの新事業として農會と協力し叺の共同作業場を新築して製作及び販賣の斡旋すべく計畫中である。因みに現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　大西精一

理事　杉野菊次
同　東條吟次郎
同　關友市
同　堀下政五郎
監事　杉上助三郎
同　上原政市
同　大西文雄

## 吉野信用購買販賣利用組合

吉野信用購買販賣利用組合は大正二年五月二十一日の創立安達熊次郎氏初代組合長となり組合員六十一名、出資口數二百六十四口を以て事務所を同村役場内に置き信用部單營の事業を開始した。以來飛躍發展を重ねて大正十年五月購買販賣部及び利用部を新設し同時に民家を借り入れ農業倉庫をも開始した。現在に於いては信用購買、農業倉庫を主として活躍してゐるが昭和三年二棟百八十坪の倉庫を琴平町に新設し好績を擧げその昭和七年末の業況に於ても貸付金六萬壹千貳百五拾貳圓、貯金八萬七千百參拾參圓、準備金五千參百圓、特別積立金壹千圓、購買部利益金壹千百九拾七圓に達してゐる現在の役員は左の諸氏である。

理事　安達賢
同　齊藤治雄
同　鈴木宇三郎
同　黑木五百枝
同　天米清一
監事　齊藤忠太
同　黑木潔矩

## 神野村信用購買販賣利用組合

仲多度郡神野村信用購買販賣利用組合は大正十五年一月十



九日同村金關多一郎、松浦長太郎、朝倉義尙氏等の奔走により創設組合員三百五十一名、出資口數一千五百七十三口（一口拾圓）を得て事業を開始した創立の翌年琴平銀行休業の餘波を受けて一時は經營困難を思はせたが役員諸氏の必死的努力にこの窮地を脱しかくて其後は經費の節約を以て事務所も朝倉氏の宅に置き鋭意再興に精進したが、此結果次第に業礎を固め昭和五年現在の場所に事務所を新築し得る迄に至つた

爾來順調にして現在の組合員數四百三十六人、出資口數一千六百五十八口、貯金拾萬壹千百參圓、貸付金七萬五千參百拾八圓に達し貯金には定期當座貯金の外團體貯金、家族貯金據置貯金、學童貯金、紀念貯金等あり更らに昭和八年度より農業倉庫開設を計劃してゐる。現在の役員は左記の諸氏である。

組合長理事　金關多一郎
專務理事　松浦長太郎
理事　堀家善五郎
同　神尒伊太郎
同　横關角助
同　亀井時次
理事　三浦與八郎
同　河田武一
監事　松浦妻助
同　岡鶴吉
同　渡邊久五郎

## 十郷信用購買利用組合

十郷信用購買利用組合は大正十二年一月の創立松園清太郎氏組合長に就任組合員四百八十名、出資口數六百口（一口拾圓）を得て信用購買事業を開始し更らに大正十四年より利用部を兼營今日に及んでゐるが。創業間もなく琴平銀行破産の厄に遭ひ出資金六萬餘圓の内參萬五千圓を失つたが組合長松園氏は不拔の意氣努力を以て其責任を一身に負ひ此善後策に就ても役員は勿論何人にも計らず善處しかくて一時は貯金の引出殺到を見たが微動だにせぬ組合長の態度に多數組合員は

安堵して再び貯金するなど混亂は幸ひ少時にして間もなく鎭まつたなほその欠損も昭和八年度に於てそれを補塡完結するに至つたのである。

斯くして同組合員の組合長に對する信望は翕然として集りその信頼の念は正に絶對的の信認であつて、これを受ける松園氏は純農家の人として誠直無比の人格者而かも經濟的頭腦と事務整理の才幹は稀れに見る名組合長にして更生の同組合の今後こそ期待されて居る。尙組合の現況は組合員五百二十六名、出資口數六百九十口、貸付金拾五萬六千七百拾六圓、貯金貳拾萬壹千八百七拾五圓、準備金及び各種積立金四百八拾七圓、購買品賣却高壹萬八千百七拾壹圓、利用料百參拾九圓を示して居る。現役員は左記の諸氏である。

組合長理事　松園清太郎
理事　永原一馬
同　久染清造
同　福崎元次
同　道久登良一
監事　大西豊暉
同　玉尾金照
同　森末繁一

## 三豐郡

# 觀音寺信用組合

觀音寺信用組合は戸數三千五百餘戸人口壹萬七千餘名の三豐郡觀音寺町一圓を區域として大正八年十月二十六日創設以來躍進を重ねて今日に至つたが同町はかつて組合簇立し明治四十二年より四十三年に至る如きは七組合の設立を見た程であつた。しかもその內容たるや一部組合を除き貧弱極まるものにして業績從つて振はず遂に大正八年に至り各組合を解散して全町を區域とする信用組合設立の機運に到達し同年九月六日創立總會を開催し翌月二十六日事業を開始したのである

然もその當時は町民の產業組合に對する知識頗る幼稚なると徒らに加入を逡巡し尙役員の意思も疎通を缺ぎ創立年度の如きは經費の支辨すら困難なる狀態であつたが漸次これが理



解と且役員の熱誠を加へその施設事業も逐年進捗した又一面には節約主義を採つて適進したれば驀て組合の利用も加速的に增加し大正十二年末成績は三豐郡組合中の首位を示し爰に其基礎は築かれて昭和二年六月縣支會より表彰さるゝに至つた。而て同組合に於て其異色とする所は組合員又は家族中に出產ある場合には祝として金三十錢記入の教育貯金通帳を贈り且つ爾後每月五錢以上の金額を積立しめ男子は徵兵適齡まで女子は結婚まで據置くのである又昭和三年度よりは就學兒童に對しても同樣の金額を贈り實施して居る。更に組合員の死亡の際は悔として金五十錢を贈り弔意を表し會葬には組合長又は其の代理者必ず參列し組合員の出漁中難破遭難等の時は其の都度臨機の救濟をしてゐる。

この外貯金方法中特異的なる日掛貯金もある。之は每月一口十錢拂を單位として滿三ケ年間拂込み滿期後元利金の拂渡しをなす方法で他組合にも類少き貯蓄法としてゐる。その他教育貯金、函貯金、特別貯金等もある。なほ役員中常任理事及び當番監事制を設置して組合の統制を圖るなど萬全的に機能を發動し昭和七年末に於ては組合員數一千九百十名、出資口數九千五百八十九口に達し出資金額九萬五千八百九拾圓、拂込濟出資金八萬九千七百九拾五圓、諸積立金七萬八千五百圓、借入金拾貳萬圓、貯金百六拾壹萬參千圓、貸付金百四拾貳萬八千圓、剩餘金壹萬九千六百圓を示してゐる。尙最近組合は一般組合員の要望に由つて手形の割引及一般的預金の取扱をなす事になつたが追がに生產の町の時代的要求として注目に値するものであらう。

因みに現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　齋藤楠馬
理事　西川友次郎
同　高辻健太郎
同　津田清太郎
同　宮本秋四郎
同　中山卯三郎
同　片山松太郎
同　大西兼美
同　坂田龜吉
同　北野倉二郎
同　三宅德次郎
同　寶積義愛

監事　藤原千代松
同　藤原房吉
同　眞鍋才太郎
同　大西条一
同　高橋春太郎
同　高田久吉
同　澁谷米太郎
同　白井淺吉

## 販賣利用組合觀音寺倉庫

販賣利用組合觀音寺倉庫は昭和四年二月八日の創立にして由來觀音寺町は三豊郡の中心的地勢の下に各種物資の集散地として其利用取引は盛況を極めて居る。同倉庫は大正八年社團法人觀音寺農業倉庫を設置して以來經營し來つたが産業組合法によるの利便を認めその組織を變更して現在の名稱に改め其後年次に業績をあげつゝ昭和七年に至るや勇躍倉庫を增築して全收容力三萬二千俵百坪の煉瓦造モダン倉庫の竣成とはなつた。而してその貯藏設備の完璧は縣下隨一として謳はれてゐる。のみならず這般農林省の指定倉庫として政府買上米の保管を托されてゐる、なほ昭和七年度末に於ける概況は組合員數六十九名、出資口數五百口、出資金貳萬五千圓、諸積立金壹千圓、入庫數玄米二萬八千三百三十俵、小麥一萬二百十一俵、裸麥二萬二千六百六十四俵、證券發行數玄米一萬六千八百八十五、小麥八千九百四十五、裸麥一萬七千九百五十一保管料四千九百七十一圓にして縣下四大農倉の一たる實勢にして同年度に於ける販賣數量も三萬六千俵を計上し、その多くは大阪宇品の兩糧秣支廠に直賣して居るが何れも赫々たる業績と謂ふべきである。現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　請川杢治
理事　浮田秀太郎
同　宮本秋四郎
同　大西甚五郎
同　大西範平
同　安藤家隆
同　三木猛一



監事　高橋式三郎
同　伊藤正史
同　松浦熊吉

## 豊濱町信用購買販賣利用組合

豊濱町信用購買販賣利用組合は大正十四年の創立である。これより先現組合長白井光次郎氏は夙に同町進展の軌道とし一般金融とそれに産業開發機關として産業組合法に準據する組合設置の必要を痛感しまづ同町有志に計つたが忽ちにして多數の賛同はあり茲に同氏自ら發起人として組合員二百八十六名、出資口數三千四百二十二口(一口拾圓)を以て全町の共鳴裡に事業を開始したのである。

爾來白井氏は終始一貫組合長としての激務に全能を委ね逐年隆盛に導きつゝあり。數年前より五分配當をなし得るの業績を擧げてゐるが現在の事業は信用部と農業倉庫に主力を注入して居る昭和七年度に於ける概況を見るに組合員數三百九十九名、出資口數三千九百十三口、貸付金拾參萬五千貳百八拾圓、貯金貳拾壹萬九千圓、出資金參萬九千百參拾圓、準備金五千九百七拾參圓、特別積立金六千圓、倉庫部積立金貳萬五千圓の活況を示し、それが貯金の奬勵方法としては月掛及び日掛の契約貯金と納稅貯金等の特異的なるものがあり町勢の發展と共に一層の飛躍進展が期せられて居る。尚現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　白川光次郎
理事　平井彌裕
同　片木四郎平
同　大久保克己
同　大久保精一
監事　合田孫六
同　藤村猛
同　合田恒三

# 笠田村信用購買販賣利用組合

有限責任笠田村信用購買販賣利用組合は大正二年六月二十日創立し同村一圓を區域とする縣下隨一の優良産業組合である。由來笠田村は三豊郡の中央位にあり東西二十五町、南北二十町地勢概ね平坦にして戸數四百四十餘戸、人口二千三百餘人耕地二百五町畑五町、山林六十町を有し村民殆ど農業に從事する純農村であるが村内に銀行、郵便局等の金融機關一切なく人情質朴勤勉ながら爰に貯蓄觀念に乏しく一朝資金の必要迫りたる場合には村内或ひは他村の個人間に於て一割二三分の高利融通を受ける外には頼母子講を以つて唯一の金融機關とするの狀態にして其の數は逐年增加し同組合設立前には村内に八十を數ふる頼母子講は簇生しその濫設の結果は毎次の掛戻金に窮し倒産者相次ぐの慘狀も眼の邊した一方農産物の販賣及び肥料の購入の如きは何等の統制なく資金なき農家は常に商店より掛買により一時を凌ぎその決濟は米麥の收穫期に於ける相殺的の引渡強要となり徒らに地方仲買人、小賣商人の懐を肥すのみにして從つて村内の産業振はず。かくて時代と共に醇朴なる農村の前途も實に暗澹たるものを想見されたのである。

斯て偶々郡當局から産業組合設立の慫慂があつたが當時の村長鳥取柔三郎氏はこれ同村をして起死回生に唯一の救世主なるを悟り村内有志に相諮り直ちに組合設立の準備に着手し遂に大正二年六月二十日これを設立信用單營の事業を開始した。爾來その躍進は眼覺しく大正八年には農業倉庫百坪を建築して米麥の保管と共同販賣事業を開始し大正十年購買事業を兼營して肥料及び日用經濟品の取扱ひを開始し同十一年叺の販賣に着手同十四年利用部に於て精穀事業を開始し翌十五年より鶏卵の買取り販賣に着手昭和二年より繭の販賣同五年より葬具輿を設備し更らに六年には鶏、蔬菜、果實の出荷販賣を開始する等年と共に事業分量は擴充の一方を辿つた。しかもその間には理解に乏しき組合員の指導統制に或ひは商人の反對競爭等幾多の難關に逢着しつゝも熱誠なる役員の努力と多數組合員の支持は遂に今日の盛況を招來するに至つた。

今し同組合の業況として昭和七年十二月末現在に於ける組合活動狀況を擧ぐれば組合員數四百四十七人、出資口數九百七十七口、出資總額壹萬九千五百四拾圓、諸積立金參萬貳千



貳百八拾八圓、貯金參拾五萬七千百五拾壹圓、貸付金拾四萬四千九百拾壹圓、購買品賣却高五萬四千五拾九圓、販賣品販賣高拾貳萬貳千六百貳拾圓、精米三千三百九十三俵、精麥一千六百七十二俵、拉麥九百四十五俵、葬具使用回數二十八回等の凌駕たる數字を示し貯金の如きは一戸當り約八百圓を保有し村内生産物の販賣、物資の購入等總て同村産業經濟の中心機關として所謂一村一團の組合組織の確立を見るに至つた。

また昭和八年一月參千五百圓を投じてトラック一臺を購入同年度よりトマトチヤツプの製造を開始するため加工場を建築中であるが、この超俗的躍進擴充し往く同組合に對して大正十年三豊郡長より表彰あり同十一年香川縣支會長より表彰十四年産業組合中央會より表彰、昭和六年重ねて中央會より特別表彰、恩賜財産特別奬勵金貳百五拾圓の拜受等共榮光は愈々同組合をして理想の社會の重要機關たる面目を擔はしめたのであるこの光彩を加へた組合ではその協力と努力の名譽を永遠に記念せんがため同年九月工費約壹萬圓を投じて約二百坪の記念館建築に着手、昭和七年三月竣工したが同館は平常は小學校の講堂として使用せしめ機會ある毎に講演會、講習會、活動寫眞會等を開催し公民教育施設の一助とし尚將來は結婚式場その他各種の會合にも充てる事になつて居る更に同組合の誇るに足る特殊施設として

一、小作米の委托徴收である。

方法は小作料全額徴收（端米込）と丸俵のみの二種とし全額徴收は一石につき五升丸俵は一俵に一錢の手數料を徴收し小作者より小作米を受取ると同時に小作米受領書を發行し小作者は此の受領書を地主の宅へ持參し端米の精算をするのである

二、購買部肥料、學校用品の取扱ひ方。

少量の各種肥料は常に用意し季節的の大量仕入れは其の都度世話係協議會を開き農會副會長、技術員臨席熟議の上購入の種類時期を決定して世話係は各戸につき申込みを取り纒めて組合へ報告する。また學校用品は從來一般日用品と同樣に取扱うてゐたが昭和七年十一月より小學校に擬擬産業組合を設立し其の取扱品の仕入れ全部を組合に於て爲し販賣記帳整理等は生徒及び教員の役員が當つてゐる。

三、金庫室

構造は一間四方防火的土藏造りのもので金庫及び帳簿書類等を保管してゐる。

四、精穀事業

五馬力の電動機一臺、磨擦精米機二臺、精穀機三臺、拉麥機一臺、製粉機一臺、粉碎機一臺大豆粕切一臺を設けて米麥の精白、魚粕、大豆粕、苞米、高粱、カキ殼飼料の粉碎をする。

斯くの如く最も合理的産業組合の諸機能を發揮せる同組合は各方面の絶讃を浴びつゝ感謝勤勞向上の三則を組合是となしより善き理想鄕建設に孜々として精進を續けて居るが八年四月にはこの異常な好成績に徴し全國的の模範組合として表彰されたのである。因みに現在の役員は左の諸氏である。

組合長　鳥取爲三郎
專務理事　大西榮吉
理事　池田光三郎
同　成木嘉吉
同　藤目喜代造
同　平尾甚平
監事　高橋米太郎
同　細川佐源太
同　千秋虎太郎
同　關政助

## 和田村産業組合

三豊郡和田村産業組合は大正十二年六月三十日の創立である。由來同村は農業、漁業、工業の三地帶に區分され組合員の統制困難にしてその間役員の苦心また少からざるものがあつた。事業開始當時に於ける組合長及び專務理事の經營方針はその有機的活動に就て自ら相當の自信を持つまでは徒らに組合加入又は貯金等の勸誘を避け役員の人格を陶冶し村民の組合に對する信頼を獲得することを第一務としたのであるかくて鋭意內省的事業經營に腐心した結果組合員は加速的に增加を見大正十四年に至るや加入者六百名を突破するの盛況を示したのである。

而して同組合は先づ販賣部の事業より開始し組合員の製產せる乾うどん、焚砂糖を岡山、廣島、愛媛の諸縣の有力產業組合に向つて通信販賣を行つた。他方購買事業としては醬油酒、木炭、石炭等を組合にて直接仕入れ村內の信用ある小賣商店を指定して販賣せしめ更らに大正十五年には農產物加工事業を起すべく一農家の小納屋を借り受けて醬油の試驗的醸



造に着手したが豫想以上の成績を收めたかくて翌年には百餘坪のバラツク建倉庫を設けて一般農家の委托醸造を始め更らに本來の目的に邁進すべくした然るに爰に果然地方醸造家との間に白熱的販賣戰を惹起し其の間各種の障碍に遭遇遂に產業組合法違反行爲なりとて縣及び農林省へ陳情せるものもあり爲めに組織を變更せざるべからざるに至つて研究の結果和田村副業組合と名付くる姉妹組合を創設しその農產物加工部へ醬油醸造事業を讓渡し目下經營して居る。又大正十四年より販賣事業の難中の難たる叺の買入れ販賣に着手し此年額五萬にも達する。尙昭和五年には農家肥料の自給自足を目標に畜產農業奬勵の一助として養豚研究所を建設し養豚の普及に努めその飼料には前記醬油粕を利用する等どこまでも農業の合理化經營乃至は多角的經營を指導しつゝあるがこの犧牲的幾多の難事業を研究創始する積極的努力こそ現代疲弊困憊の極と云ふ農村自匡には最も効果的療法にしてその業況にも昭和七年度末組合員六百六十六名、加入口數千六百二十七口貯金五萬八千六百七拾五圓、貸付金貳萬九千圓、購買品賣却高貳千四百貳拾五圓、販賣高參千四百六拾七圓を示し尙外に昭和二年度より別途會計のもとにある和田村副業組合農產物加工部の昭和七年度中に於ける業績として醬油販賣石數三百餘石を計上しよく生產より加工消費の理順に隨從善處して居るのである。尙現在の組合役員は左の諸氏である。

組合長理事　田中茜造
理事　田中次郎
同　蔦原陸治
同　山內龜太郎
同　合田勇太郎
同　橫內更
同　寶田藤市
同　川崎久太郎
同　川上芳太郎
同　今井富吉
同　高木淸太郎
同　高橋友太郎
監事　大西元祐
同　芦田一郎
同　川上政吉

# 吉津村信用購販賣利用組合

吉津村信用購買販賣利用組合は明治四十四年四月二十八日三豊郡吉津村一圓を區域として創設爾來その躍進は縣下産業組合中異數の業績を示してゐる。抑も吉津村は同組合創生當時には戸數五百四十戸人口二千九百餘の大部分農家より成り村民全層に亘る金融機關なく唯一銀行支店はあつたが一般農家の利用に適せず僅かに頼母子講を以て最上の金融方途とするの狀態にあり村民の疲弊は年と共に累積しつゝあつた。

この時に當つて同村長丸岡順治氏及び有志福岡調之助、石井計之祐氏等産業組合の設立を痛感し村内有力者と相計り遂に吉津村信用組合の創設を見るに至つた。而して當時は信用部の單營事業を以て福岡調之助氏組合長に就任鋭意業礎の確立に努めたがしかし未だ組合精神は徹底せず極めて微々たるものであつた。

斯くして年を經て大正六年現組合長福岡一郎氏理事に當選するや役員の協力のもとに一意積極的に組合興隆を期して驀進し機會ある毎に懇談會或ひは講話會等を開催し組合の趣旨普及に努めた結果村民の理解は日を逐ふて利用激増に現はれ同八年九月には假倉庫によつて農業倉庫業を開始し同時に販賣事業を兼營尚同十年四月事務所及び農業倉庫を新築し同時に購買事業をも開始し更らに各部落に總代二十四名、世話係二十六名を選任遠隔組合員の便益のために鹽木出張所を設置次いで大正十四年より利用部事業を開始し新らたに發動機蒸具醫療部を兼營し爰に産業組合の全機能能動に一齊の活躍を遂げたかくて組合は組合幹部の時代的獨創の多彩に禮讃と信頼を寄せた組合員その兩者の協力を以つて事業は日々旭昇的進展擴充を續けて一躍本縣産業組合中新興の寵兒とは讃へられた然して其の後昭和元年稀有の不作更に琴平銀行の休業翌二年には財界未曾有の變動に際會し同村主要副産の繭叺の價格は低落等連續的多事多難にもその都度組合當事者は常に機宜の措置を講じ指導して全員の相互的和衷と協同精神を具現して何等好まざる影響も止めなかつた又當時近村に小作爭議の偶發も想見されたが同村は至極靜穩にしてよく平和の理想郷を思はれたのであつたこれ等は得てして雷同性の民衆心理の中に夙に産業組合精神を體得して自ら自治の本源を培養せる同組合の輝く面目にして完全なる良果とも謂ふべきであらう次いで昭和三年聖上御大典の時には記念事業として内務省式改良便所の勵行を決議し全村に實施したがこの如きは全國的にも誇るに足る壯擧にして特筆に値する斯くの如く稀に見る良績を揭げた同組合は故にして大正十年三月二十八日三豊郡長より表彰を受け翌十二年五月二十六日香川縣支會より表彰され又昭和六年五月九日産業組合中央會頭より表彰を受くる等その光彩は斷然陸離たるものあり尚これに功勞切なる組



合長福岡一郎氏も大正十二年及び十四年三豊郡長並に中央會縣支會より表彰され面目を施して居るが今や同組合は戸數五百八十餘戸中組合員數五百八十七人出資金壹萬五千圓にして組合の基礎又磐石不動を建立して居るが昭和七年度末に於ける業況は貯金拾七萬六千五百六拾六圓貸付金拾貳萬壹千六百八拾九圓購買品參千百拾壹圓販賣品參百九拾八圓準備金壹萬五拾圓の巨數を示してゐる而して貯金中異色とすべきものに消費節約貯金三デー貯金奉公貯金等あり消費節約貯金は消費節約の主旨に基き永久に貯金纖積實施し組合員は毎月三拾錢以上の貯金をなすべき義務を有してゐる三デー貯金は毎月上旬を酒ナシデー中旬を禁煙デー下旬を菓子ナシデーとして節約したる金を一口壹圓四拾錢掛として五ヶ年滿期にて百圓を拂戻す方法、奉公貯金は在郷軍人分會員が有事の際に對する特別貯金である。この外定期當座出産記念組合擴張記念據置御成婚記念學童定額の諸貯金があり據置三デー組合擴張消費節約貯金に限つて外勤員が毎日集金に出張してゐる。尚購買部は産業用品に主力を注ぎ經濟用品は季節に共同購入をして居る而してこれ等は各部落の世話役と連絡も密に萬遺漏なきを期し特に家庭用藥に就ては確實な種別を撰定し組合より各戸に配給しつゝある又販賣部は米穀生繭鶏卵莚の販賣取扱にして概ね競爭入札に依つて處理しつゝあるが何れも巨額に達して居る利用部は何處も同じ收穫用、大豆粕粉粋、水撈ポンプ等々發動機の利用であつてこの外葬具の貸與等は費用と勞力に時間を極めて經濟的に利用されて居る尚爰に特筆すべきは醫療所にして村内に醫院なく醫療の不便に因つて創設された劃機的機關である。又農業倉庫は收容力約一萬俵にして年次活用の尺度を高めつゝある尚ほ外に雜誌講讀部、部落懇談會、産業組合青年の養成又敬老會各種品評會を隨時に開催して居るが更らに將來の理想として貯金の増成精穀事業乾繭貯繭鶏卵と飼料の購販育英基金の蓄積圖書設備産業組合婦人會の結成自作農等農村生活の全部面に一層の活躍擴充を期しつゝあるがこれ等は聞くだに快き社會ニュースにして組合長以下幹部にその人あり組員一同の協力を合せたこの偉大な實績は産業組合時代とも謂ふべき現時及び將來に對して明朗にして確たる進路を示すものであり且本縣産業組合史上燦光以つて飾るべき事績である。尚現在の役員は左の諸氏である。

組合長理事　福岡一郎
理事　小野岩夫
同　石井計之祐
同　藤井増吉
同　蒔田常太郎
同　琢磨珍彦
監事　小川三勝
同　丸田博弱
同　杉山仍一

# 上高瀬村信用購買販賣利用組合

上高瀬村は同村を貫流してゐる高瀬川が古來幾度か繰り返す氾濫によつて村民の粒々辛苦の收穫物を奪はれ明治末年ごろに於ける村内の疲弊はその極に達してゐた。此處に當時同村小學校々長たりし小山久吉氏は日夜村勢の振興を念じて心膽を碎いて居たが種々考究の結果産業組合の設立こそ同村唯一の救世主なることに想到して村内有志と相計つて先づ第一歩として村内の一部落を區域とする信用部單營の新名信用組合を設立し組合員八十五名、出資口數百七十六口（一口參拾圓）を得て事業を開始した。時は明治四十四年一月十九日であつた。

而も小山氏は教育家として事業の表面に立つこと能はず第一期は山下吉三郎氏を第二期は藤田武雄氏を組合長に推し氏はその蔭の人として活躍してゐたが大正四年以來同氏自ら組合長として陣頭に立ち事務所も自宅に置き教鞭を採るの側ら早晨より深更まで繁務に沒頭した。而して事務所に用ふる薪炭の如き費消品の一切まで自辨する文字通りの獻身的努力を以て組合發展否村勢充實に一意邁進したのである。

かくてこの精進を續ける事十有七年この間幾度か非難と困苦の嵐に襲はれたが同氏の確固不拔の信念と努力は年と共に組合員を初め村民の感激に信望を集め組合また隆々として躍進を續け大正十三年には購買販賣利用部を新設して區域を全村に擴張し名稱も現在の如く改稱した更らに昭和二年に至るや組合設立後十七年目にして元山陽銀行出張所の事務所附屬建物五棟及び舊農業倉庫五棟、建坪四百十三坪敷地八百二十九坪を買收して現在の場所に移轉擴張するに至つた是正に旭日昇天の概にして今日の發展擴充を招來して居る。

昭和七年度末に於ける概況に於ても組合員數六百七十二名出資口數三千百四十七口、貸付金參拾參萬七千五百九拾八圓貯金拾六萬壹千九百八拾壹圓、組合員外貯金拾參萬七千四百八圓、準備金及各種積立金貳萬八千五百參拾壹圓、農業農倉純益參千五百六拾九圓の巨數を示してゐる。この赫々たる業績を示現せしめた最大功勞者小山久吉氏は昭和四年同村々長より感謝狀を受けしを初めとして同年縣農業倉庫聯合會より感謝狀を昭和五年四月産業組合中央會香川縣支部より表彰狀を更らに昭和七年四月中央會々頭より綠授功勞章を下附され



る等その榮光は實に燦々たるものがある。因みに現在の役員は左記の諸氏である。

| | |
|---|---|
| 組合長 | 小山久吉 |
| 理事 | 藤森藤太 |
| 同 | 詫間季治 |
| 同 | 安藤熊太郎 |
| 同 | 眞鍋竹治 |
| 同 | 内山熊之助 |
| 同 | 眞鍋福次 |
| 同 | 戸城康一 |
| 同 | 白井要 |
| 同 | 安藤善助 |
| 同 | 政本義一 |
| 監事 | 田岡福一 |
| 同 | 前川稠 |
| 同 | 安藤定次 |

# 勝間信用購買販賣組合

三豐郡勝間信用購買販賣組合は純農村勝間村一圓を區域として明治四十四年二月六日創立した當時の組合員數は四百十六名にして組合長に矢野芳隆氏、專務理事に豐島藤三郎氏就任外に理事五名監事三名全十名の役員を以て事業に着手したが未だ一般村民の組合に對する理解乏しく脱退者相次ぐの情勢にして貯金貸付素より意の如くならずその間の苦心は言語に絶するものであつた。

第一回總會後矢野氏組合長を辭するや理事前田萬太郎氏代つて組合長となり豐島藤三郎氏と共に實務に盡瘁したが大正八年豐島氏死去の後をうけて岡田定彦氏專務理事となり組合長を補佐して組合員の統制その他事業の發展に鋭意し此結果大正十五年には貸付金八萬餘圓、貯金七萬圓餘に達し更らに昭和三年度には貸付金拾壹萬圓餘、貯金拾萬圓餘に及び準備積立金壹萬參千五百圓を計上組合員數も三百九十名に增加を見た同年岡田氏死去後專務理事豐島權七氏は爾來打續く經濟界の不況にも善處して漸次健全なる發達を遂げつゝ組合員も

逐次組合に對する理解を深め昭和五年度には組合員數四百四十名を數へ更らに昭和六年度には購買販賣部を新設し岡田嘉幸氏常任理事に就任して組合の活動機構を整ふと共に事業又日進月歩の躍進を見た今や組合員總數四百六十二名、全村戸數の約七割に及び出資總額貳千八百參拾圓に對し諸積立金貳萬貳千百餘圓の巨額に達してゐる。

而して現組合長前田萬太郎氏は就職以來二十有餘年の長歳月に亘り高齢尚壯者を凌ぐ活動獻身的努力を積けてゐる。昭和七年度に於ける業績は貸付金九萬七千五百九拾四圓、貯金拾壹萬四千五百貳拾五圓、準備金六千七百六拾六圓、特別積立金壹萬五千四百拾貳圓といふ盛況を示して居る。尚現在の役員は左記の諸氏である。

組合長　前田萬太郎
専務理事　豊島權七
常任理事　岡田嘉幸
理事　矢野傳一
同　米谷源造
同　香川常治
同　安藤此八
監事　豊島宇三郎
同　後藤信敬
同　前田常吉

## 詫間信用組合

詫間信用組合は大正二年三月同村松田友良氏創立委員長となり創設に着手し組合員二百八十三名、出資口數三百六十二口(一口五圓)を得て事業を開始した而も當時は組合の趣旨未だ徹底せず業績の不振又もとよりであつたが當事者の努力は漸次業礎を築きつゝ大正九年ごろ財界變動による金融の逼迫を体現したこの時一般村民は始めて産業組合の機能と其必要を感ずるに至り爾來利用を集中して昭和六年更に新らたに農業倉庫を開始し今日に至つてゐる。

昭和七年度末に於ける事業狀態は組合員數は一千五十七名出資口數一千六十九口、貸付金拾四萬九千貳百四拾七圓、貯



金貳拾五萬九千百六拾參圓、準備金八千貳百參圓、特別積立金貳千圓、剩餘金金壹千八百拾壹圓の盛況を示してゐる。

現役員は左記の諸氏である。

組合長理事　松田友良
理事　濱本國松
同　安藤清太郎
同　福岡長良
同　田尾增太郎
監事　宮川民治
同　吉久松右衛門

## 比地二村信用購買販賣利用組合

比地二村信用購買販賣利用組合は明治四十三年五月一日の創立にして白井壽懿氏組合長となり翌年四月三日信用部單營の事業を開始し業績を擧げつゝあつたが大正六年三月組合滿期となり一旦解散し更に同年四月二十九日再び組合員六百三十一名、出資口數一千四百四十口を以て新組合を結成した。松岡秀太郎氏は同組合長に就任し信用購買販賣利用事業を開始したが、これ現在の比地二信用購買販賣利用組合である。

目下組合員及び生産者の希望により農業倉庫の建設準備中で之が完成後は全的活躍に入るわけである。尚組合ではその貯金奬勵方法として更生貯金を設け他の貯金より利率を稍高く各部落毎に代表者を定め一口一ケ月二十五錢一人最高限度十口三ケ年滿期として各戸の加入を奬勵してゐるが昭和七年度の事業狀態は貸付金九萬七千五拾壹圓、貯金拾五萬九千九百四拾貳圓、準備金五百四拾五圓。役員は左記の諸氏である

組合長　松岡秀太郎
理事　石井榮光
同　田中龜吉
同　三崎筆次
同　西脇龜一
同　前川藤次郎
同　石井光美
監事　石井朝太郎

## 比地大信用購買販賣利用組合

比地大信用購買販賣利用組合は同村收入役森駒太郎氏等の努力に大正二年五月十六日創立し事務所を同村役場内に置き森雅雄氏初代組合長に就任して同年六月三十日より信用部單營の事業を開始した。爾來日進月歩を以て組合員も和氣靄々たる中に着々業績を擧げ大正十年には購買部を新設大正十四年販賣部利用部を兼營して現在の名稱に改め昭和三年には更に現在場所に事務所を新築し昭和四年農業倉庫を開始する等異常なる躍進の記錄を殘しつゝ今日に至つてゐる。

その間大正十五年の琴平銀行閉鎖によつて一大打擊を受けしも孜々としてその補塡に努めこれを了したが今や愈々本格的躍進の途上にある。しかも組合員はよく組合を理解し常に絶對的信賴をなし肥料の購入の如きも一切を組合に於て取扱或ひは「組合時間」の名稱を附せられる限りは如何なる集會にもその如く時間を嚴守する等律然たる慣習すら作興されて居る。斯くて昭和八年三月二十八日には縣支會より表彰を受くるの榮光を擔つた程であつて昭和七年度末の事業狀態を見るに組合員數三百三十五人、出資口數六百三十二口、貸付金九萬壹千四百四拾圓、貯金十萬九千四百四拾壹圓、準備金貳千七百參拾六圓、特別積立金壹千四百六拾六圓、出資積立金壹千貳百六拾四圓、販賣高五萬貳千九百拾九圓、購買品賣却高貳萬九千九拾八圓、農業倉庫收入七百四拾壹圓四拾九錢等良績を示してゐる。現在の役員は左記の諸氏である。

組合長理事　森　光
理事　瀧川正晴
同　安藤昇平
同　大江善右衛門
同　松岡壽雄
監事　眞鍋隣吾
同　十川龍助
同　桃口宗晴
同　安藤秀和
同　豊島一郎
同　安藤繁松



## 麻村信用購買販賣利用組合

麻村信用購買販賣利用組合は明治四十三年十月廿八日の創立秋山近二氏組合長に就任し組合員百名、出資口數一千百四十九口(一口五圓)を得て麻村信用組合の名稱のもとに信用單營の事業を開始した。爾來年を逐うて進展し大正十一年購買販賣部を新設して現在の名稱に改め更らに昭和七年六月八十二坪の農業倉庫を建築同事業を開始して竿頭更らに一歩を進めたがこの新部面開拓の第一歩として目下筍の市場を開設して加工罐詰の製造をなし以つて阪神地方へ移出すべく計畫もされて居る。

尙昭和七年度の同組合事業狀態は組合員五百名、出資口數一千百四十九口、貸付金拾萬七千五百拾五圓、貯金拾貳萬九千貳百八拾圓、剩餘金壹千貳百拾八圓、特別積立金八百圓、購買品賣却高壹萬貳千四百五拾六圓を示してゐる。現役員は左記の諸氏である。

組合長理事　岩崎久馬吉
理事　近藤狀太郎
理事　香川市右衛門
同　池田茂市
同　松岡頼助
同　大北幸之助
同　河野近治
監事　樋笠甚右衛門
同　藤村基修
同　猪木原嘉市
同　大西丑三郎
同　三好信男

## 下高瀬信用購買販賣利用組合

下高瀬信用購買販賣利用組合は大正四年四月二十五日の創立新庄金七氏組合長に就任組合員二百十五名、出資口數三百九十三口(一口拾圓)を得て信用部單營の事業を開始した。爾

來進展又飛躍を重ねて大正九年下高瀬購買販賣生産組合と改稱更らに大正十二年現在の下高瀬信用購買販賣利用組合に改め信用購買販賣利用の四部を兼營して今日に至つてゐる。

次いで昭和七年度には農業倉庫を建設して最近に於ける收容高米二千三百十四俵麥一千九百九俵を數へ又貯金方法にも御成婚記念貯金御大典記念貯金據置貯金學生貯金等あり昭和七年度の事業狀態を見るに貸付金七萬壹千參百八拾壹圓貯金七萬四千貳百參拾五圓、準備金七千參百四拾四圓、特別積立金參千壹五拾圓を示してゐる。現役員は左の諸氏である

組合長理事　綾　文　平
理　事　岩本芳太郎
同　丸岡時治郎
同　城崎新之丞
監　事　關　仲太郎
同　安彦俣次
同　眞鍋三郎

## 本山信用購買販賣利用組合

本山信用購買販賣利用組合は大正元年十二月の創立篠原彦太郎氏組合長となり組合員八十七名出資口數三百四十六口を得て信用部單營の事業を開始した大正十四年購買販賣部を兼營したがその實際的活動は昭和七年より日用品の購買を初めて開始し尙昭和七年十二月一日には新加入者を募集し出資額を變更すべく一旦解散して昭和八年一月三十日再建、組合員二百七十五名、出資口數九百三十九口(一口拾圓)を以て岩本梅次郎氏組合長に就任更生の意氣も新たに信用購買販賣事業に精進してゐる。現在の役員は左記の諸氏である。

組合長理事　岩本梅次郎
理　事　關　亘
同　金丸彌八
同　藤田金二
同　田井福三郎
同　小西奴太郎
同　兒玉武文



理　事　岩本直節
同　藤田直吉
監　事　島田民治
同　藤田林治
同　白川千代太郎
同　田井一彦
同　安藤智

## 一谷信用購買販賣利用組合

一谷信用購買販賣利用組合はさきに明治四十四年創設され、し信用購買販賣組合を大正十四年一旦解散し同年五月更めて現在組合を設立し組合員百十六人、出資口數二百五十口(一口貳拾圓)を得て信用購買事業を開始した。

爾來年と共に躍進の跡を見せつゝ現在に至つて居るが昭和七年末に於ける組合の概況は貸付金拾萬壹千百八拾五圓、貯金組合員貳萬五千貳百五拾圓、組合員外五萬五千參百貳拾七圓。準備金五千圓、特別積立金四千貳百貳拾八圓、建築準備積立金參千四百八拾七圓、購買品賣却高六千七百四拾參圓を示してゐる。現役員は左の諸氏である。

組合長理事　大森東三郎
理　事　香川啓作
同　岩本磯治
同　大西小三郎
同　細川良助
同　小西大三郎
同　細川喜三郎
監　事　德永荒太郎
同　高橋長太郎
同　篠原豊彦
同　石川新太郎

# 本山生産販賣組合

本山生産販賣組合は大正十年五月二宮、上高瀬、笠田、比二大、桑山、常盤、一谷、本山の八ケ村長發起となり創立、組合長に矢野千馬太郎氏就任し組合員六百二十二名、出資口數一千二百七十八口を得て生産米麥繭の委托販賣を開始した今や百三十坪の大倉庫二棟を有し丸龜市、多度津町、觀音寺町、白方村等の問屋を經て更らに他府縣へも大量販賣を行ひつゝあり。昭和九年度より更らに精穀部を開營し精穀を阪神和歌山縣へ輸出する計畫もある。

昭和七年度に於ける業態を見るに組合員數六百四十二人出資口數一千二百七十三名、貸付金七萬九拾六圓、準備金參千五百七拾貳圓、特別積立金壹千百六拾九圓、保管料壹千貳百六拾七圓、玄米入庫數八千百四十二俵、出庫數八千六百八十三俵、小麥入庫數二千五百五俵、出庫數三千五百七十三俵、裸麥入庫七千四百四十二俵、出庫數六千二百九十五俵、繭入庫數五千五百二十貫、出庫數六千九百二十貫を示上してゐる尙役員は左の諸氏である。

組合長理事　大江善右衛門
理事　田淵箭太郎
同　三野兼彦
同　高野長太郎
同　萩田長治
同　關亘
同　鳥取爲三郎
同　大西榮吉
同　神原作造
監事　田井甚五郎
同　中野楳太郎
同　秋山孝平
同　西谷藤七
同　森光
同　今川定吉
同　篠原友太郎
同　川上象輔



# 桑山信用購買販賣組合

桑山信用購買販賣組合は明治四十三年四月一日の創立にして矢野英憲氏組合長に就任し組合員三百七十八名出資口數六百一口(一口拾圓)を得て信用部單營のもとに事業を開始したが爾來躍進を重ねつゝ大正十四年購買販賣部を兼營し名稱を現在の如く改めた。昭和五年に至り購買販賣部を一時休止し農會に委托して信用部の一途に主力を集注してゐたが昭和八年四月より再びこれを開始し又同組合獨特の鷄卵共同處理場をも新築して同事業の發達を期してゐる。

尙九年度よりは更らに利用部を開始する計畫もありかつて同組合は琴平銀行破産によつて受けし創痍もこれを年次に剩餘金を以て補塡し遂に完了したが又昭和六年末の如きは中央金庫よりの借入金參萬壹千圓を一時に仕拂ふ如き共堅實なる內容と綽々たる餘裕の程こそも窺はれる。斯て大正四年三月十日には郡長より大正六年五月十九日には香川縣支會より表彰されたのであつた昭和七年末の事業狀況は貸付金拾壹萬七千八百八圓、組合員貯金五萬五千七百八拾六圓、組合員外貯金七萬參千五拾四圓、準備金壹萬七千百六拾壹圓に達してゐる現役員は左記の諸氏である。

組合長　宇川虎雄
理事　田淵箭太郎
同　砂留近治
同　石井八十一
同　大森彌八
同　矢野庄九郎
同　矢野秀太郎
同　西谷藤七
同　瀧本勝治
監事　齋藤武七
同　圖子卯市
同　岩田荒太郎
同　加藤松造
同　筒井長五郎

## 常磐村信用購買販賣利用組合

常磐村信用購買販賣利用組合は大正十五年二月十八日の創立にして高橋式三郎氏組合長に就任組合員三百九十名、出資口數七百七十三口を得て信用部單營の事業を開始した。爾來躍進昭和四年に至り購買部を兼營麵及び肥料の共同購入を開始昭和六年販賣部を新設し米麥の販賣を斡旋し同年六月十五日更に農業倉庫一棟を新築しこれを開始した。昭和七年八月には更らに利用部を兼營して葬具の利用を始め近く精穀部をも開始すべく申請中にしてなほこの外將來の計畫として肥料の統制を計る外負債貯金、學童貯金の奬勵販賣購買事業の發達を期して居る。昭和七年度に於ける組合概況は組合員數四百十八人、出資口數八百口、貸付金七萬參千參百貳拾五圓貯金九萬參千四百八拾五圓、準備金貳千八百六圓、農業倉庫收入百九拾參圓、購買益金參百貳拾五圓を計示して居る。尙現役員は左記の諸氏である。

組合長理事　高橋式三郎
理事　安藤家隆
理事　三野兼彦
同　横山濱吉
同　横山嘉平太
同　横山孝平
同　長船友次郎
同　杉村貞彦
同　長野鶴董
同　岡田庄太郎
監事　小西市郎
同　平岡定吉
同　田井孝行
同　長船又一

## 高室信用購買販賣組合

高室信用購買販賣利用組合は大正十四年三月十七日の創立



近藤正直氏初代組合長となり先づ信用購買の二事業を開始した爾來飛躍の一路を辿り昭和六年二月には利用部を新設するに至つた。而して昭和七年度末の事業概況は組合員四百九十二名出資口數一千百四十三口(一口貳拾圓)貯金額拾四萬九千參百九拾八圓、貸付金拾四萬四千八百七拾五圓、購買部日用品肥料飼料等の購買高貳萬八千圓、鷄卵販賣高四千五百圓を示してゐる。現在の役員は左の諸氏である。

組合長　田代貞雄
理事　氏野直一
同　藤原蒔次郎
同　香川重義
同　松浦熊吉
同　松浦鍛三
同　阿部直吉
監事　三谷常一
同　五味僖置
同　小西繁太郎

## 財田大野信用購買販賣利用組合

財田大野信用販賣購買利用組合は大正六年六月伊藤善右衛門氏等の努力により創立し組合員百七十六名、出資口數三百三十一口を以て信用部單營の事業を開始した。爾來年と共に進境を示し大正十三年購買販賣利用部を兼營して現在の名稱に改め今日に及んでゐる。昭和八年度より更らに利用部に於て葬具設備等の計畫もある。

昭和七年度末の業況を示すと組合員數三百七十八名、出資口數八百五十七口、貸付金六萬參拾圓、貯金貳萬四千四百貳拾五圓、組合員外貯金壹萬六千九百八拾七圓、準備金及各種積立金壹萬七千六百拾六圓、購買品賣却高四百九拾五圓に達してゐる。現役員は左の諸氏である。

組合長理事　伊藤彌太郎
理事　山川正伸
同　伊藤孟春
理事　高橋八治
同　田淵虎太

理事　糸川清七
監事　糸川由平
同　伊藤榮助
同　川崎寅吉

## 財田信用購買販賣利用組合

財田信用購買販賣利用組合は明治四十三年十二月廿七日宇野久太郎氏等の努力により創設し組合員二百七十一名、出資口數九百五十一口(一口拾圓)を得て信用單營の事業を開始した。爾來好況を續けつゝ大正十四年度に於て購買部を兼營肥料、鹽、雜貨の販賣を開始し昭和二年よりは倉庫業を開始して今日に至つてゐる。

而もその途次に於て昭和元年の琴平銀行破產により六萬六千圓の損失を受け遂に破產を申請され昭和五年三月の一ケ月間事業停止の止むなかつたが同年十二月和議申請して昭和六年一月より和議財團と新事業とを區別し再び事業を開始した斯くして多難の行路に漸く光明を望み更始一新の奮進に其後二ケ年を經て昭和七年末には組合員八百四十名、出資口數二千九四口、貸付五萬九千貳拾圓、貯金拾萬貳千九百五拾圓、農業倉庫入庫數八百八十六俵、裸麥二千四十四俵、小麥三百八十五俵を示すに至つた。然も最近には六十五坪の支庫を增設すべくその準備中にして村農會と協定して村有地及び組合長近藤氏寄附の土地に農產物共同處理場三十坪を建築し一般農產物及び副產物の處理をなすべく計畫を進めてゐる。現在役員は左記の諸氏である。

組合長　近藤貞吉
理事　近藤秀男
同　小國實治
同　赤坂政右衛門
同　加藤幸次郎
同　神原又三郎
同　大西惣吉
同　高原嘉三
同　佐久良香



理事　川崎重雄
同　小野寛三郎
監事　伊藤喜久五郎
同　込山秀三郎
同　元木儀平
同　近井鹿造

## 神田村信用購買販賣利用組合

神田村信用購買販賣利用組合は大正十年十月岩倉國男氏等の奔走により創立、組合員三百二十名、出資口數三百八十口(一口貳拾圓)を得て事業を開始した。昭和五年四團の事情に依り一旦解散したが更らに昭和五年十二月新組合を設立組合員三百二十五人、出資口數三百八十九口(一口貳拾圓)の加入を得て更新の第一歩を踏み出した。目下の事業は信用部に主力を傾注し更らに村農會と提携して資金は組合より出し事業は農會に於て實施し兩者の活動の合理化に依り米麥、鷄卵、叺肥料、日用品の購買販賣を行ひ昭和八年度に於いては農業倉庫を開始する豫定にして斯の如く農會との渾然一體に融合してその實蹟見るべきあるは他に類例尠く特筆するに足るものである。昭和七年度の事業動態を見るに貸付金貳萬八千八百四拾八圓、組合員貯金參萬八千貳百參拾壹圓、組合員外貯金四萬七拾貳圓、團體貯金九千六百九圓、準備金參百圓、特別積立金貳百七拾七圓等好績を示してゐる。現在の役員は左記の諸氏である。

組合長理事　岩倉國男
理事　近藤朋一
同　門脇利藤太
同　岩倉弘
同　下津森雄
同　安藤幸太郎
同　細川義八
監事　大西久治
同　白川誠一
同　細川克己

## 河内村信用購買販賣利用組合

河内村信用購買販賣利用組合は大正五年五月二十一日創設藤田欵逸氏組合長に就任し組合員二百人、出資口數二百八十四口(一口拾圓)を以て河内信用組合の名稱のもとに信用部單營の事業を開始した。爾來躍進を續けつゝ大正十二年三月廿四日河内村信用購買販賣生産組合と改稱、更らに組合法の變更と共に現在の名稱に改め大正十三年四月一日には農業倉庫を開始した。

而してその間大正十四年頃縣下に小作爭議の勃發せし當時組合員は各自出資口數十餘口を有してゐたが爭議激化と共にそれを移して平等を名目に役員外の組合員は各々一口以外の出資は悉く拂戻を受くべしと唱へ遂に一人一口とした程で是に屈せず邁進した組合は昭和七年度事業狀態も組合員二百名貸付金五萬九千五百七拾五圓、貯金貳拾貳萬四千九百八拾八圓、特別積立金五千百四拾八圓、準備金參千百貳拾圓、購買部賣却高貳萬貳千九百拾壹圓、販賣部米壹萬六千七百八拾九圓、麥七千七百八拾六圓、小麥參千百拾五圓、叺九千參百四拾圓、繭貳千八百五圓、鷄百八拾參圓、利用部大豆粕脫穀籾擂其の他壹千百拾五圓、精穀部米麥貳百七拾圓と云ふ赫々たる業績を示して居る尙組合では將來に於ける生産的方面の面目一新について何らかの施策を考慮中であるが如何にも不撓不屈の精進としなければならない。尙現役員の諸氏は左の通り

組合長　大喜多竹次郎
理事　片桐治平
同　藤川伊之助
同　藤田歌八
同　山本時松
監事　大喜多貫一郎
同　藤田穎逸

## 紀伊信用購買販賣組合

紀伊信用購買販賣組合は大正二年六月十二日安藤達氏等の



努力により創設組合員百九十五人を以て信用單營の事業を開始した。爾來躍進して大正十三年一月二十九日定欵を變更して紀伊信用購買販賣組合と改め大正十四年十一月農業倉庫を開始して現在に至つてゐる。昭和七年末に於ける事業狀態は貸付金七萬貳千七百七拾七圓、貯金總額七萬六千參百八拾八圓、準備金壹萬參千九百參拾五圓、特別積立金八千六百五拾九圓、購買品扱高壹萬七千四百貳拾六圓、農業倉庫入庫數米一千六百十六俵、麥六千三百五俵、現在の組合員數三百八十人、出資口數一千三百八十一口である。

尙昭和八年度に於ては五ヶ年擴充計畫を樹て組合員の加入奬勵貯金の增額、貸付金の整理購買事業普及徹底、販賣事業奬勵、青年聯盟の設立等躍進を期せられて居るが此裡に同組合の功勞者として謳ふべきは設立以來大正十四年まで組合役員として盡瘁せる安藤達氏あり又氏の後をうけて昭和七年まで組合の興隆に努力經營に當りし請川杢治氏等で組合員の敬慕を集めてゐる。現在の役員は。

理事　久保良助
同　安藤信太郎
同　小出直輔
理事　高橋正三
監事　安藤栞
同　近藤如天

## 辻村信用組合

辻村信用組合は大正十一年七月の創立初代組合長に松岡龜亮氏就任し組合四百八名、出資口數一千三百口(一口拾圓)を得て信用單營の事業を開始した。爾來主力を信用部に注ぎ堅實の一路を辿つて業績を擧げつゝあるが購買販賣部は活躍の期に達してゐない、尙昭和七年度末の事業動態は組合員四百七名出資口數一千三百口、貸付金五萬四千七百四拾壹圓、組合員貯金參萬七千百九拾壹圓、員外貯金壹萬百五拾圓、準備金壹萬參千六百五拾圓、特別積立金七千貳百九拾參圓、昭和七年度剩餘金參千七百八拾四圓を以て堅實なる業績を示して居る。現役員は左の諸氏である。

# 豐田村信用組合

豐田村信用組合は大正五年九月五日の創立にして小野高介氏組合長となり組合員二百名、出資口數二百六十五口（一口拾圓）を得て信用單營の事業を開始した。爾來信用部の一路に躍進を續けて最近に至つては購買部兼營の準備として肥料の共同購入資金たる肥料貯金を設けその加入を勸說してゐるが今や總額貳千圓に達するの狀況である。また同時に利用部をも開始し耕具の貸與をなすべくこれも計畫中である。尙昭和七年末に於ける事業概況を見るに組合員數四百二十七人、出資口數五百四十七口、貸付金八萬六百參拾貳圓、組合員貯金五萬四千五百八圓、組合員外貯金參萬六千八百貳拾五圓、準備金壹萬四千八百九拾九圓、特別積立金壹千六百九拾七圓の堅實なる內容を示してゐる。因みに現役員諸氏は左の通りである。

組合長　豐田　豐
理事　次田利夫
同　三好德五郎
同　原本吉
同　宮下義人
監事　松岡龜亮
同　正田基太郎
同　原茜五郎
組合長　小野高介
理事　藤田利三郎
同　大井節太郎
同　大西重一
同　石山鐵藏
監事　杉村善太郎
同　藤田勝治
同　渡邊文治



# 柞田信用購買販賣組合

柞田村信用購買販賣組合は三豊郡柞田村一圓を區域として大正三年創設され秋山清七氏初代組合長となり組合員四百八十二名、出資口數七百十一口（一口五圓）を擁して大正記念柞田信用組合の名稱を以て信用部單營の事業を開始した。爾來飛躍を續けつゝ大正十三年に及び購買販賣部を新設して現在の名稱に改めた而て實際的に活躍せるはただ信用部のみであつたが時運も熟して昭和八年度よりは愈々肥料の共同購入を開始すべく準備中である。昭和七年度末に於ける事業狀態を示すと貸付金貳萬參千貳百六拾貳圓、貯金貳萬六千七百八拾四圓、出資金參千五百貳拾五圓、借入金參千圓、準備金參百四拾參圓を示して居る。現役員は左記の諸氏である。

組合長理事　牧野鶴一
理事　關藤官造
同　大西範平
同　森野長四郎
同　秋山竹太郎
同　田岡增一
同　高橋忠四郎
監事　黑田助右衛門
同　富田嘉平
同　高谷麻々祐

# 大野原信用購買販賣利用組合

大野原信用購買販賣利用組合は大正十二年五月廿四日の創立瀧川靜雄氏初代組合長となり出資口數三千二百口（一口拾圓）を得て信用購買販賣利用部の事業を開始した。その初期に當つて購買部に於ては肥料の共同購入販賣部は麥稈の共同販賣に主力を傾注して漸次その進展を圖りつゝあるが昭和四年度に至つて八十坪の農業倉庫一棟を新築し同事業を兼營した。最近に於ては一ケ年の取扱高米一千二百俵麥八百六十餘俵に上つてゐるが昭和七年度に於ける事業狀態としても組合

員一千八名、出資口數三千三百九十二口（一口拾圓）、貸付金拾貳萬貳百六拾五圓、貯金拾九萬壹千五百圓、準備金九千參百五拾四圓、特別積立金壹千九百六拾圓、購買部參萬參千六拾六圓、販賣部壹千五百貳拾七圓の盛況を示して居る尙同組合は常に消極的堅實主義を以て進み過去に於ても專ら業礎を築くにのみ腐心しつゝ今日に至つたが將來に於ては聊か積極的飛躍を目して販賣部事業も一段擴張すべく目下準備中である現在の役員は左の通り。

組合長理事　瀧川靜雄
專務理事　篠原要之助
理事　守屋保太郎
同　淺野九衛門
同　吉川薫之
同　合田重博
同　高城荒吉
同　尾藤茂次郎
監事　高木初治
同　中井虎男
同　福田源一
同　藤川倉太郎
監事　岡田清七
同　高丸武平
同　細井荒吉

## 萩原村信用購買販賣利用組合

萩原村信用購買販賣利用組合は昭和四年五月二十一日矢野豐八氏等二十數氏創立委員となり協力韓旋の結果創設を見た而して昭和七年十月より事業を開始するの運びに至り先づ同年十月七日より購買部の開始によつて共スタートを切り學生服其の他日用品の購買を韓旋し同年十二月十日より鷄卵の販賣をも併せて開始した。斯くて同年十月末に於ける組合員數は二百四名口數四百九口となつたが未だ所期數には達せずこゝに於て組合長及び專務理事は各戸を訪問熱誠以て加入を勸奬せる結果同年十二月末に於ては組合員二百七十一名、出資口數五百十二口を得るに至つた。尙組合の役員は左記の諸氏である。

組合長　大久保善吉
理事　瀧川良八
同　清水茂三
同　岡下金吉
同　岡田政吉



## 小豆郡

## 池田町信用購買販賣組合

小豆郡池田町信用購買販賣組合は大正十一年七月三十日の創立當時專らその術に當りし八木啓次氏組合長に就任し組合員五百七十名出資口一數千三百二十七口（一口十圓）を得て信用部單營の事業を開始した。爾來年と共に躍進して購買部販賣部を新設し購買部に於ては今や同村使用購買肥料の七割を農會と協力同組合に於て取扱ふの盛況にある更らに昭和二年七月一日には農業倉庫を開始し小麥素麵等を取扱ひ夫々業績を擧げつゝあるが、同組合に於て最も異色とするは役員の熱心努力を印す各組員の組合意識にありことに貸付金の返却方に就ても至極圓滑に行はれ利子の未收入等曾つてなく組合共存觀念とその理解は稀れに見る所である。

斯くして昭和三年三月廿七日中央會縣支會より優良組合として表彰されるに至つたが昭和七年創立十周年記念には其出資金（一口十圓）を現金にて拂戻し他所組合の羨望を爲したこの一事を以ても同組合の堅實性は窺知さるべく今や組合員は出資をなさずして業容を誇る組合を所有經營せる譯であつて縣下組合中でも輝く異風を誇つて居るが、共昭和七年末の現況を見るに組合員七百二十六名貯金參拾六萬八千貳百五拾壹圓、貸付金拾九萬四千五百九拾圓、準備金壹萬貳千九百九拾圓、特別積立金貳千五百參拾五圓の盛觀を示現して居る。尙現在の役員は左記の諸氏である。

組合長理事　高尾藤太郎

理事　萩本清市
同　眞砂員行
同　岡田伊造
同　中塚宮次
同　木村勝治郎
同　野村庄七
同　佐々木幸治
同　中井勘次郎
同　岡茂
監事　三木龜吉
同　岡田善一
同　佐々木和市

## 土淵信用購買利用組合

小豆郡土淵信用購買利用組合は明治四十三年十二月七日土庄信用組合の名稱を以て創設し大森貞資氏組合長に就任組合員百五十一名、出資口數二百六十五口(一口十圓)を得て信用部單營の下に事業を開始した。爾來躍進を續けて大正九年には購買部利用部を新設次いで大正十三年隣村淵崎村を合せ土淵信用購買利用組合と改稱した。而して購買部は主として豆粕の共同購入にして利用部はその購入せる豆粕を粉末とし分配等に當つて居る。昭和七年度の現況は組合員數は七百九十六名、出資口數一千二百十八口、貯金四拾六萬八千百六圓、貸付金拾四萬壹千貳百四拾九圓、準備金及各種積立金貳萬五千貳百貳拾六圓の尨大なる數字を示す盛況にして斯くて大正十三年四月十一日中央會縣支部より表彰された。尚目下農業倉庫の建設準備中にして近く實現せば更らに精彩を添へるであらう。現役員は左記の諸氏である。

組合長理事　大森大造
理事　原田茂
同　大原熊吉
同　緒松五郎
同　蓮池房次郎
同　西瀧彦吉



理事　濱田松次
同　西口勝太郎
同　酒井梅吉
同　岡田儀八
監事　笠居百太郎
同　高橋時治
同　高尾久吉
同　三枝秀治
同　笠井傳太

## 四海信用購買組合

有限責任四海信用購買組合は明治四十二年創設當時同村の出身にて小豆郡長たりし森遷氏の發意に因り創設し氏は直に推されて初代の組合長に就任組合員二百十九名、出資口數三百口(一口拾圓)を得て信用單營の事業を開始した。爾來同氏の獻身的努力と組合員の支持に相因つて同組合現在の盛況に至つたがその業礎を築きし森氏の後を承けた現組合長今下重太郎氏も創立當時より同組合の書記として實際的事業遂行に携り次いで理事となり更らに組合長の榮職に就き組合員の信望を一身に集めて着々業績を擧げてゐる。昭和七年度末の業況を示すと信用部は貯金貳拾貳萬五千六百五拾八圓、貸付拾九萬五千四百拾八圓、購買部は肥料參千四拾九圓、雜貨七百參拾圓の巨數を擧げて居る。尚現在の役員は

組合長　今下重太郎
理事　岡哲道
同　增井治二郎
同　滋田茜太郎
同　石井精一
監事　中岡市十郎
同　九富義正
同　中止木曾治

## 大鐸信用購買組合

大鐸信用購買組合は大正十二年三月三十一日の認可申請同年五月二十九日許可を受け佐々木關太郎氏組合長に就任組合員二百五十三名、出資口數五百二十五口(一口拾圓)を得て先づ信用部單營の事業を開始した。次いで昭和五年購買部を兼營し肥料、地下足袋、石鹸粉、養鶏飼料等の取扱ひを開始し組合員の福祉に適つてゐる尙信用部の貯金奬勵方法中異色ととなすは大正十四年二月より月掛貯金を設けて一ケ月十錢掛三ケ年滿期としてその集金は青年團に委托能率を擧げてゐることである。この同組合が昭和七年度末の業況は組合員數二百九十九名、出資口數五百六十九口、貯金九萬九千八百參拾參圓、貸付金六萬壹千貳百七圓、準備金五千七百六圓、特別積立金四千九拾壹圓を示してゐる。因みに現役員は左の諸氏である。

組合長理事　太田喜十郎
專務理事　佐々木樂治
理事　佐伯梅二
理事　三木駒太郎
同　佐竹幸吉
監事　三浦啓太郎
同　藤原伸藏
同　太田英一
同　羽座重治
同　佐伯辨一

## 北浦信用購買販賣利用組合

小豆郡北浦信用購買販賣利用組合は大正十年三月卅日同村三宅繁氏等の努力に依り創設されたが組合員二百八十二名、口數七百三十五口(一口拾圓)を得て信用部單營の下に事業を開始した爾來順調なる成育を遂げて昭和三年二月廿九日現在の名稱に改め購買販賣利用部を新設して此處に組合の整備全く成り今日に及んでゐる。



昭和七年度末に於て組合員數四百三十六名、出資口數一千二百六十九口、貸付金拾四萬壹千六百七拾七圓、貯金拾五萬參千百四圓、準備金七千八百九拾壹圓、特別積立金五千五百參拾壹圓に達してゐるが同組合に於て奬勵せる貯金中特色をなす更生貯金は自力更生的見地より何等拘束される所なく組合員の自由意志にして定額を設けずこれを取り扱ひ稀に見るの好成績を擧げてゐる。

また購買部の事業は目下主として肥料の共同購入の外に石鹸運動靴等の購入を斡旋し組合員の便益を圖り昭和七年六月參千圓を投じて事務所を新築完工したが爰に於て村民の金融殿堂は更らにその存在を謳歌されるに至つた。現在の役員は左記の諸氏である。

組合長理事　石床菊二
理事　三宅留吉
同　前川角太郎
同　藤本輝二
同　中村正司
同　福原智三
監事　岡上登
監事　黑原長吉
同　藤本濱夫
同　宮本增藏

## 大部村信用購買組合

小豆郡大部村信用購買組合は大正元年八月廿二日の創設同村山本覺治氏等の努力に依り組合員二百四十五名、口數三百二十口(一口五圓)を得て大部村信用組合の名稱のもとに信用部單營の事業を開始した。爾來躍進を重ねて大正十年購買部を兼營し名稱を現在の如く改めて今日に及んでゐる。

而して昭和七年度末に於ける業況は組合員四百六十一名、出資口數七百九十八名貸付金拾九萬六千五百七拾圓、貯金貳拾七萬四千九百參圓、準備金參萬九千五百貳拾四圓、特別積立金壹萬貳千六百四拾參圓の活況を示して居る。尙現在の役員は左記の諸氏である。

組合長理事　橋本仁太郎
理事　椎木政平
同　小川竹三郎
同　砂子正藏
同　杉本政助
監事　山本長五郎
同　三浦多藏
同　母倉淺太郎
同　丸西富士助
同　橋木勝太郎

## 二生村信用組合

小豆郡二生村信用組合は大正七年二月廿一日同村八木治良吉氏等の努力により創設組合員百九十九名、出資口數三百三十三口(一口五圓)を得て八木氏組合長就任信用部單營の事業を開始したその後昭和六年に至り一口拾圓に變更を見たが同組合は創立以來絶對に配當を行はず利益金の全部を積立金としてゐるので一口拾圓も事實上準備金を合算して拾七圓七拾錢に達する堅實振にして初代組合長八木氏は稀に見る人格者そして勤儉力行獻身的努力を以て組合の業礎を確立した功人である現組合長武部安太郎氏は八木氏の素志を繼承して更らに組合の進展に全力を傾注し今日に至つて居るがなほ近き將來には購買販賣部の事業をも新設すべく準備中である。

昭和七年度末に於ける概況を示すと組合員數三百二名、出資口數七百三十九名、貯金拾壹萬貳千五百九拾五圓、貸付金八萬四百拾壹圓、準備金壹萬貳千七百五拾圓、特別積立金八百六拾圓を示して居る。尚役員は左の諸氏である。

組合長理事　武部安太郎
理事　大原牛太郎
同　山口幸七
同　岡野喜太郎
同　須佐美熊吉
同　八木村藏
監事　山元彌市



監事　三木飾造
同　八木金藏

## 草壁町信用購買販賣利用組合

草壁町信用購買販賣利用組合は大正八年一月一日の創立同村中田延次氏組合長に就任組合員數二百三十名、出資口數五百五十四口(一口拾圓)を以て信用單營の事業を開始した、爾來順調なる歩行を續けて昭和二年四月二十一日現在の名稱に改め購買販賣利用部を兼營内容愈々整備して今日に及んで居る現組合長菅豐三郎氏は創立以來の功勞者にして組合員の信望を集め本縣支會より特に功勞者として表彰されて居る。尚昭和七年末に於ける事業動態を見るに組合員數五百四十四名出資口數三千七百十七口、普通貯金九千貳百七拾五圓定期貯金貳拾七萬壹千參百八拾貳圓、据置貯金貳萬參千八百七圓、當座貯金貳萬五千貳拾六圓、小口貯金參萬九千百四拾七圓、積立貯金貳百貳拾五圓、約束貯金壹千六百五拾五圓、家族貯金壹萬貳千參百拾參圓、行啓記念貯金六千八百貳拾圓定期貯蓄貯金貳萬七千參拾九圓、團体貯金壹萬參千五百壹圓特別積立貯金壹萬參千六百參拾七圓の多彩にわたり、貸付金七萬七千六百四拾九圓、手形貸付金拾萬貳千九百六拾六圓、準備金及び積立金壹千貳百參拾四圓、購買品賣却高壹萬八千八拾六圓の盛況にある。因みに現役員の諸氏は左の通り。

組合長理事　菅豐三郎
專務理事　中西延三郎
理事　長西長次郎
同　平地實太郎
同　森伊十郎
同　中田仙治
同　堀久治
監事　山本浪吉
同　橋本龜吉
同　谷上秀吉